深さはいずれも50cm前後を測る。貯蔵穴の壁面は、部分的にオーバーハングする程度である。また、ＳＫ455は四隅にピットを持つもので、覆屋状のものが推定される。この貯蔵穴の床面では板状の材や木質が観察され、本来何らかの敷物を敷いていたことも考えられる。そして、長方形貯蔵穴には、最終的に土器やサヌカイト片が多量に投棄されていた。特に、ＳＫ455、ＳＫ466からは多量の土器が出土しており、ＳＫ455からは長原式と考えられる突帯文土器（胎土は生駒西麓産）が出土している。ＳＫ466からは、高さ約60cmのほぼ完形の壺や、長さ約80cm以上に復元される結晶片岩製の石棒が出土している。また、約半数の貯蔵穴から突帯文土器が出土している。

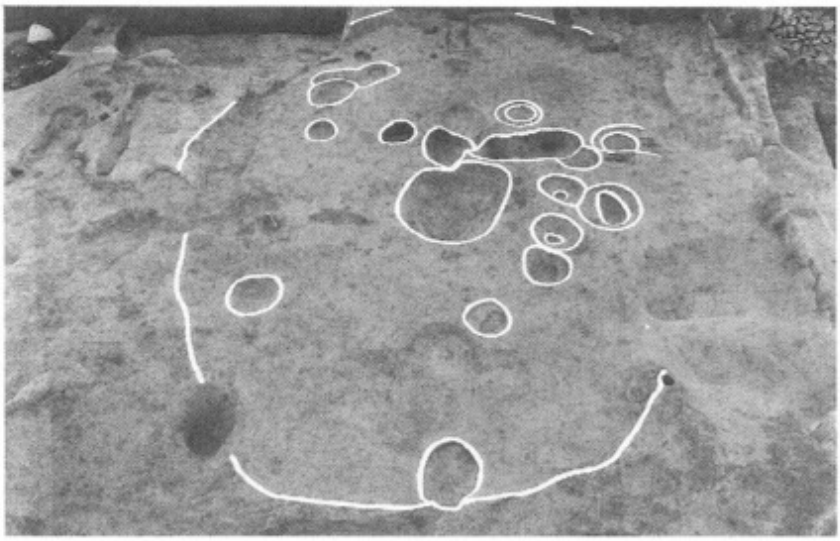

fig.249
ＳＢ401全景
（南から）

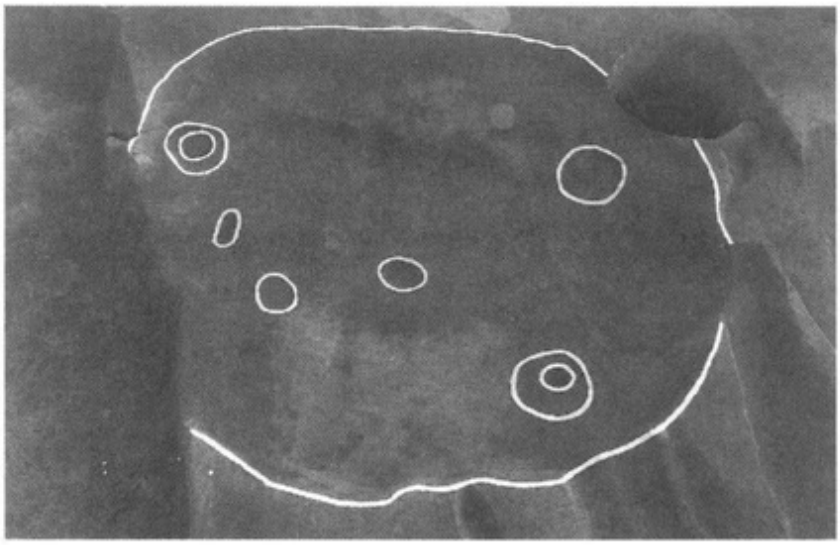

fig.250
ＳＢ404全景
（北から）

出土土器

出土した遺物は、弥生の遺構面が中世段階に全面的に削平を受けているため、顕著な遺物包含層は存在しておらず、ほとんどが遺構内からの出土である。

弥生土器は、甕・壺・蓋・鉢・ミニチュアなどがあるが、甕が7割程度を占めているものと推定される。甕は、口縁部はすべて如意形の口縁で逆L字などの新しい要素は見られない。また、口縁端部には、基本的に刻目を施している。文様については、ヘラ描沈線文を1～3条入れるもの、無文のもの、段を持つものなどが見られる。壺は、完形に復元できるものが少ないが、口頸部間に段を持つものが多く見られる。文様には、木葉文・重弧文・竹管文・斜格子文などがあるが、彩文土器は見られない。蓋は、壺用が1点と甕用が数点出土している。高坏は出土していない。

これらの前期の弥生土器に伴って、突帯文土器が出土している。環濠や住居址をはじめ貯蔵穴・土坑などの主だった遺構で見られる。生駒西麓産の突帯文土器も数点見られる。突帯には、小さな刻目が施されるが、無いものも一部見られる。

出土石器

石器は、サヌカイト製の打製石器を中心に出土している。石鏃は、総数で200点以上出土している。形態は、平基式・凹基式で凸基式は見られない。また、凹基式の中には、岡山県百間川遺跡などで典型的な五角形鏃タイプのものも見られる。石器の中で特徴的なことは、この大開遺跡では石庖丁が出土していないことをあげることができる。また、石斧類も数点出土しているのみである。土坑から出土した遺物の中に、結晶片岩製の磨製石剣の断片が出土している。このほかに、結晶片岩製の石棒が数点出土し

fig.251　大開遺跡環濠出土土器

ている。

第4遺構面では、縄文時代晩期の自然流路を検出している。一部自然流路の肩を検出したところでは、遺構面を確認し土坑などが検出された。遺構面や土坑内からは、晩期の突帯文土器が出土している。また、自然流路の肩付近には土器溜まりが検出され、突帯文土器や浅鉢が見られる。これらの土器は、滋賀里Ⅳ式に相当するものと考えられる。自然流路内からは、滋賀里Ⅲb式や、後期の土器も出土している。

3．まとめ

このように今回の大開遺跡の調査は、規模は大きくはないが弥生時代前期前半の環濠集落をほぼ全掘する結果となり、この時期の集落の一つのパターンを示したものといえる。また、出土した弥生土器は、神戸市内で古段階の遺跡として有名な吉田遺跡のものとほぼ同時期になるものと考えられる。そして、それに伴う形で突帯文土器が出土したり、縄文晩期の祭祀遺物である石棒が残存するなど、縄文時代晩期から弥生時代へ移行する過程を考えていく上で貴重な資料を提示した遺跡といえる。

今後、この大開遺跡出土土器の位置付けや、弥生文化の伝播などが、大きな検討課題となるであろう。

fig.252　大開遺跡出土壺形土器

21. 楠（くすのき）・荒田町（あらたちょう）遺跡

1. はじめに

楠・荒田町遺跡は、六甲山南麓の中位段丘上の緩斜面、標高10～16m付近に位置する縄文時代後期から鎌倉時代にかけての複合遺跡である。当遺跡は神戸市営高速鉄道建設工事に先立つ立会調査によって発見され、昭和53年以降、再開発事業等に伴う発掘調査が実施されてきた。その結果、弥生時代前期末から中期初頭の40基におよぶ貯蔵穴をはじめ、中期前半から中頃の竪穴住居址や掘立柱建物址、中期後半の方形周溝墓、木棺墓が検出されるなど、弥生時代前期から中期の様相が明らかになりつつある。また神戸大学付属病院構内からは、平安時代後半の掘立柱建物址や堀が検出され、福原京関連の遺構の可能性があり注目されている。

今回の調査は、中央区橘通３丁目に所在する市立橘小学校跡地に水道局中部合同庁舎が計画され、その予定地内1,900㎡についての発掘を実施したものである。

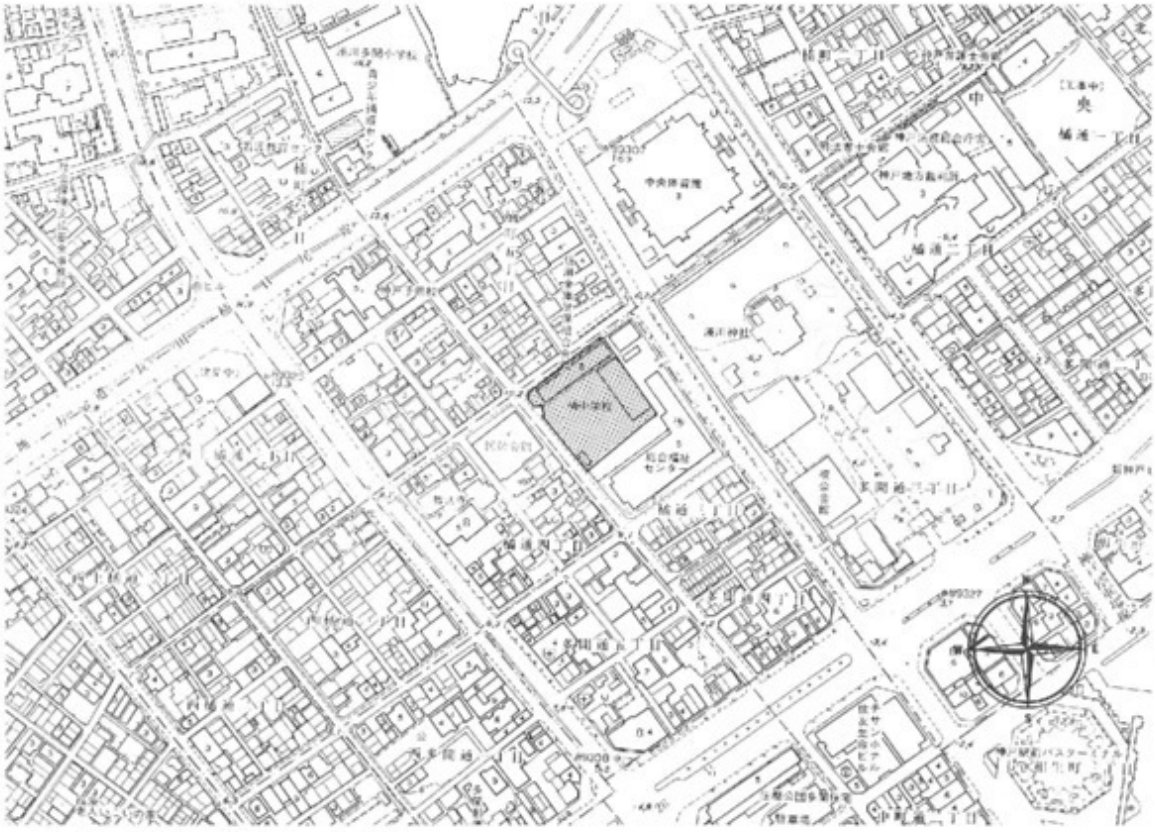

fig.253　調査地位置図　S＝1：5000

2．調査の概要

調査は、近代の盛土や、学校などの現代の建物基礎を重機で除去した後、人力によって遺物包含層や遺構の検出を行った。

調査区の基本的な層序は、現地表から１～３mが近代の盛土、その下が厚さ0.15～0.2mの近代の耕作土で、下層に厚さ0.05mの暗茶褐色砂質土の中世遺物包含層が僅かに存在する。遺構面の基盤層は、花崗岩バイランを多く含んだ黒褐色砂質土である。調査地内には、近世から近代にかけての撹乱が全面に及んでおり、基本的な層序が存在するのは北西隅のごく一部で、他は盛土下に遺構面の基盤層である黒褐色砂質土が検出された。

先述のように、近世から近代に至る撹乱は調査区全面に及び、遺物包含層や遺構の遺存度は極めて悪い。検出された遺構は、古墳時代前期の土坑２基、ピット２基、中世の大溝１条、時期不明の河道等があり、この他にもピットや土坑を数基検出したが、時期を明らかにすることができなかった。以下、遺構ごとに概要を記述する。

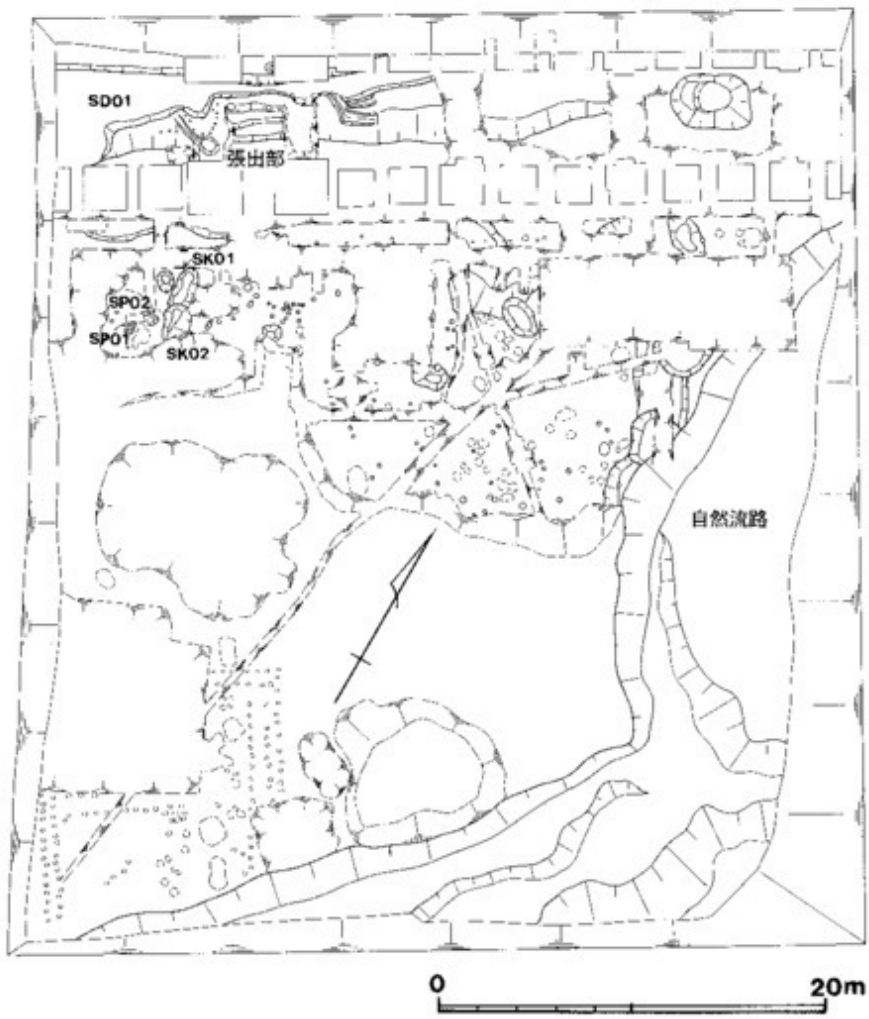

fig.254
遺構平面図

古墳時代前期　古墳時代前期と認められた遺構は、調査区の北西隅角にのみ存在する。この部分は近代の削平深度が比較的浅く、中世の遺物包含層も僅かに存在する。(標高10.2～10.3m)

ＳＫ01　南北２m以上、東西1.5m、深さ0.35mの楕円形の土坑である。近代撹乱によって削平され、正確な規模は明らかではない。土坑底より、古墳時代前期の土師器細片が少量出土している。

ＳＫ02　ＳＫ01によってきられる南北２m(推定2.5m)、東西1.1mの土坑である。ＳＫ01と同様、近代の撹乱によって大きく削平され、深さ0.2mと遺存度が悪い。土坑の埋土中より古墳時代前期の土師器甕等の破片が、少量出土している。

ＳＸ01　南北現存2.5m、東西現存３m、深さはわずかに0.02～0.05mの円形の落ち込みである。埋土は炭化物を多く含んだ暗褐色土で、古墳時代前期の土師器片を僅かに含んでいた。落ち込みの底は水平になっており、竪穴住居址の床面の可能性もあるが、近代の削平が激しく断定できない。

ＳＰ01　直径0.45m、深さ0.1mの円形のピットでＳＸ01内で検出された。ＳＸ01との関係は不明であるが、埋土中より古墳時代前期の土師器細片が僅かに出土している。

ＳＰ02　南北0.4m、東西0.55m、深さ0.05mの楕円形で、ＳＸ01内で検出された。埋土は、炭化物を含む暗茶褐色土で、古墳時代前期の土師器片と共にフイゴの羽口片が出土している。鉄滓等は出土していない。

平安時代後期～鎌倉時代　当時期と認められた遺構は大溝（ＳＤ01）で、10数基検出したピットや土坑の詳細な時期は不明である。

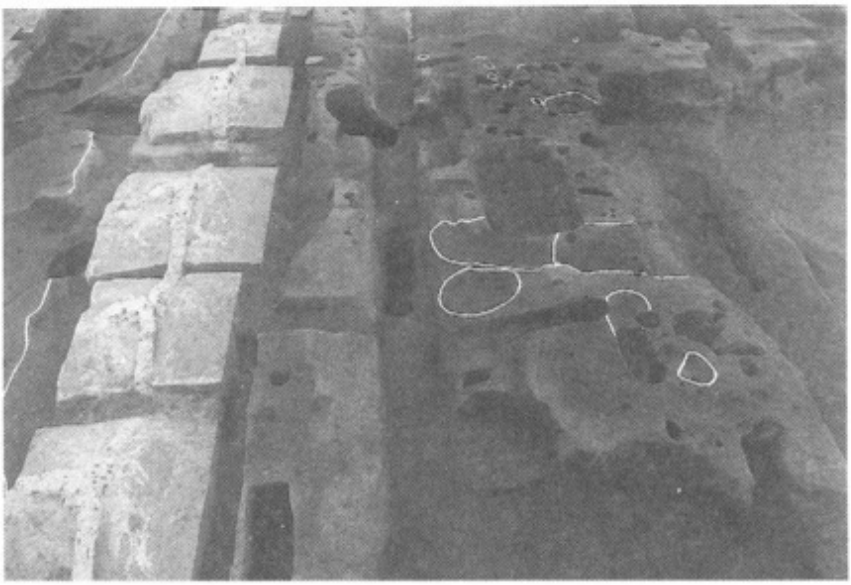

fig.255
ＳＫ01・02
ＳＰ01・02
完掘状況（西から）

ＳＤ01

調査区北端で、全長29mにわたって検出された。学校校舎の基礎によって削平されている部分が多いことや、大半が調査区域外である北側に位置しているため詳細な規模は不明である。調査区域内で知りえた規模は、遺存度の良いところで、幅4.5～５m以上、深さ１～1.4m以上を測る。

溝は２段に掘り込まれており、南岸から北へ1.7mは、約25°の傾斜をもって掘下げられ、幅1.7mの水平面を設けて、一旦、深さ約0.6mに整え、更にその北側に、深さ0.8mの箱掘り状の溝を形成している。よってこの溝の形成過程は、まず、深さ0.6m程度の逆台形状の溝を掘込んだ後、その溝の心々と思われるところを中心に、深さ0.8m程度の箱掘り状の溝を形成したと思われる。埋土は、上段は暗褐色土によって覆われているが、下段の箱掘状の溝内には、シルトと砂の互層をなしており、水が流れていたことが窺える。水は下段の箱掘り状の溝を東から西へ流れる構造をとっていたと考えられる。なお、南岸から北側に張出部（ＳＸ01）を付属施設として持っている。

時期は、僅かに出土した遺物から、おおむね12世紀後半から13世紀前半頃と考えられる。

張出部

大溝の南岸に取り付く張出部を調査区の西端で検出した。この張出部の盛土は、0.03～0.05mの厚さで、砂質土と粘質土を交互に盛り土する版築によって、高さ0.3～0.45m、幅（南北）７m、南岸から北側に2.5m張り出す土段を造り上げている。この張出部の東側には、幅0.2～0.3mのＬ字状の小溝が４条が存在する。この小溝は、張出部の護岸施設かあるいは盛土を築成する際の枠組の痕跡かと思われる。４条の小溝は、切り合っており、最低４回の補修が行われたことが窺われる。

また、張出部上面北端に柱穴状のピットを、東西に２間分検出した。下

fig.256
ＳＤ01
完掘状況（西から）

段の溝内にも対になると思われる柱穴2基を検出した。柱穴間距離は2.1mで、その状況から構造橋の橋脚部の可能性があるが、柱穴が小規模なことや対岸の状況が不明のため、検討の余地がある。

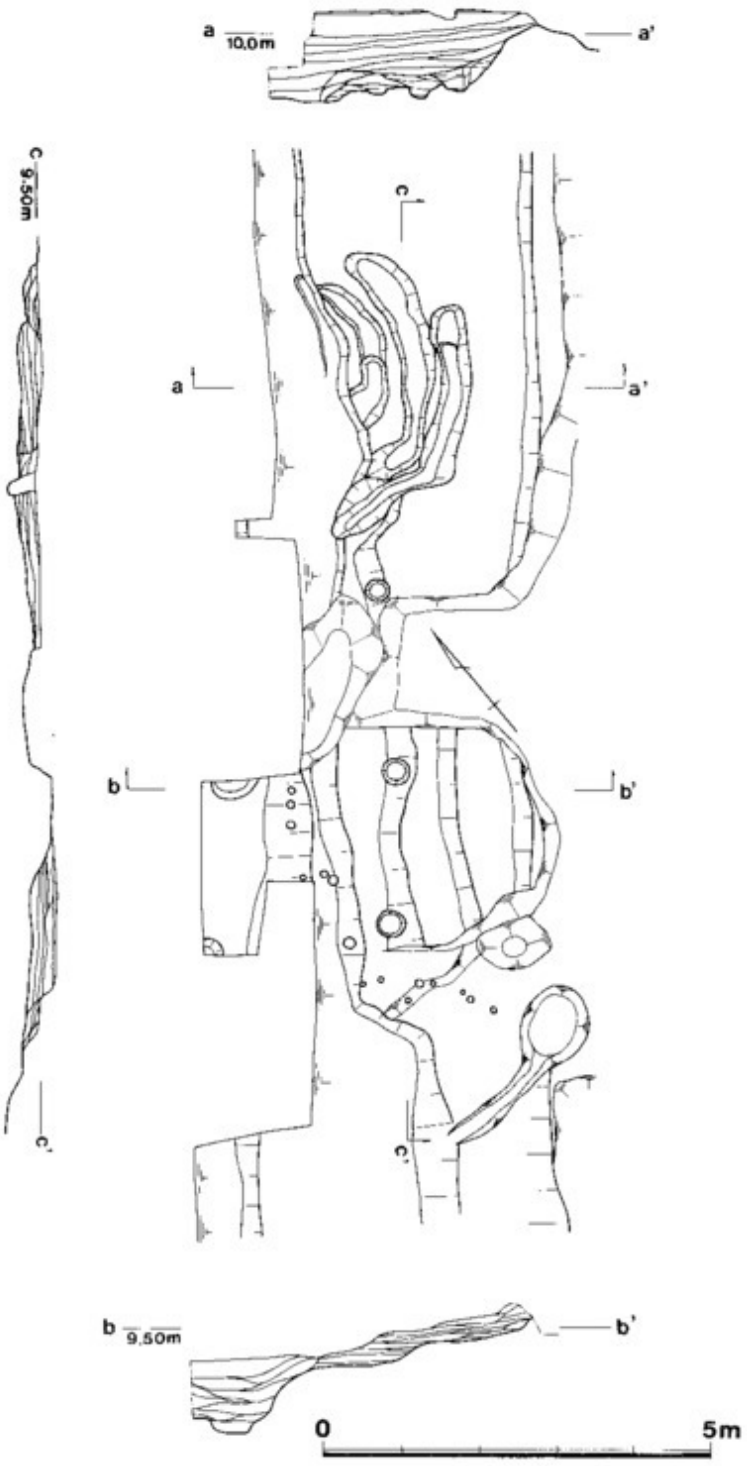

fig.257
SD01内張出部
平面・断面図

自然流路　幅10m以上、深さ２m以上で、調査区域外南及び東側に向かって下がって行く。出土遺物は全くなく時期は不明である。自然流路というよりも、段丘崖である可能性が高い。

3．ま と め

今回の調査では、古墳時代前期の集落の存在を窺わせる資料を得ることができた。また、調査地の南半分が落ち込んでおり、段丘崖であることが考えられる。調査区内をみても遺構面との比高差が２m近くあり、遺構は認められない。よって、調査区は当遺跡の南東限に位置していることが明らかとなった。

また、今回検出された大溝の方位は、条里地割りの方向に酷似している。湊川神社北側の東西の道は古代山陽道に比定する説があり、この大溝との関連が注目されるが、今回の調査では断定できるような資料を得ることができなかった。今後、調査の進展を待ち、検討されるべき課題である。また、この溝の時期が12世紀後半から13世紀代に位置づけられることから、福原京関連の遺構としても充分考えられ、周辺の調査の進展が待たれる。いずれにしても今回検出された大溝は、検出された部分を復元しても10m以上の幅を持っていたことが窺える。大溝築造にかかった労働力の大きさと、高度な土木技術を持った人々の存在を窺い知ることができる。

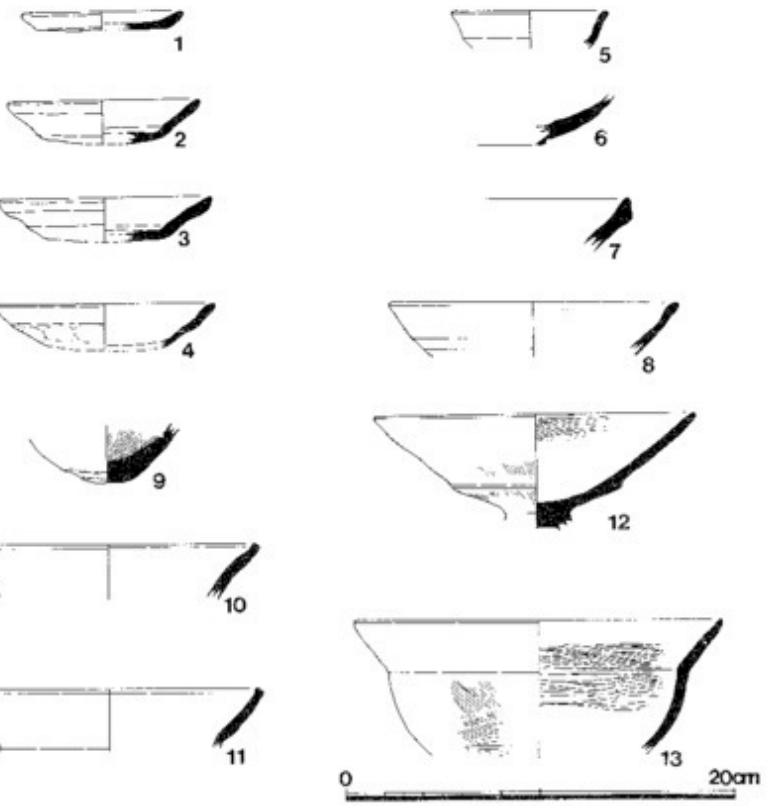

fig.258
楠・荒田町遺跡
出土土器
1～8：大溝(SD01)
9～11：SK02
12～13：SP02

22. 熊内（くもち）遺跡

1．はじめに

熊内遺跡は六甲山南麓の傾斜変換点付近の生田川右岸に位置する。付近には古くから知られた布引丸山遺跡が存在するほか、遺跡周辺でも旗塚や生田町古墳など大小の古墳が存在していた。しかし、早くから市街地化したため現在はみることはできない。

今回の調査は、共同住宅建設に伴うものである。建設に先立つ試掘調査の結果、平成元年８月31日には遺物包含層２層が確認され、次いで10月２日にはピット１基が確認された。このため、建物の基礎部分172㎡について発掘調査を行うこととなった。

2．調査の概要

基本層序は、盛土、暗褐色粘質砂、淡褐色粘質砂、暗灰褐色粘質砂、黒色粘質砂（Ⅰ）、暗灰色粘質砂（Ⅱ）、淡黄色粗砂（地山）となっている。

調査は、盛土以下Ⅰ層上面まで機械掘削で行った。しかし、調査区の北側３分の２は北東隅の一部を除いて近世以降の畑地によると考えられる撹乱をうけており、撹乱層下で地山を検出している。従って、南側約３分の

fig.259　調査地位置図　S＝1：5000

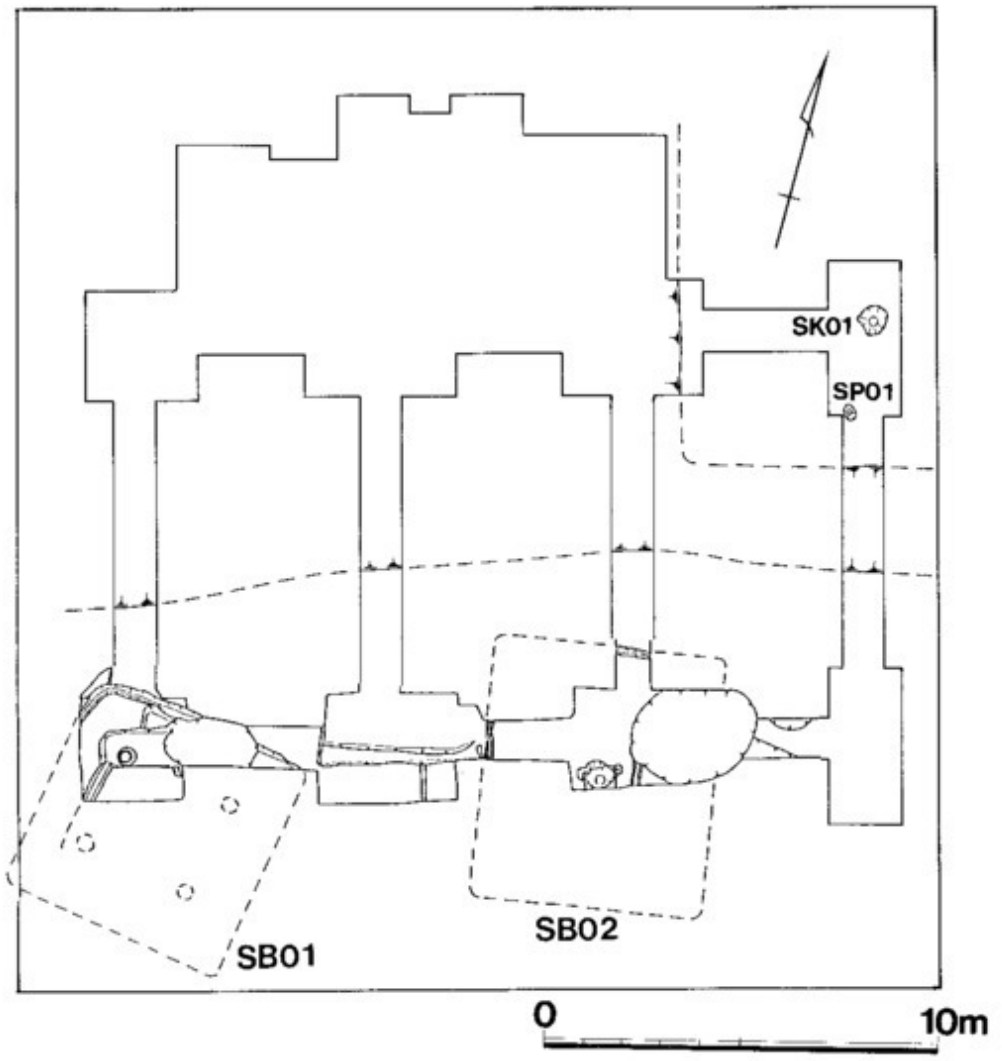

fig.260　遺構平面図

1と北東隅の一部について人力掘削により調査を行った。

Ⅰ層は、弥生時代の包含層で、特に住居址の存在する直上付近で土器が集中して出土している。

検出された遺構は竪穴住居址2棟、土坑1基、ピット1基である。

SB01　一辺約6mと推定される方形の竪穴住居址である。周壁溝が存在しており、西辺部分のみであるが幅約1mの屋内高床部を確認している。屋内高床部と床面との間にも溝が存在している。いずれも四周するか否かは不明である。主柱穴は1基検出しているが、その位置から4本柱であったと推定される。

fig.261
ＳＢ01全景（南から）

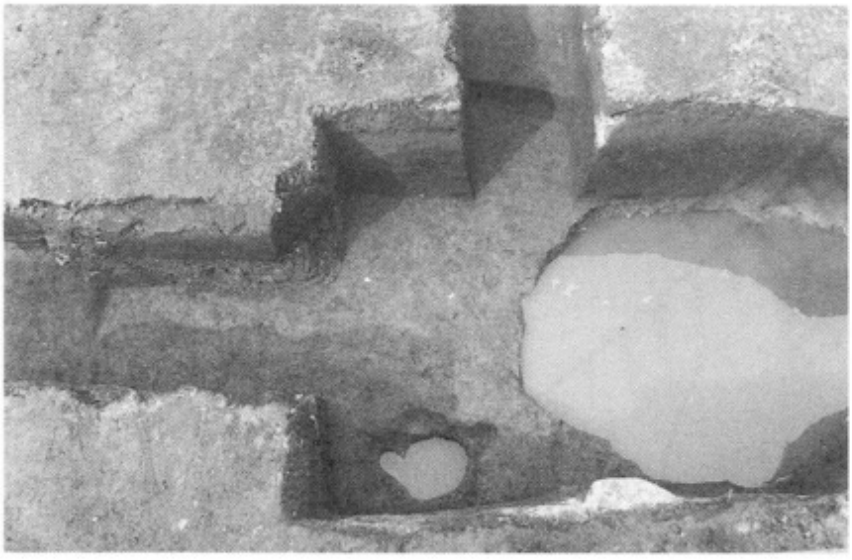

fig.262
ＳＢ02全景（南から）

ＳＢ02　６×6.8mと推定される長方形の竪穴住居址である。北側は壁と周壁溝が確認できたが、西側は壁が削平を受けており、周壁溝が確認された。柱穴は確認されなかったが、中央土坑が検出された。また、中央土坑の東側に高さ５cm程度の土堤状の高まりが検出されているが、中央土坑とは反対側に屈曲しており、中央土坑をとりまいていたかは不明である。

ＳＫ01　径80cm、深さ35cmの円形の土坑である。埋土中から弥生土器が出土している。また、ＳＰ01からも同様の土器が出土している。なお、これらの遺構は、ＳＫ01を中央土坑として、ＳＰ01を主柱のひとつとする竪穴住居址であった可能性がある。断面では壁の立ち上がりが確認されていないが、削平によるものとも考えられる。

3．まとめ

今回の調査は、建物基礎部分のみの調査であったため不明な点が多かったが、弥生時代後期から庄内式併行期にかけての竪穴住居址２棟が検出され、また住居址の可能性のあるものが１棟検出された。

これまで、付近では当遺跡の北方約500mに位置する弥生時代中期後半の布引丸山遺跡が知られている程度で、一帯の遺跡の状況は不明であった。熊内遺跡は、今回の調査で新たに弥生時代の集落址として確認された。

fig.263
調査区全景
（南から）

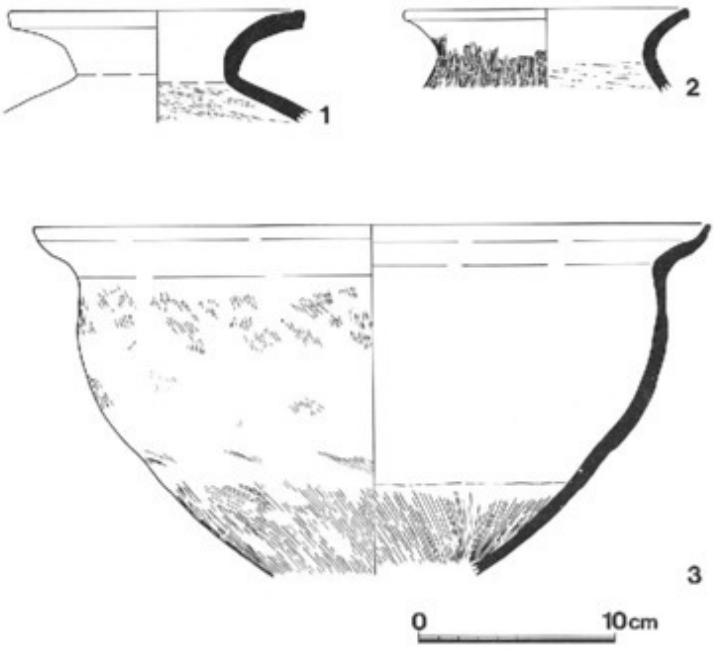

fig.264
熊内遺跡出土土器
（いずれも包含層出土）

23. 日暮（ひぐれ）遺跡

1．はじめに

当該地は工場であったが、マンション建設の申請が出され、昭和63年度に試掘調査を行ったところ、遺物包含層および柱穴状の遺構などを確認し、2面以上の遺構面の存在が予想された。平成元年9月11日よりマンションの基礎部分約530㎡について全面発掘調査を行った。

周辺の地域は、近代初頭頃から市街地化が進み、遺跡の存在は今日まで知られないままであった。日暮遺跡は、昭和61年に今回調査地の西方、約200mに位置する市営日暮住宅建設に伴い発見された。第1次調査は、同年同住宅建設予定地において実施された。その結果、古墳時代中期の竪穴住居址2棟、平安時代中期から後期の掘立柱建物址10棟などの遺構が検出された。また、平安時代の掘立柱建物址築造に伴う地鎮遺構が6ヵ所検出されている。今回の調査は第2次調査にあたる。

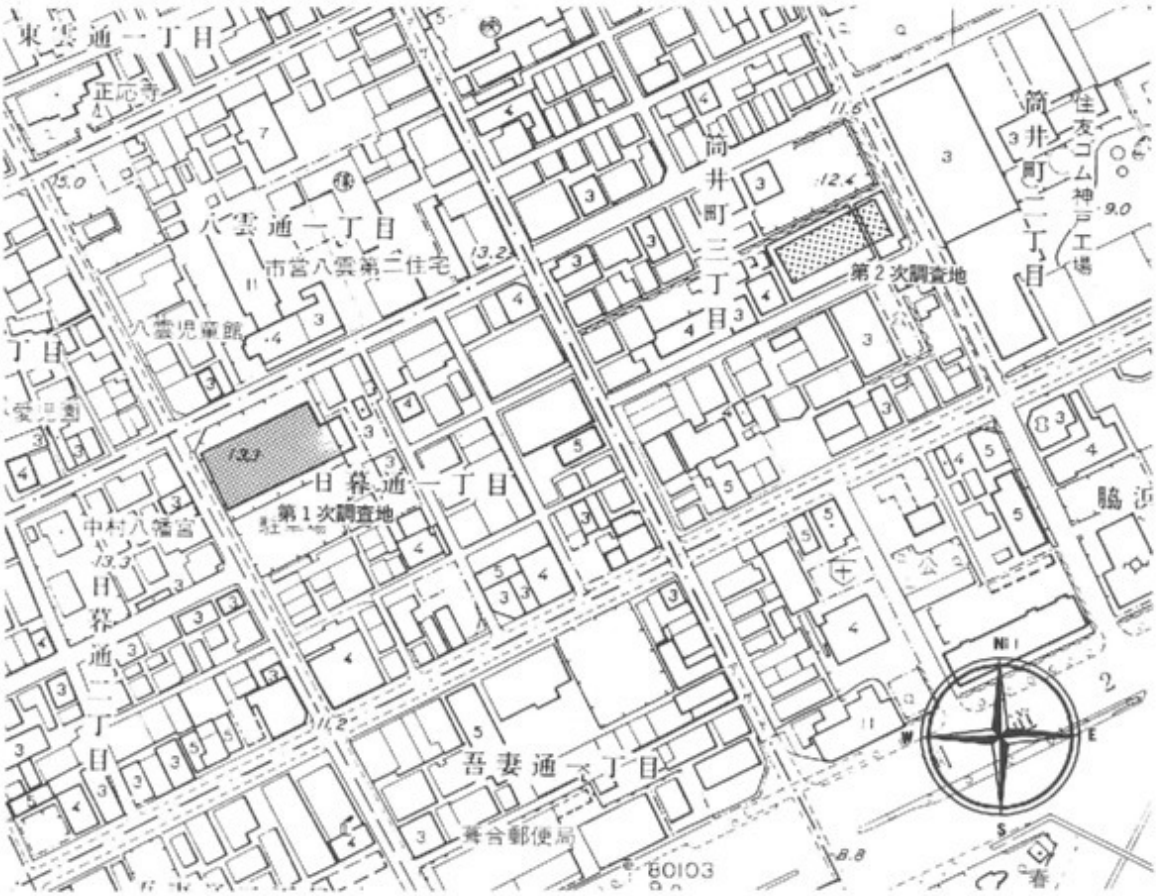

fig.265　調査地位置図　S＝1：2500

2．調査の概要　調査は、旧耕土までの表土をバックホーにより掘削したのち、以下人力による掘削を行った。

基本層序は、表土（現代盛土）、灰色シルト質粘土（旧耕土）、黄褐色粘質砂（床土）、暗褐色粘質砂（遺物包含層）、褐灰色粗砂ないし細砂（遺物包含層）、灰黄色砂質粘土、黒色粘土となっている。しかし、旧地形は西から東に向かって傾斜しており、以上の層序が存在するのは調査区東半付近に限られる。調査区の西端付近では表土直下で黒色粘土が検出されるような状況である。

遺物包含層である暗褐色粘質砂層中からは、古墳時代から中世にかけての須恵器、土師器のほか、土錘が多く出土している。土錘は、ほとんどが比較的小型のもので、有孔土錘・有溝土錘・管状土錘の３種類がみられる。また、地区南西付近の黒色粘土層直上の遺物包含層中から縄文時代晩期後半の深鉢片が出土している。また、褐灰色砂層中からは少数であるが、弥生土器片が出土している。

遺構面は３面確認された。第１遺構面では、近世の水田に伴う暗渠と井戸が検出された。第２遺構面では、奈良時代から中世のピット群、土坑や流路などが検出された。第３遺構面では、６世紀後半～７世紀代の掘立柱建物址が検出されている。

第１遺構面　旧耕土面は、段状に整地されており、地区内では西側３分の１と北側の４分の１がそれぞれ一段高くなっている。それらの旧耕土および床土除去後、第１遺構面となる暗褐色粘質砂が現れる。

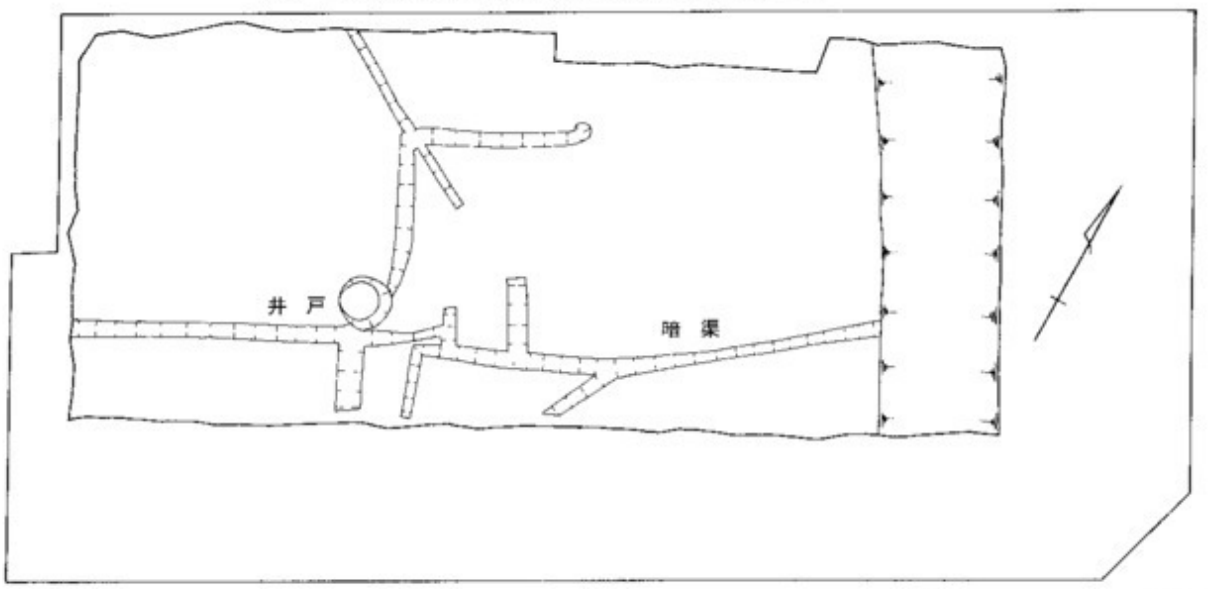

fig.266　第１遺構面平面図

第１遺構面では、旧耕土に伴う石組による暗渠と井戸１基が検出された。暗渠は幅50cm～１m、深さは削平されて残りの悪い部分もあるが40cm前後を測る。暗渠からは、近世および近代の遺物が出土しており、時期の判明する遺物として江戸時代の備前焼の擂鉢がある。

井戸は、径約１mの円形で上から約１mぐらいまでを20～40cm大の河原石を組み、以下は板材を用いて木枠としている。遺構面から約２m掘り進んだ段階で湧水が激しく、それ以上の掘削は行わなかった。掘形は、径約２mの円形で、暗渠を切って穿たれている。従って、この井戸は暗渠よりもさらに新しく、近世後期から近代はじめ頃に築造され、暗渠とともに少なくとも水田廃絶まで使用されていたものと考えられる。

fig.267
石組井戸検出状況

第２遺構面

暗褐色粘質砂除去後、褐灰色砂層上面においてピット、土坑、流路などを検出した。ピットは調査区北東付近に集中し、他は中央付近と西側の黒色粘土層上面で数基が検出されているに過ぎない。ピット内からは遺物があまり出土していないが、北東の集中個所の内の１ヵ所からは８世紀前半頃とみられる土師器の坏が出土している（ＳＰ01)。ピット群の内で掘立柱建物址などを構成するような柱通りは認められなかった。

流路は２条検出され、いずれも西から東へ緩く傾斜している。流路１は、幅1.5m前後で深さ40～60cmを測る。中からは遺物はほとんど出土せず、土師器の細片が数点出土したにすぎず時期は不明である。流路２は、幅1.3m前後で深さ40～50cmを測る。こちらも遺物の出土は少ないが、平安時代末期の羽釜片が出土している。調査地区内では２条であるが、西方の地区外で１条に合流するものと考えられる。

この他に土坑が数基検出されたが、いずれもその性格は不明である。

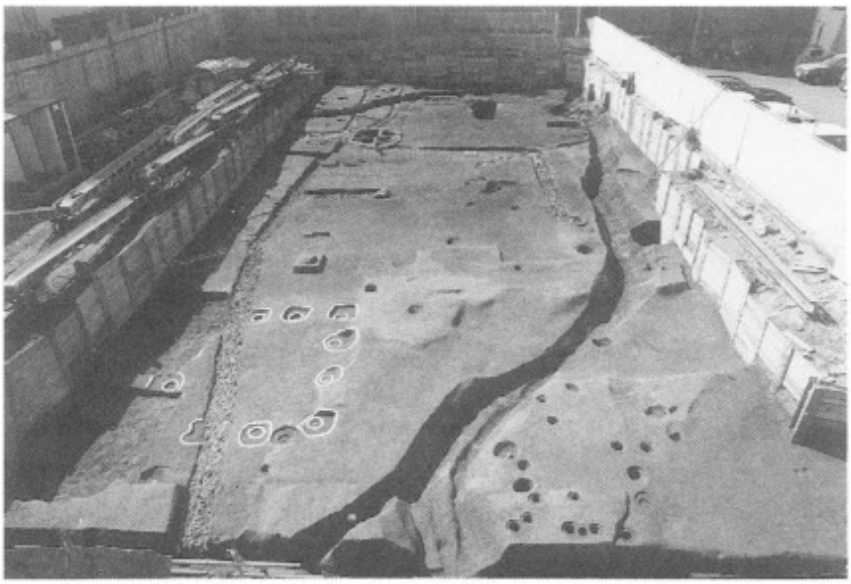

fig.268
第２遺構面全景
（東から）

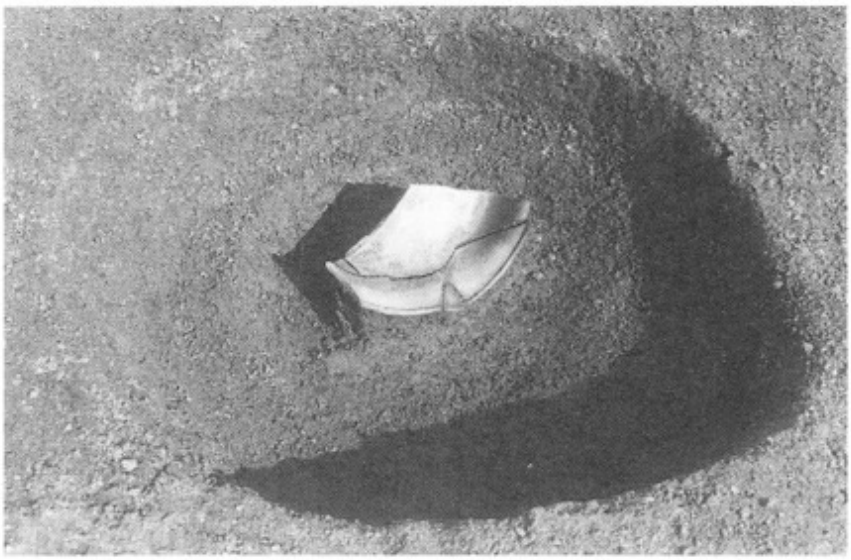

fig.269
柱穴内出土土器
（ＳＰ01）

第３遺構面　調査区の東半分に残る褐灰色砂層以下の洪水砂状の層を10cm程下げたところで、一辺70cm前後の方形の遺構が確認されたため、その面で精査を行ったところ４間×４間の掘立柱建物址（ＳＢ01）１棟が検出された。南側の桁方向は撹乱のため柱穴１基と掘形がほんのわずか残存するのみであった。桁行3.55m、梁行3.2mの正方形に近い建物である。主軸は北から東へ約35度振っている。柱穴の掘形は１辺60～70cmの方形で、柱は20～28cmを測る。遺物は、掘形の埋土内から６世紀後半頃の須恵器片が出土している他は細片が若干みられるのみである。建物の時期は、柱穴掘形の須恵器片以降で、第２遺構面ピット出土の８世紀前半の土師器坏以前であると考えられる。検出された掘立柱建物址はこの１棟のみで、これを含む建物群

は調査区の東側に展開するものと考えられる。

その後、褐灰色砂層を掘削し、黒色粘土面まで検出したが、遺構は確認されなかった。

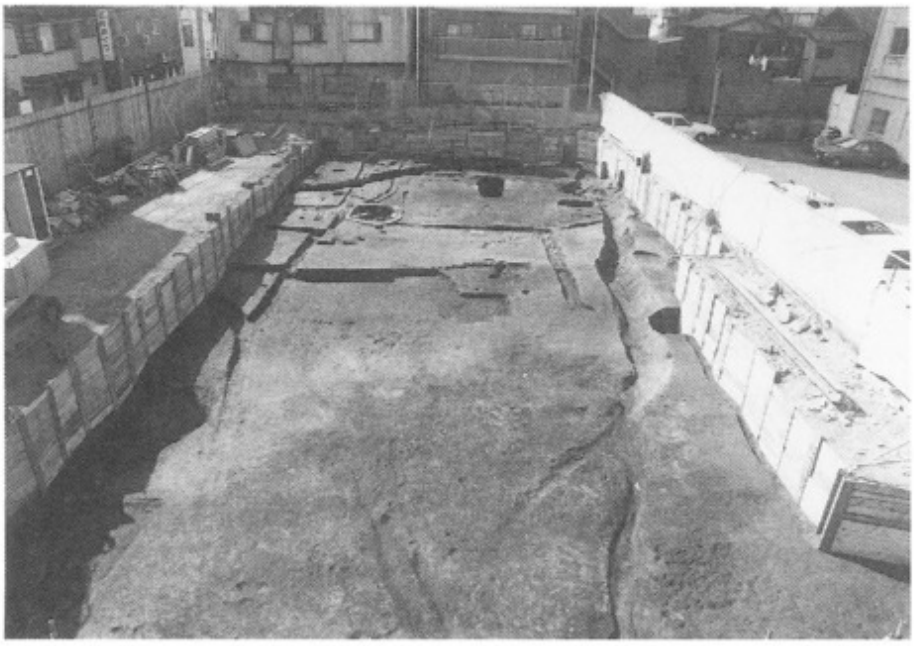

fig.270
最終遺構面
検出状況
（東から）

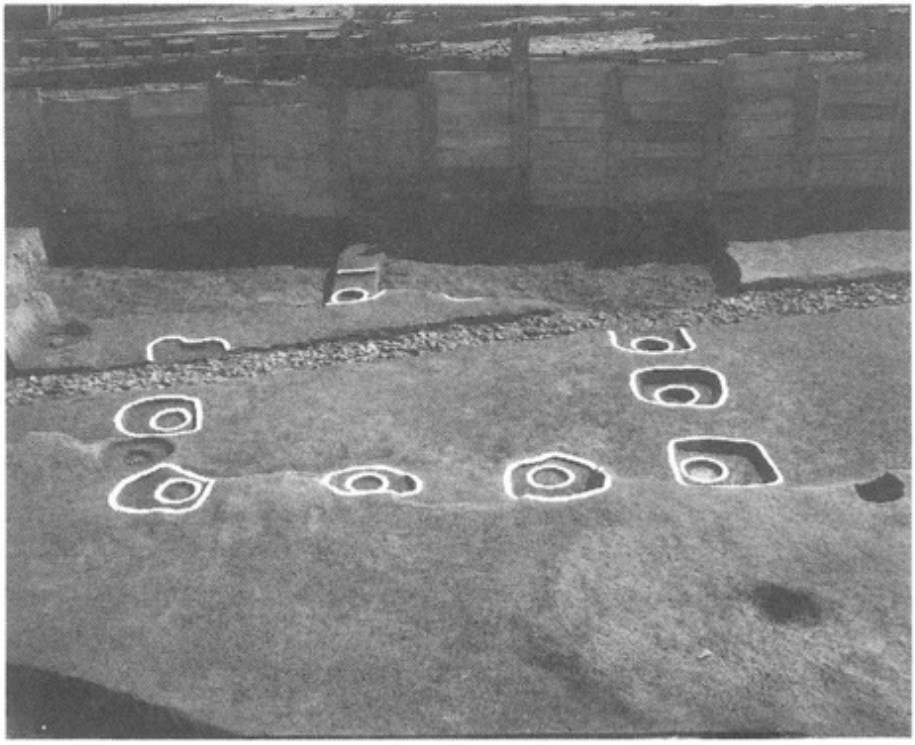

fig.271
掘立柱建物址
ＳＢ01
（北から）

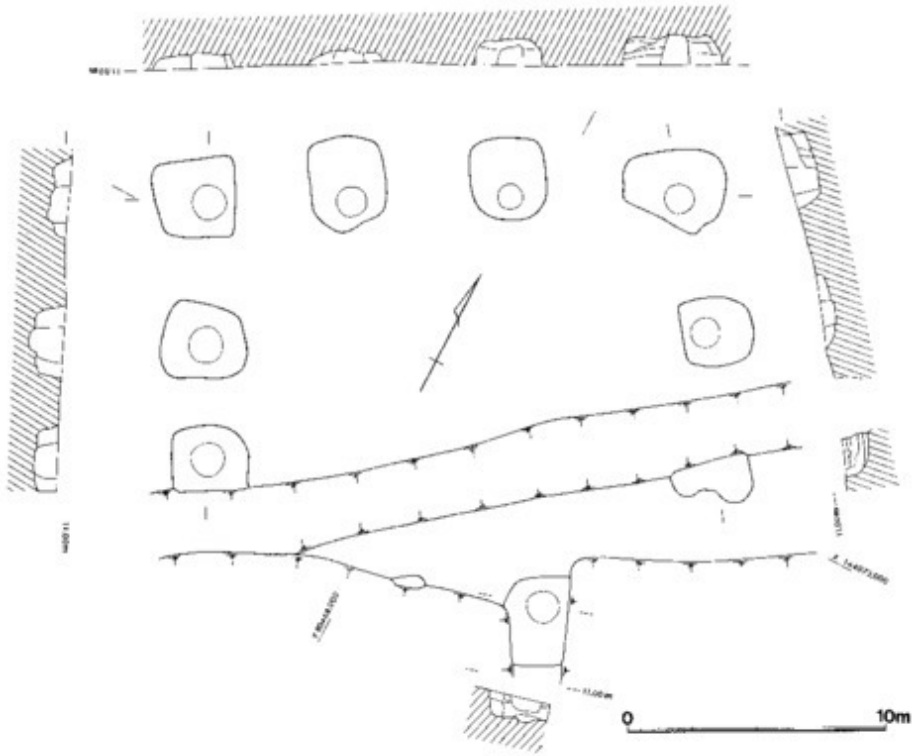

fig.272　ＳＢ01平面・断面図

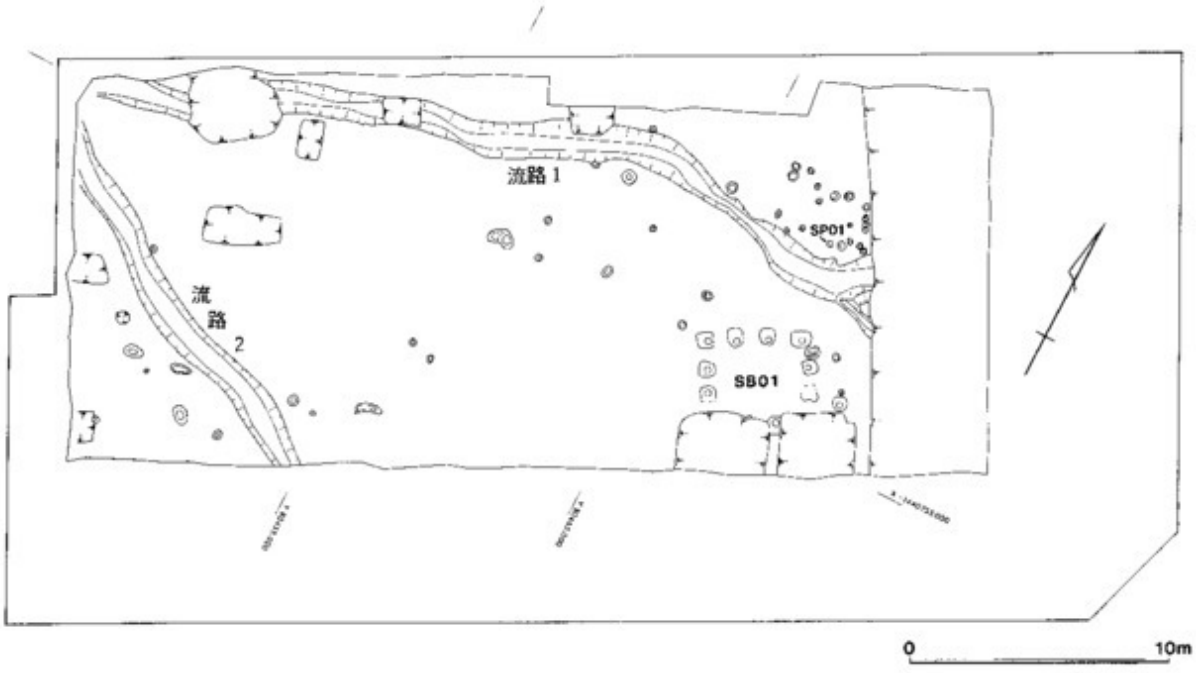

fig.273　第２・第３遺構面平面図

3．ま と め

今回の調査地は、第１次調査地点から東へ200m程に位置し、層序も似ていたため多数の遺構の存在が予想されたが、検出された明確な遺構は、平安時代末期から鎌倉時代初期の流路２条と６世紀後半～７世紀代の掘立柱建物址１棟のみであった。また、調査地は現在でも海岸から600mほどのところに位置しており、かつてはかなり海に近接していたものと考えられ、多くの土錘の出土は、この地の居住者らが漁撈活動にも携わっていたことを示していよう。

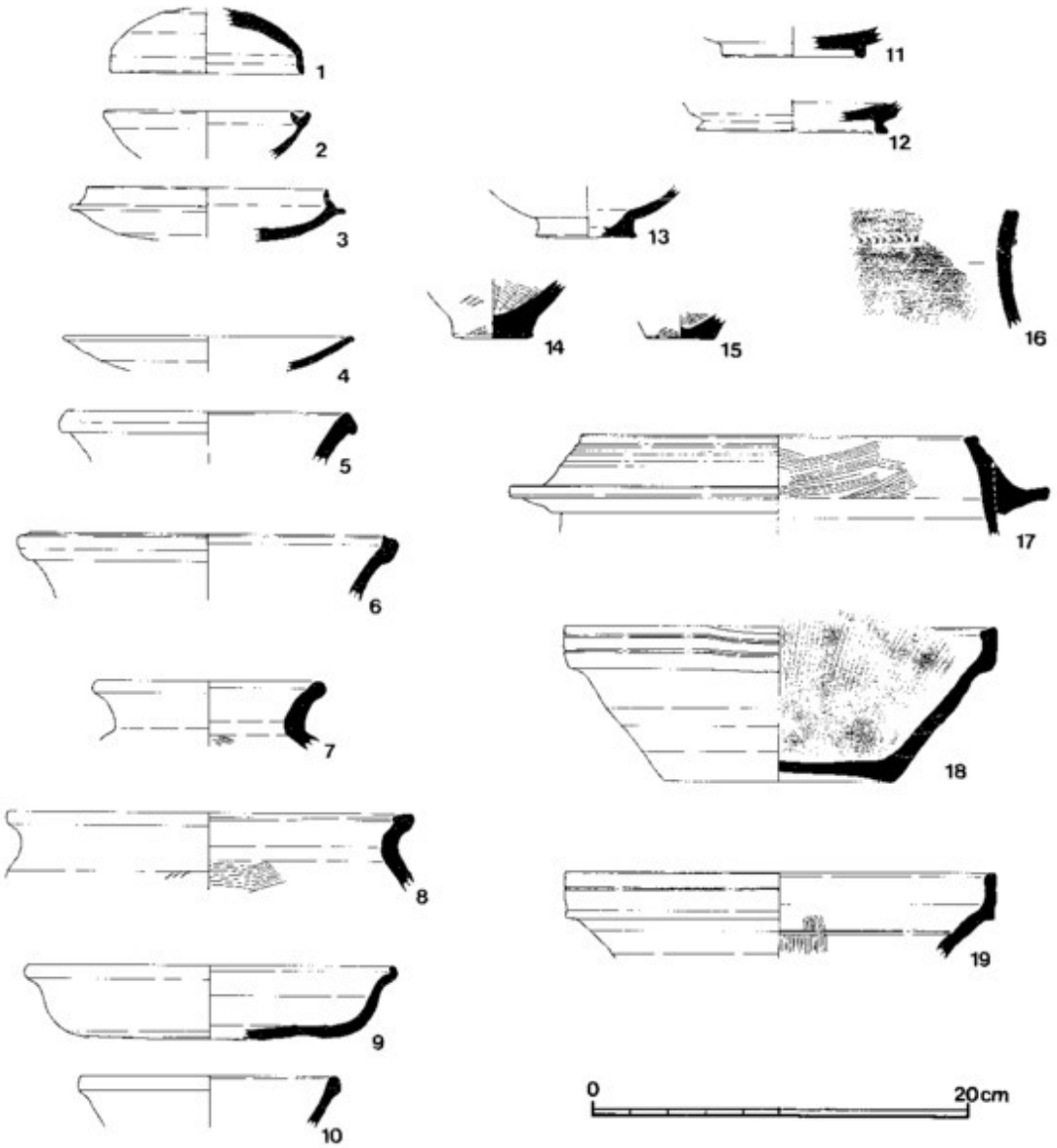

fig.274　日暮遺跡出土土器　16：S＝1：3

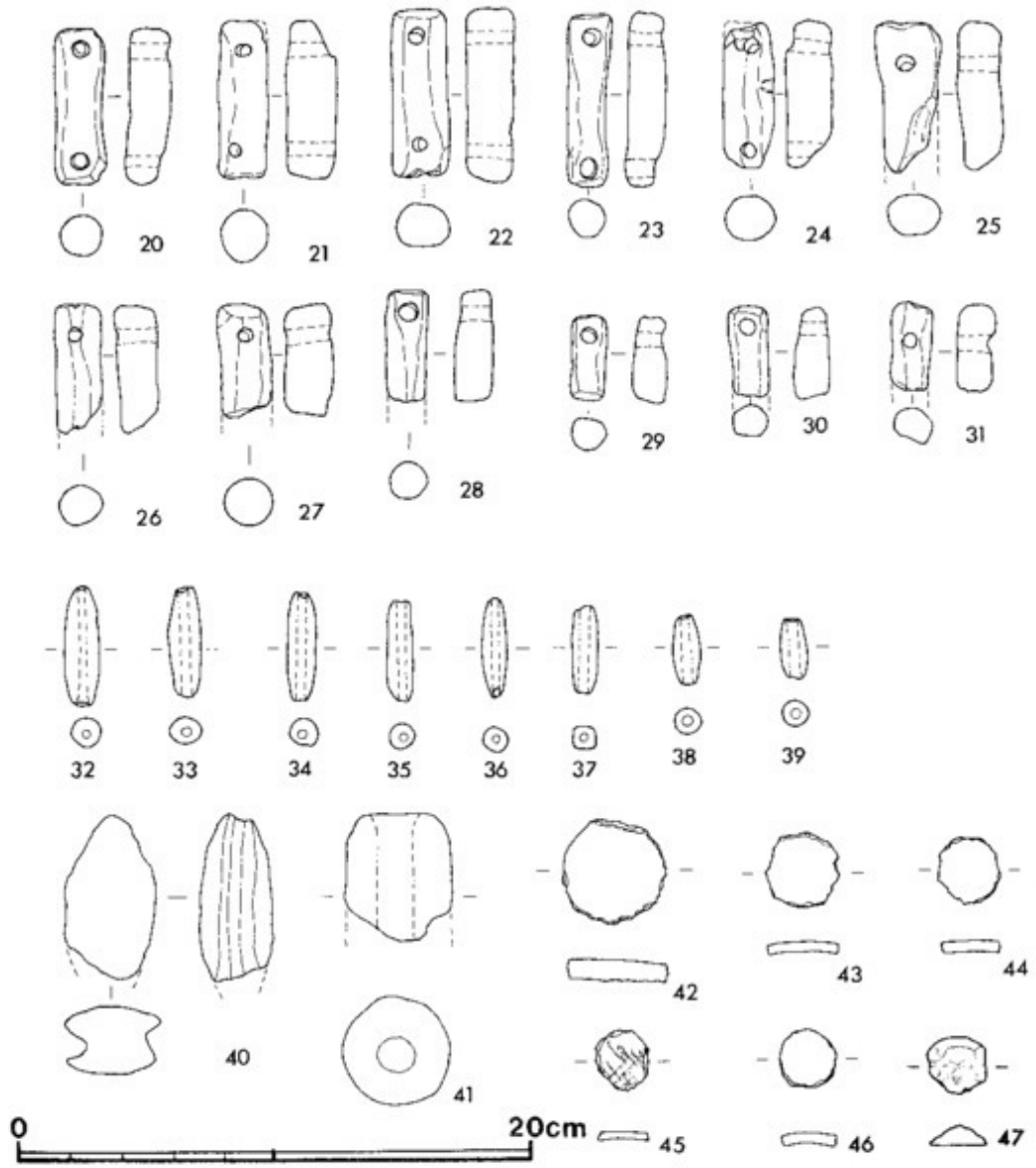

fig.275　日暮遺跡出土土錘・土製品

1～7.12.13：須恵器　7.9.17：土師器　8.14.15：弥生土器　10：白磁　12：緑釉陶器
16：縄文土器　18.19：備前焼　20～41：土錘　42～46：小型円板　47：遊戯具（面子）

1～8.10～16.20.21.24～28.30.37～41.43：遺物包含層　9：SP01　17：流路2
18.19.22.36.42：暗渠　23.31.35.45～47：旧耕土　29.32.34.44：床土　33：攪乱

24. 西求女塚古墳（にしもとめづか）

1．はじめに

西求女塚古墳は、これまでに墳丘部分（第１・２次調査）と墳丘の北西に接する部分（第３次調査）との３次にわたる調査が行われている。その結果、埋葬施設が偏平な板石を用いた竪穴式石室であること、その築造年代が古墳時代前期にさかのぼる古式の古墳であること、明治時代以降、その形状に大きな改変が加えられており、本来の墳丘の主軸は現状のそれよりも北東にふれることなどが確認されている。第３次の墳丘周辺部の調査では、周隍は確認されていない。今回の調査は第４次調査にあたる。

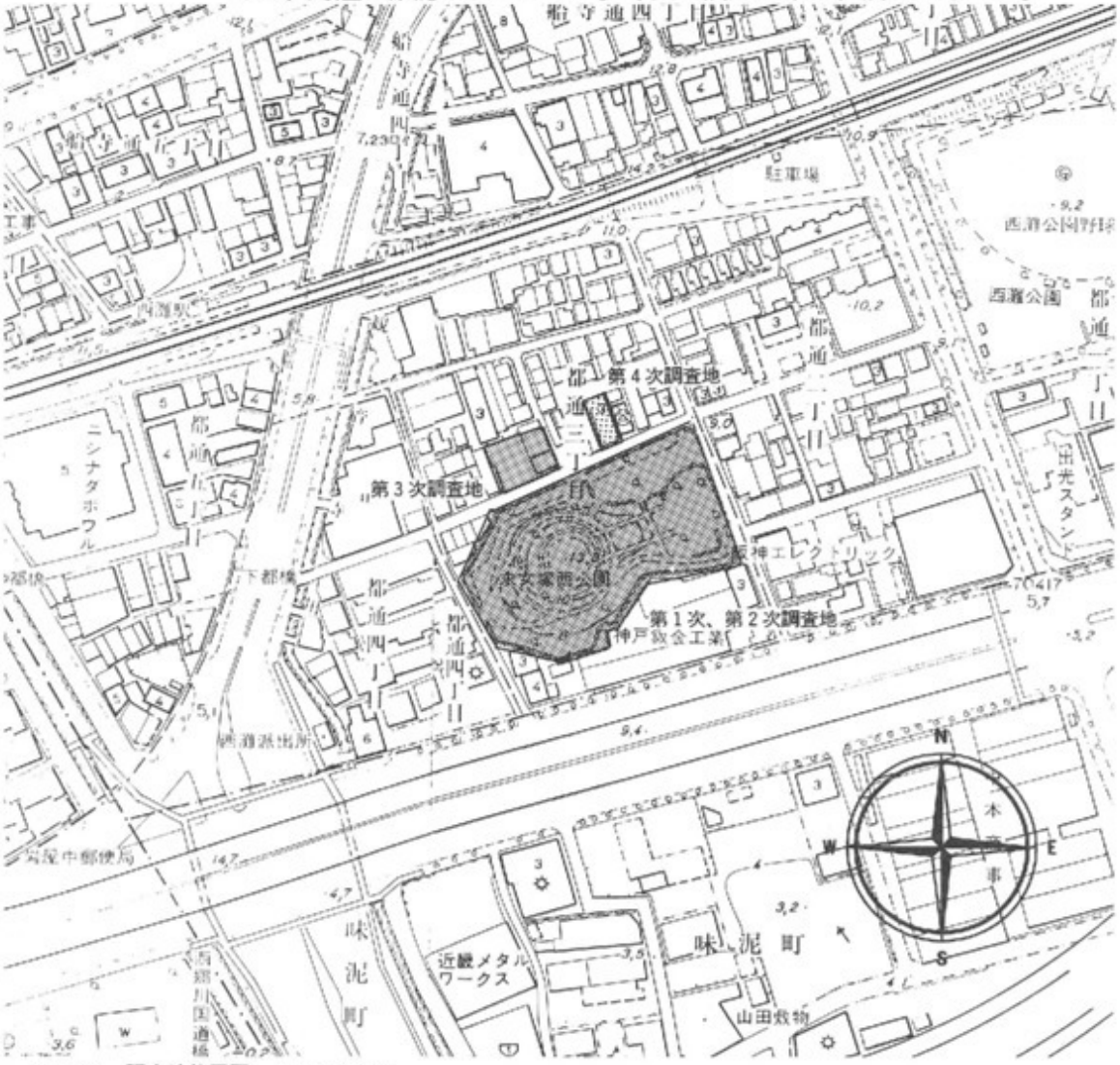

fig.276　調査地位置図　S＝1：3000

2．調査の概要

今回の調査は、集合住宅の建設にともなうものである。建物の基礎工事によって遺跡の破壊される部分約110㎡について調査を行った。

調査の結果、中世と古墳時代の2層の遺物包含層と炭化物の集中する土層1層が確認され、遺構面は1面が確認された。

層　位

基本的な層序は、上から第1層：盛土、第2層：旧表土、第3層：灰褐色シルト質砂、第4層：黒褐色シルト質砂（古墳時代遺物包含層）、第6層：浅黄色中砂（炭化物の集中部分あり）、第7層：にぶい黄橙色砂礫である。

第1層からは、須恵器，瓦器，土師器などが出土した。

第4層は、第6層が一段下がる調査区の南部分のみに堆積している。古式土師器1片が出土した。

第6層は、上面が起伏し土石流と考えられる砂礫層（第7層）を覆って堆積する中砂層である。炭化物の細粒が含まれ、特に集中する部分（ＳＸ01）もある。しかし、遺物の出土は確認されなかった。

遺構面

第4層および第6層の上面が中世の遺構面と考えられる。柱穴8基が検出された。しかし、建物を構成するものとしてのまとまりはみとめられない。

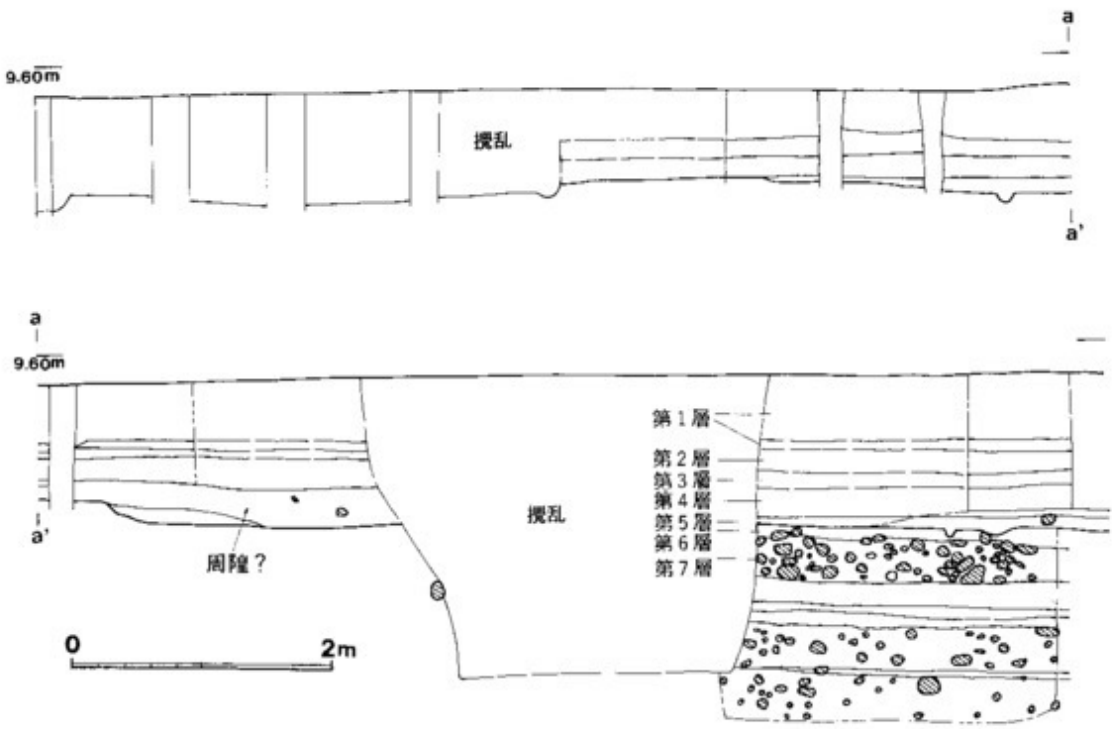

fig.277　調査区東壁断面図

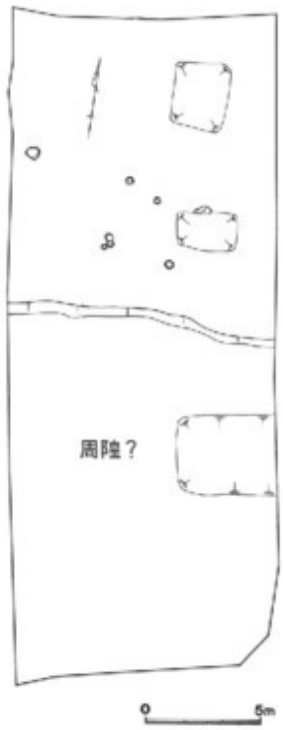

fig.278　第1遺構面平面図

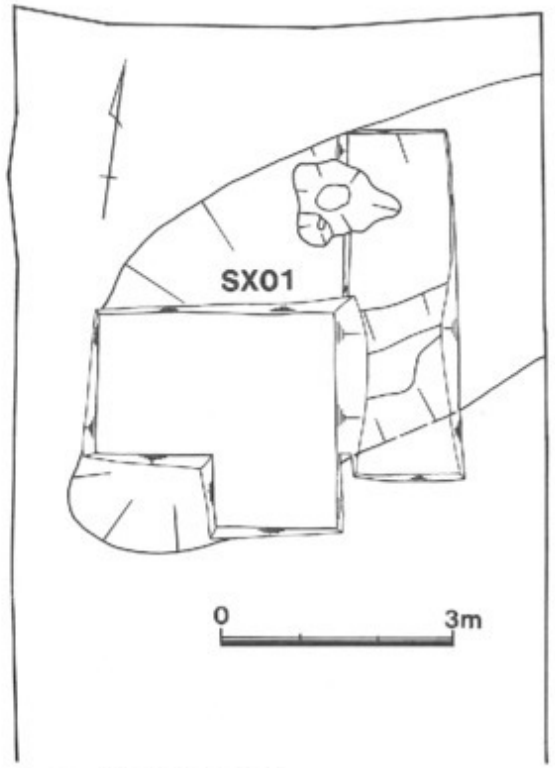

fig.279　第2遺構面平面図

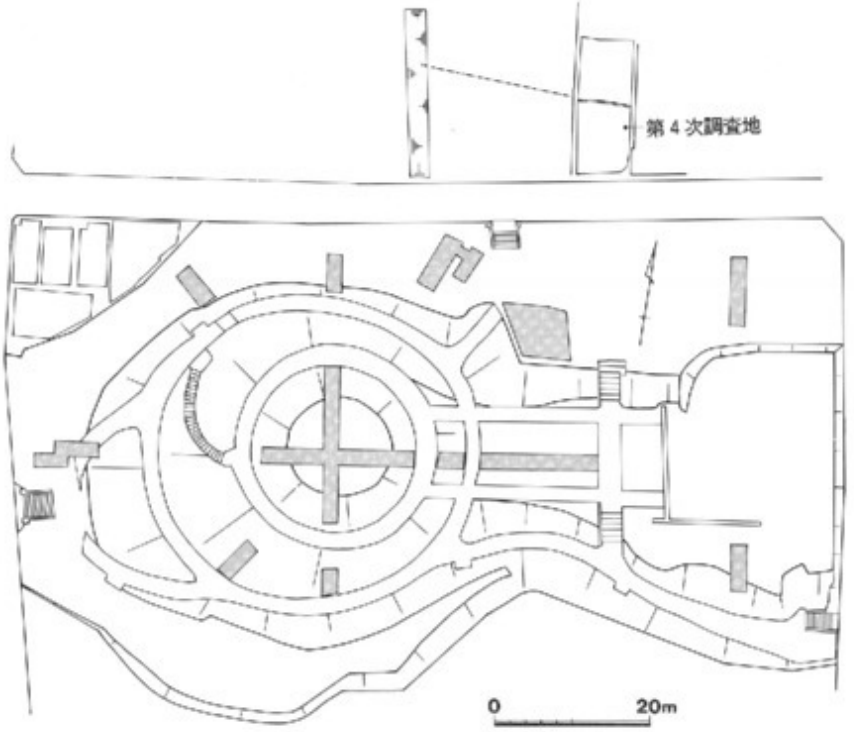

fig.280　周隍状遺構と古墳との位置関係（網線：第1･2次調査トレンチ）

調査区の中央付近で第6層の上面が20cmほど下がり、南半が若干深くなる。この落ちこみは調査地の西でも確認されており、この古墳の主軸に平行するものと考えられる。第4層には古墳時代前期の土器片が含まれており、あるいは墓域を画するためのからぼり的なものの外側の立ち上がり部分とも考えられる。

3．まとめ

調査区の中央で確認された東西方向にのびる段は、3層が中世の地表土であるなら、中世の整地作業により周隍の立ち上がり部分がカットされ、底の部分だけがわずかに残ったという可能性が考えられる。しかし、いずれにしても当初から深いものでなかったことは確実である。

なお、第3次調査地点では、この立ち上がり部分は後世の撹乱を受け、遺存していなかった。

また、従来地山と認識されていた砂層から、人為的な遺物は出土しなかったものの、炭化物粒子が確認されたことも注目される。今後の周辺の調査で遺物が出土する可能性がある。

fig.281
周隍完掘状況（南から）

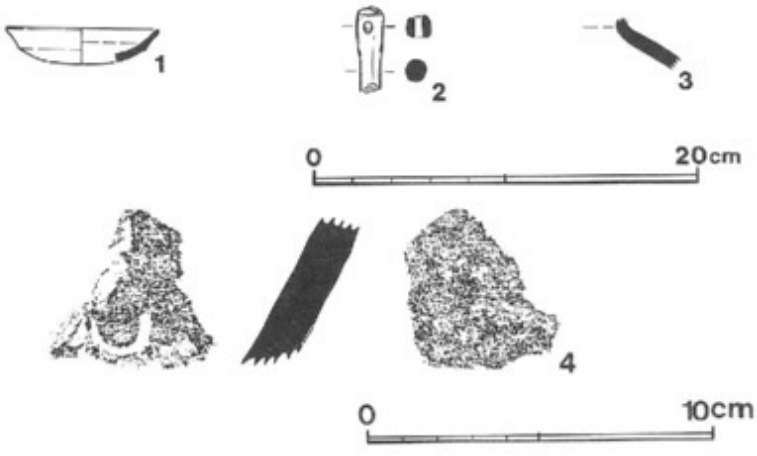

fig.282
西求女塚古墳
出土遺物
1・2・4：第1層
3：第4層

25．郡家遺跡（大蔵地区）

1．はじめに

郡家遺跡は、神戸市東灘区御影町郡家・御影、御影中町を中心に東西約800m、南北約500mの範囲に及ぶ広大なものである。天神川によって形成された扇状地から沖積地にかけて立地する、弥生時代後期から中世にかけての複合遺跡である。

既往の調査

当遺跡においては、大蔵地区、城の前地区、地蔵元地区、下山田地区、岸本地区、御影中町地区などにおいてこれまで約40回に及ぶ発掘調査が行われてきており、今回の調査は、大蔵地区の第４次調査にあたる。

これまでの大蔵地区の調査では、第１次調査地点で中世の暗渠や奈良時代～平安時代の掘立柱建物址、弥生時代後期の遺物包含層などが確認されたのをはじめ、第２次調査地点では、奈良時代～平安時代の掘立柱建物址および弥生時代後期末の自然流路、第３次調査地点では、弥生時代と古墳時代の竪穴住居址が検出されている。これらの成果の中でも、奈良時代の掘立柱建物址は「菟原郡衙」に関連する遺構として注目できるものである。

今回、当該地において、個人住宅を含むマンションの建設計画に先立って、埋蔵文化財に影響が及ぶ基礎部分に限定して、発掘調査を実施し、基礎工事の影響が及ばない部分については、現状保存を原則とした。

fig.283　調査地位置図　S＝1：3000

2．調査の概要　今回の調査地点は、第1次調査地点と第2次調査地点にはさまれた位置にあり、現況で北から南にかけてかなりの傾斜地である。

調査は、対象となるマンション基礎部分の19ヵ所について実施した。

それぞれの調査区は、調査による余掘を含めて基本的に2×2mのグリッドを設定し、A・B・C－1・2・3・4・5・6・7と呼称し、遺物の取り上げ等の便宜を図った。

基本層序　基本層序は、現地表面から下記のとおりである。

撹乱・盛土
旧耕土
暗褐色シルト混じり細砂（第1遺構面遺物包含層）
乳黄色細砂～粗砂
黒褐色シルト質細砂
暗褐色シルト混じり細砂～中砂　― 第2遺構面
乳黄色細砂～粗砂　自然流路
淡褐色シルト質極細砂　― 埋没土
赤黄色細砂～Gran.（基盤層）

いずれの調査区においても、遺構面が2枚確認できた。第1遺構面は7世紀代～平安時代後期のもので、さらに下層の第2遺構面では弥生時代中期～後期の自然流路が確認されている。

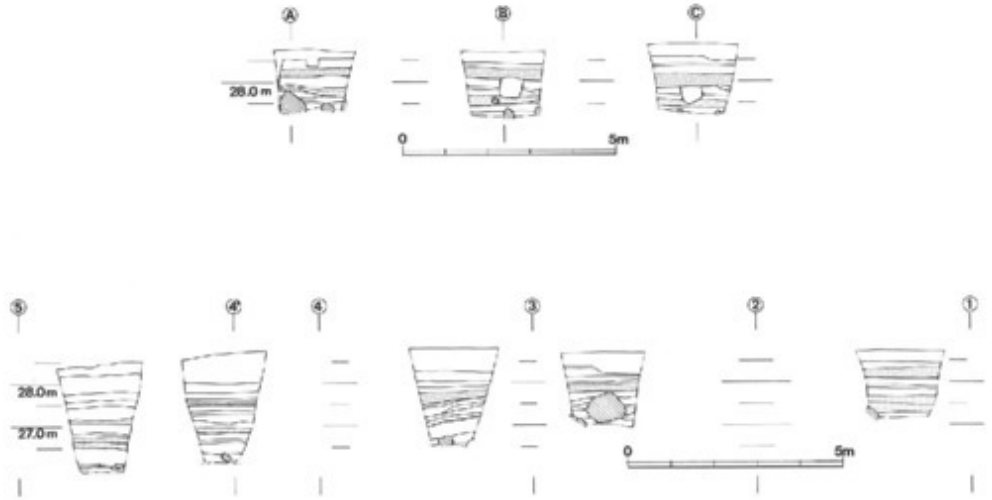

fig.284　A～C－1区北壁・B－1～5区西壁断面図

第1遺構面　第1遺構面における遺構には、ピット12基、不定形の落ち込み10基、土坑2基、溝状遺構1条などがある。遺構面は乳黄色細砂～粗砂からなり、後述する第2遺構面の自然流路埋没土の最上層にあたる。主な遺構につい

て述べる。

SK01　　ＳＫ01はＡ－１区で検出した長径1.18m、短径1.00m、深さ0.40mを測る土坑で、坑底中央に直径16cmのピットが確認できた。出土遺物には、須恵器・土師器の小片がある程度で、７～８世紀代のものであろう。

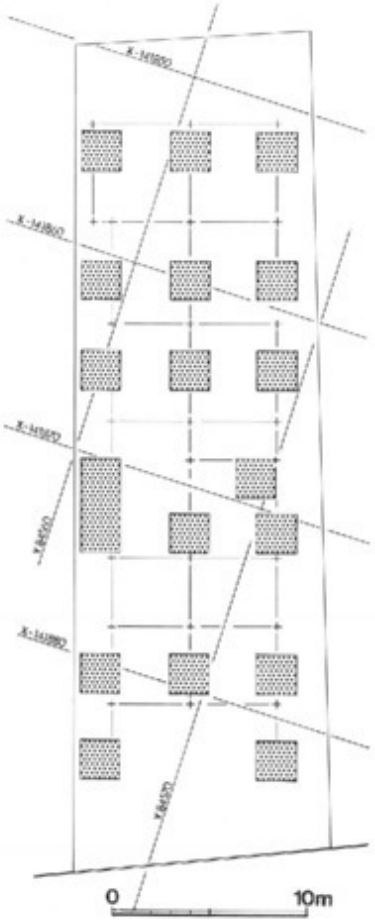

fig.285　調査地区配置図

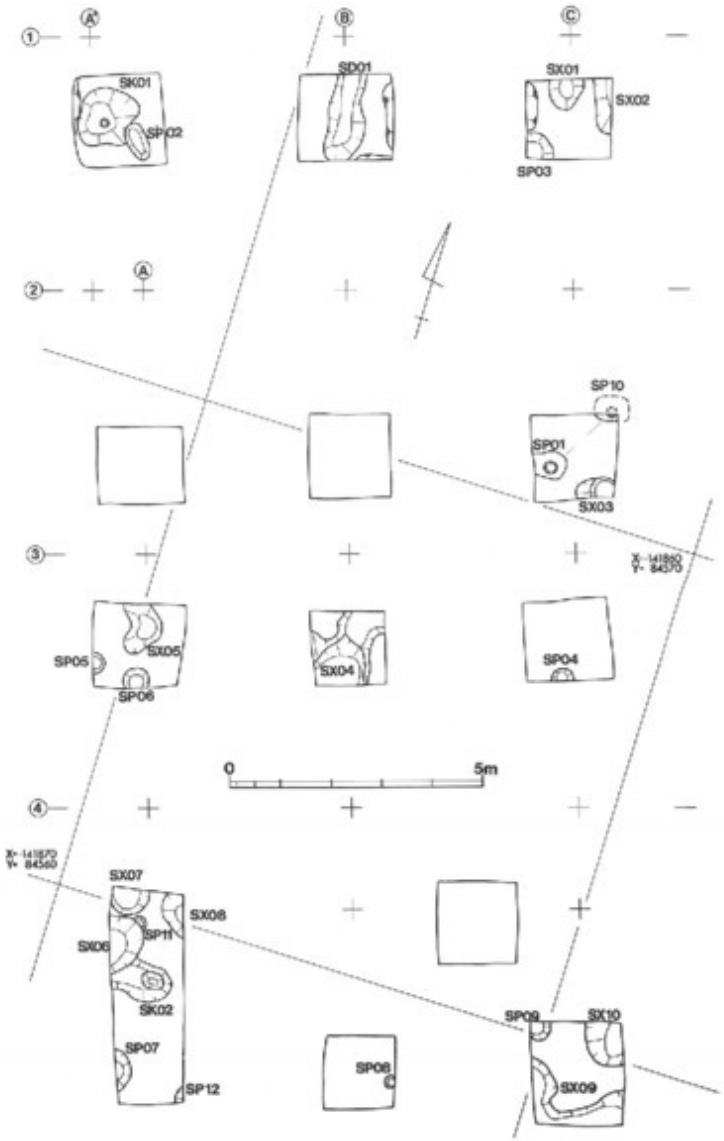

fig.286　調査地区平面図（A・B・C－1～5　第1遺構面）

ＳＤ01　ＳＤ01はＢ－１区で検出した最大幅75cm、最大深さ約30cmを測る溝状遺構である。出土遺物には、土師器の小片がある。

ＳＰ01　ＳＰ01はＣ－２区で検出したピットで、短辺55cm、長辺67cm以上を測るやや歪な長方形掘形に、直径25cmの柱痕を有する。ＳＰ10とともに掘立柱建物を構成するものと考えられる。出土遺物がなく、詳細な時期については不明であるが、第２次調査地点で確認された９～10世紀とされるＳＢ01の主軸と方位が近似する点から近接した時期のものと考えられる。

ＳＰ05　ＳＰ05はＡ－３区で検出したピットで、直径45cm、深さ18cmを測る。埋土は暗褐色シルト混じりの細砂～中砂で、底部回転ヘラ切り未調整の須恵器坏が２片出土している。７世紀のものであろう。

ＳＸ06　ＳＸ06はＡ－４・５区で検出した落ち込みで、長径70cm以上、短径1.15m、深さ約20cmを測る。埋土は灰色シルト質細砂で、暗褐色の遺物包含層を切り込んで営まれており、出土遺物から12世紀後半前後の遺構と考えられる。

この他の遺構については、出土遺物からみて、概して７～８世紀代のものが多いが、いずれも小片のため、詳細な時期の決定は困難である。

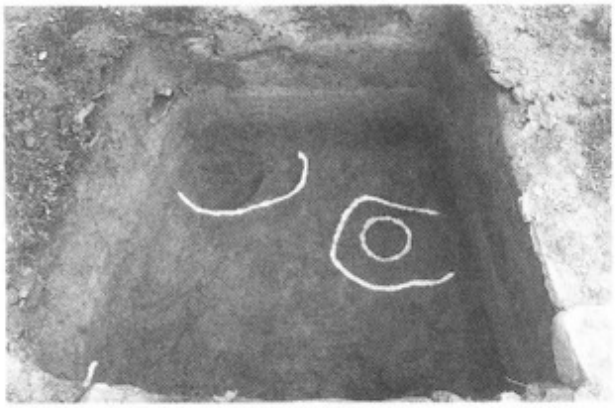

fig.287　Ｃ－２区第１遺構面（北から）

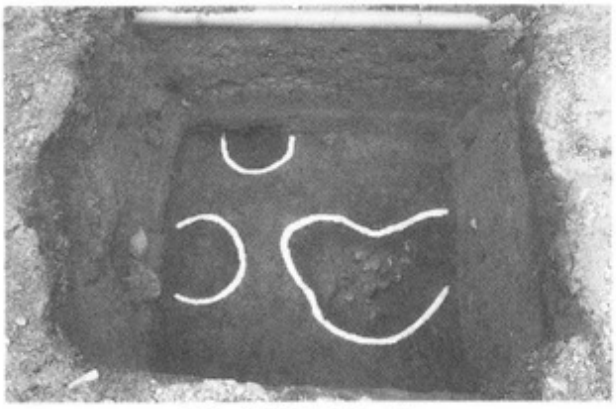

fig.288　Ａ－３区第１遺構面（東から）

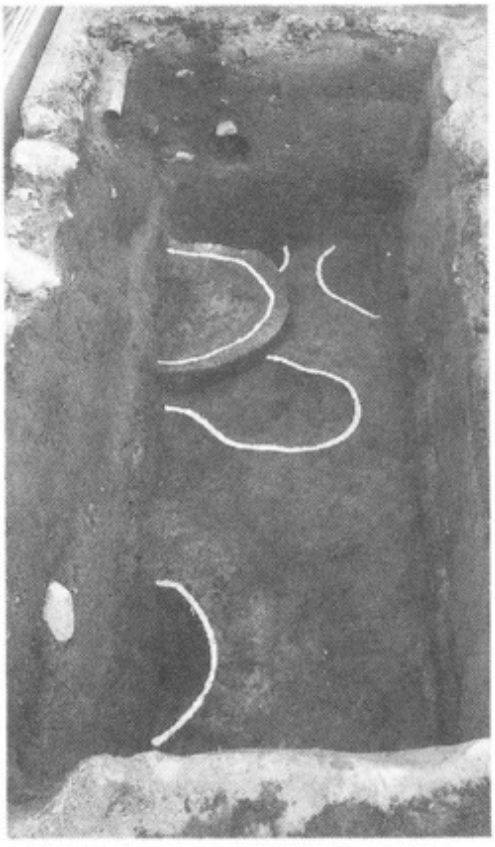

fig.289　Ａ－４・５区第１遺構面（南から）

第２遺構面

自然流路

第２遺構面では、いずれの調査区でも、自然流路を確認している。

自然流路は第１・２次調査地点で確認されたものと同一のものと考えられ、調査区を斜めに横切るように、ほぼ北から南にかけて流下している。しかしながら、調査範囲が限定されていたため、平面的には把握できなかった。

それぞれの調査地区の断面を検討すると、Ａ－４・５区の南端部が標高25.2mと最も深くなっており、このあたりが流路のほぼ中央にあたるものと考えられる。また、第２次調査地点の成果を合わせ考えると、Ａ～Ｃ－１区が流路の右岸にあたり、１区と２区の境に流路の上端が存在するものと推定できる。したがって、この地点から、第２次調査地点で確認された河道の西側肩部までの距離をみると、約15mとなり、これを折り返すと河道の幅は約30mと推定できる。なお、流路の深さは約1.5mとなる。

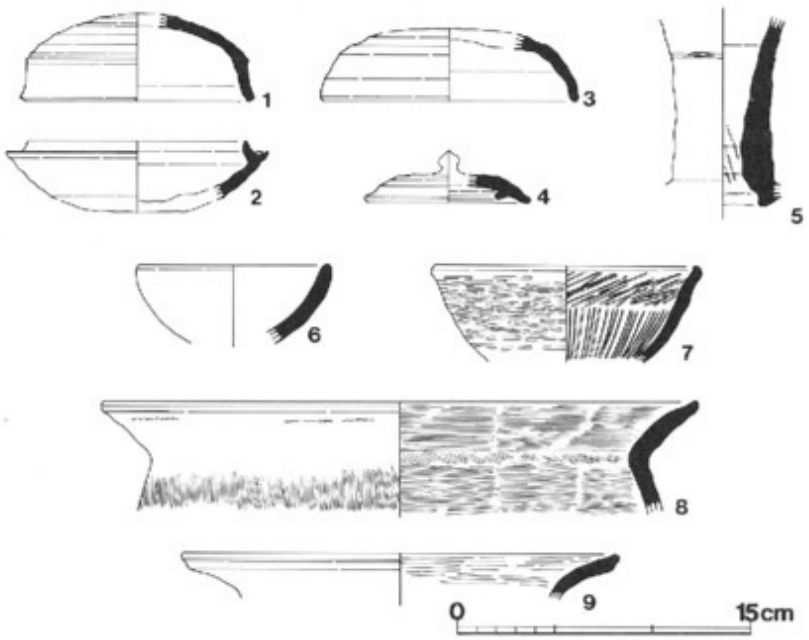

fig.290
第１遺構面
出土土器

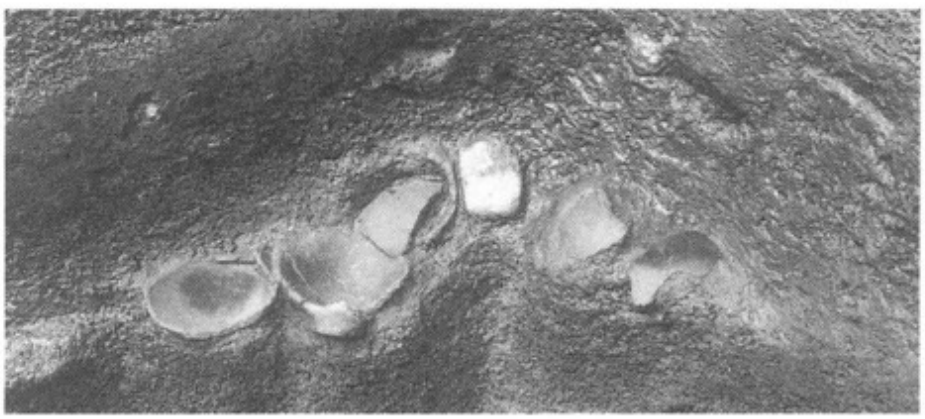

fig.291
第２遺構面
自然流路上層
土器出土状況

fig.292
B－1区
第2遺構面
（東から）

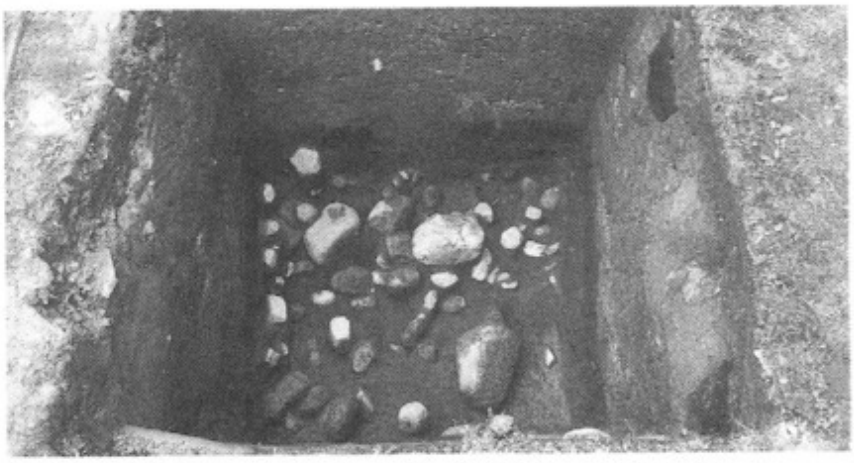

fig.293
C－1区
第2遺構面
（南から）

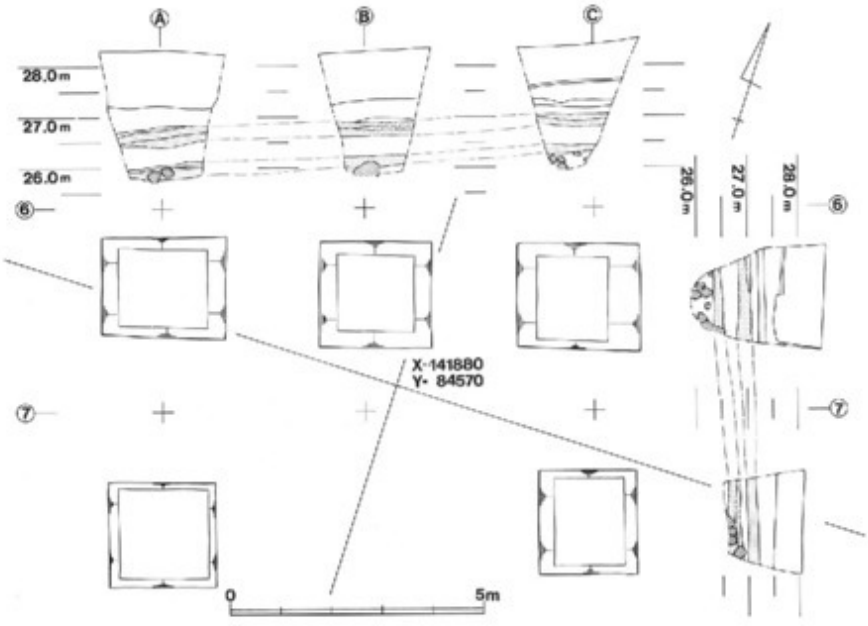

fig.294　調査地区平面・断面図（A・B・C－5・6・7）

出土遺物

出土遺物は、大きく２つに分けられ、流路上層にあたる黒褐色シルト質細砂および暗褐色シルト混じり細砂～中砂から検出した一群の土器と、最下層にあたる淡褐色シルト質極細砂から検出した少量の土器がある。

前者は、完形品を含む良好な資料で、弥生時代後期後半の壺・甕・鉢などがある。胎土の観察では、他地域から搬入されたものは確認できない。

後者は、弥生時代中期後半の細片であり、櫛描紋と凹線紋で飾られた壺を確認している。

また、第１遺構面直下の乳黄色砂層から、古墳時代後期初めの須恵器坏蓋が出土しており、自然流路の埋没は弥生時代中期後半に始まり、古墳時代後期初めに完了したと考えられる。

３．ま と め

今回の調査では、調査実施面積が限定されていたため、調査対象地区の全体像を把握するには至らなかった。

弥生時代中期後半に遡る土器の出土は、量は少ないものの、郡家遺跡大蔵地区第１次調査に次ぐもので、郡家遺跡における当該期の遺跡の広がりの確認が今後予想されるところである。

弥生時代後期後半では、まとまった量の土器の出土がみられた。これらは第２次調査地点における出土資料をさらに補足するものといえる。

第１遺構面では、遺構のまとまりを把握するには至らなかったが、長方形掘形をもつ柱穴が確認されたことは、第２次調査地点と同様、平安時代前期の掘立柱建物址が広がっているものと考えられる。これは「郡家」や「大蔵」の地名から推定できる郡衙遺構の存在を裏付ける資料として意義深いものである。また、この他の遺構については、この掘立柱建物址を遡る時期の集落の存在をも窺わせるものといえる。

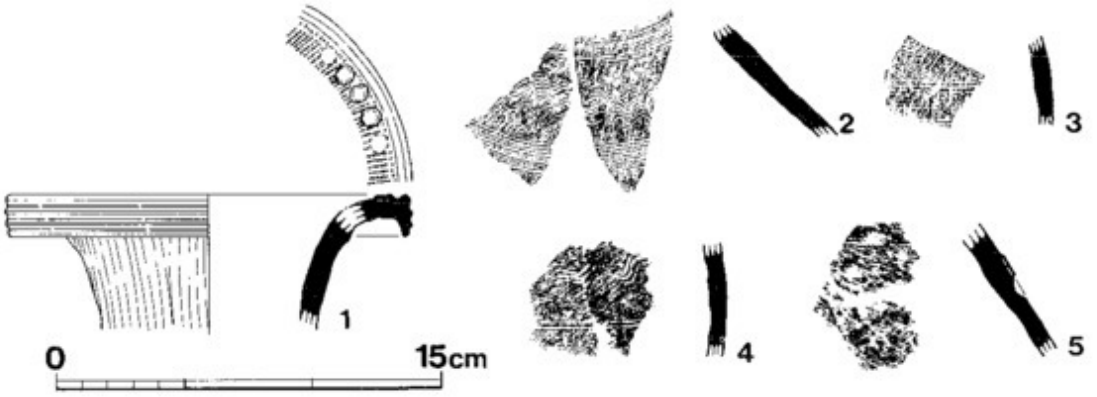

fig.295　第２遺構面出土土器（弥生時代中期後半）

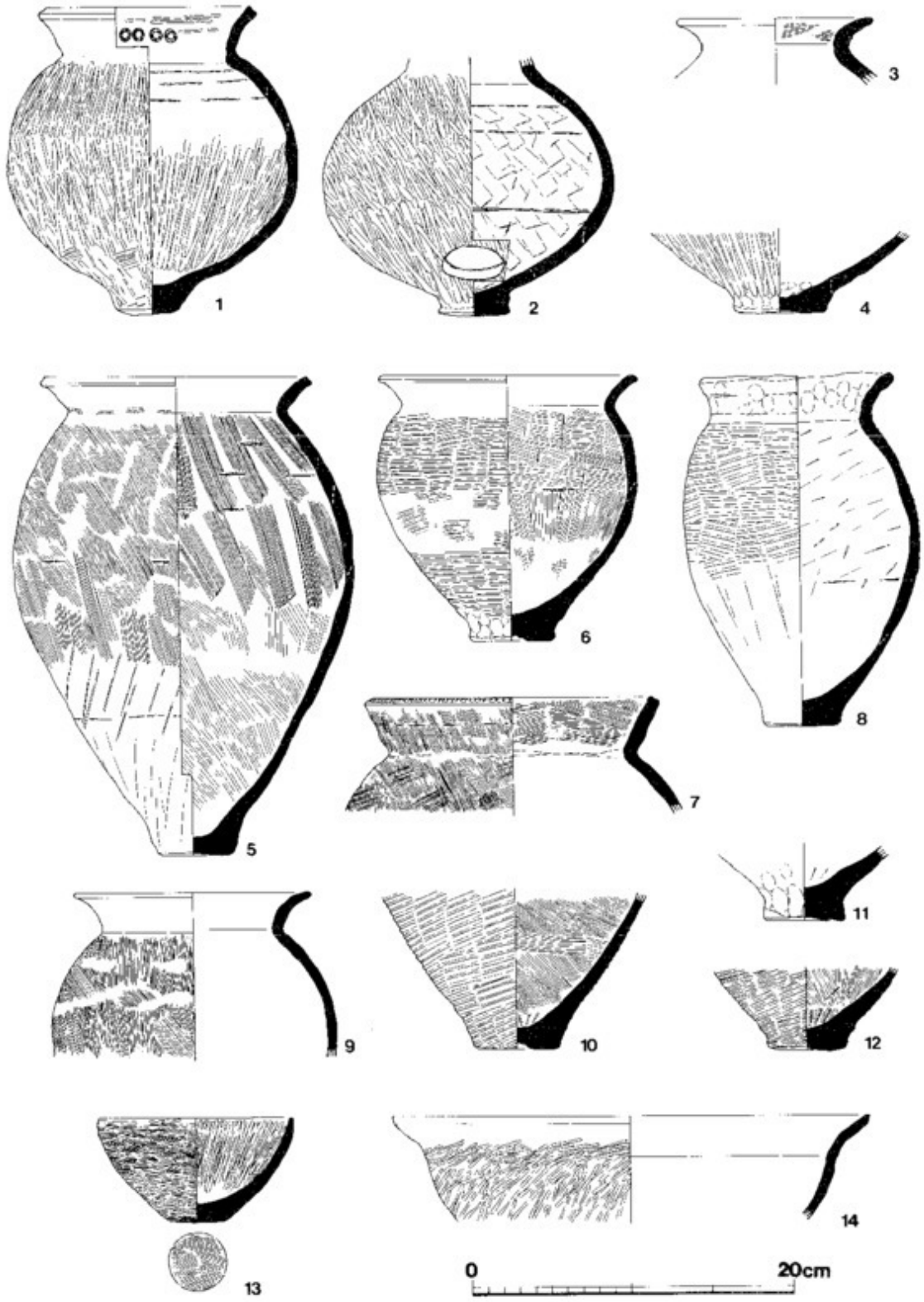

fig.296　第2遺構面出土土器（弥生時代後期後半）

26. 住吉宮町遺跡（すみよしみやまち）

1．はじめに

六甲山麓から源を発する住吉川と石屋川によって形成された複合扇状地末端の緩傾斜地に位置する住吉宮町遺跡は、弥生時代中期から室町時代に至る複合遺跡である。当遺跡は、昭和60年度のマンション建設工事中に鎌倉時代の土坑が発見されたことが、遺跡の発見の契機となり、以後、再開発に伴う開発工事で発掘調査が実施され、今回の調査で13次を数える。

今回の調査は、東灘区民センター建設に伴うもので、建物の支柱部分及びエレベーターピット予定地の165㎡について発掘調査を実施した。調査地は、北地区と南地区にわかれる。北地区は、昭和63年度の第９次調査で古墳時代の遺構が検出され、地下保存された地点あたる。南地区は、第９次調査地の南隣に位置しており、奈良時代及び古墳時代の遺構面の存在が予測された。以下、各調査区を各遺構面毎に順を追って概要を記述する。

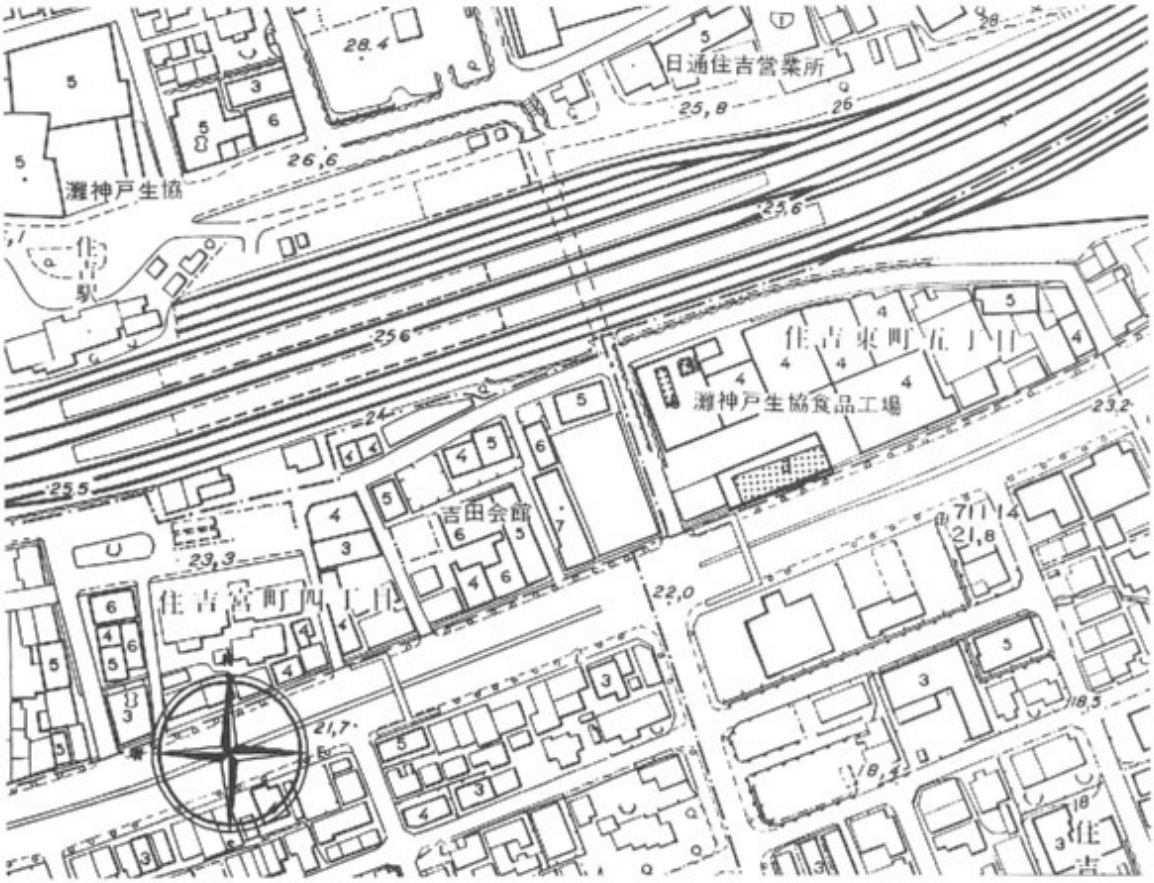

fig.297　調査地位置図　S＝1：2500

2．調査の概要

北地区

昭和63年度に実施された第９次調査で弥生時代後期の円形周溝墓や、古墳時代後期初頭の古墳や竪穴住居址等が検出され、地下保存された地点にあたる。このうち新設建物の支柱によって破壊される住吉東古墳周溝および４号墳墳丘の一部の断ち割りと、下層遺構の有無について調査した。なお、この他の支柱部分ついては、事前に試掘調査が行われ、遺構が存在しないことを確認している。

グリッド－１は、住吉東古墳の周溝北肩を確認し、これを断ち割り、下層の状況を観察した。住吉東古墳の基盤層である弥生時代後期の遺物包含層である暗褐色砂質土を除去したところ、黄褐色砂礫層の地山を検出した。地山面において自然の落ち込みを検出したのみで、下層においても遺構は検出されなかった。

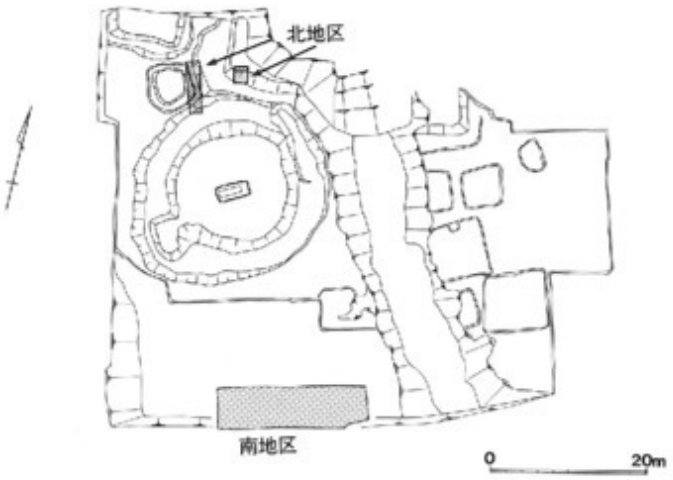

fig.298
第９次調査との
位置関係

fig.299
北地区グリッド－１
完掘状況（北から）

グリッド－２は、４号墳墳丘の南斜面にあたる。墳丘は、黄褐色砂礫層の地山の上に0.5mの盛土をしている。墳丘内には、弥生時代終末から古墳時代初頭の遺物が含まれており、盛土は周溝掘削土が用いられたことが窺われる。また、墳丘の下層には、幅0.9m、深さ0.35mの溝状遺構が検出された。住吉東古墳や２号墳においても墳丘下層の溝が検出されており、墳丘築造前の区画溝と考えられている。調査区が狭いため、今回検出された溝はこれらと同様のものか判然としない。

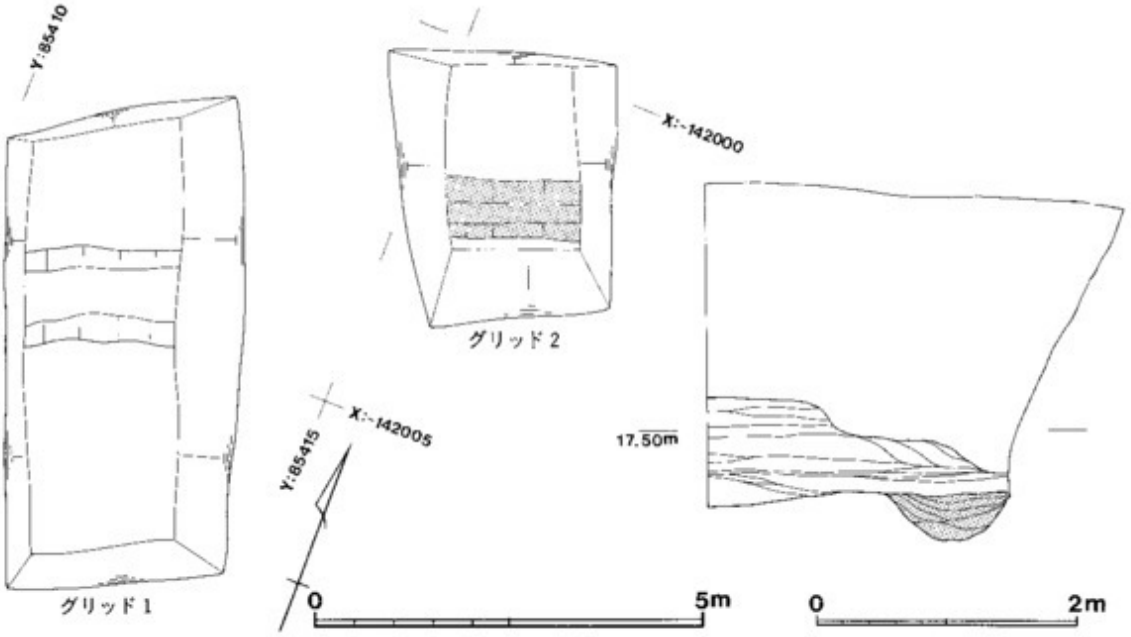

fig.300　北地区遺構平面図

fig.301　４号墳及び下層検出溝断面図

南地区

第９次調査地の南隣に位置する。調査区の基本的な層序は、標高20.3mに奈良時代から中世の遺物包含層である灰褐色シルト層があり、その下に黄褐色粗砂層があり、この上面で平安時代、奈良時代の遺構を検出した(標高19.5～19.7m)。この下層には、古墳時代の遺構面を覆う黄灰色シルト層が、0.5m程度堆積している。古墳時代遺構面(標高18～18.7m)は、弥生時代終末から古墳時代初頭の遺物包含層である黒灰色砂質土を基盤層としている。この厚さ約0.3mの黒灰色砂質土の下層には、黄褐色粗砂礫層が深さ1.5m以上続いており、出土遺物もなかった。

第１遺構面

平安時代と奈良時代の遺構が同一面で検出された。検出された遺構は、掘立柱建物址２棟、柵１条、溝５条、土坑２基、ピット20基等がある。

ＳＢ01

ＳＢ02を切る梁行２間、桁行１間以上の南北棟の掘立柱建物址で、調査区域外南側に延びている。建物の方位は、磁北に対しN-15°-Eである。柱穴掘形は、直径0.25mの円形で、柱穴間距離は、1.2mと小規模である。

柱穴より平安時代のものと思われる須恵器、土師器細片が出土している。

ＳＢ02　梁行２間、桁行１間以上の南北棟の掘立柱建物址で、大半が調査区域外にあり全体の規模は明らかではない。柱穴掘形は、一辺0.4mの方形で、柱穴間距離は2.1mである。建物の方位は、磁北に対しN-12°-Wである。詳細な時期は不明である。

ＳＡ01　南北に３間分を検出した柵である。柱穴掘形は、直径0.25mの円形で、柱穴間距離は0.9mである。時期は不明である。

ＳＤ01～05　南北に走る溝ＳＤ01,02,03及び東西に走る溝ＳＤ05からは、奈良時代の須恵器坏蓋、坏、壺、甕、土師器坏、甕等の破片が出土している。

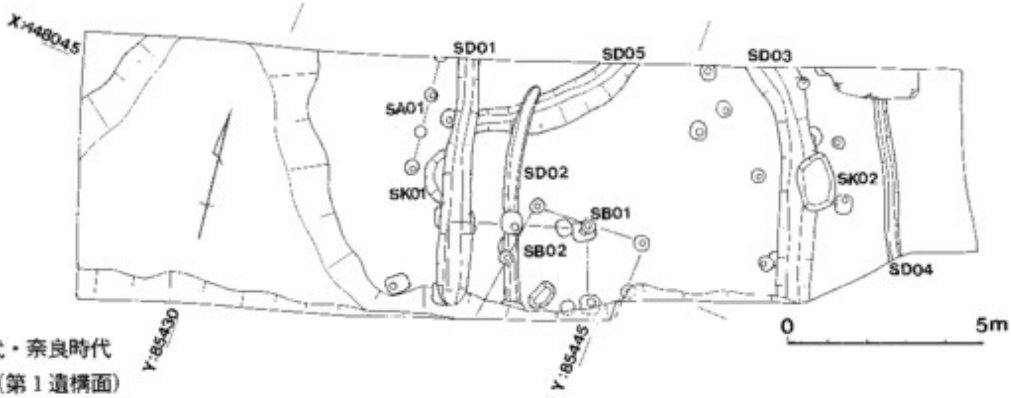

fig.302
平安時代・奈良時代
遺構面（第１遺構面）
平面図

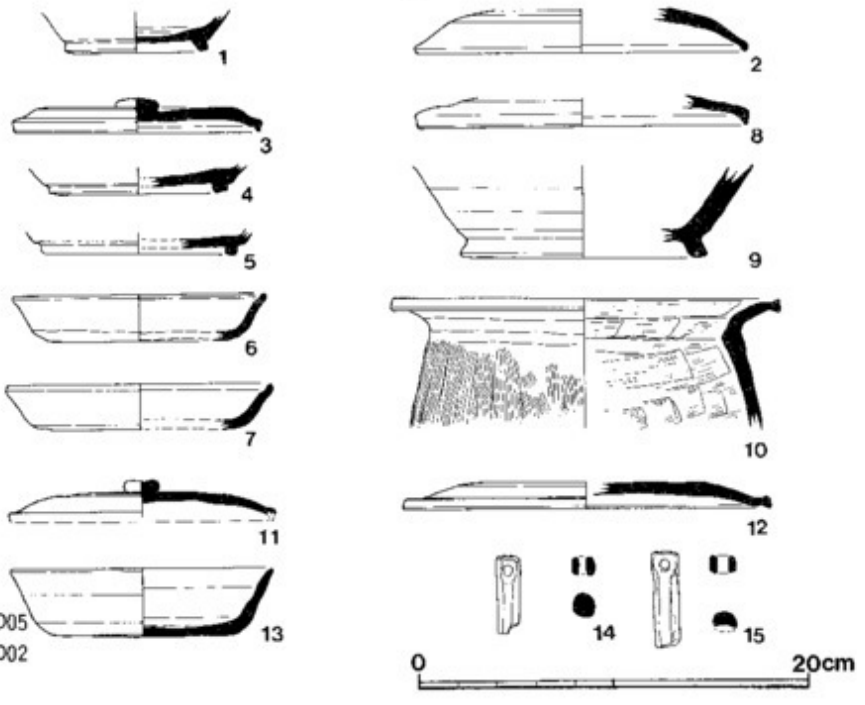

fig.303
第１遺構面出土遺物
１～10：SD01　11：SD05
12：SD03　13：SD02
14・15：遺物包含層

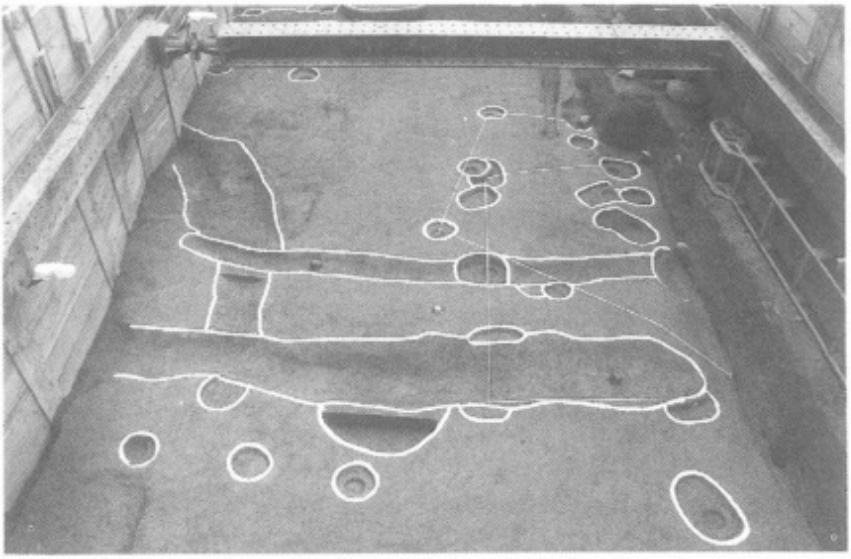

fig.304
南地区第1遺構面
掘立柱建物址
（西から）

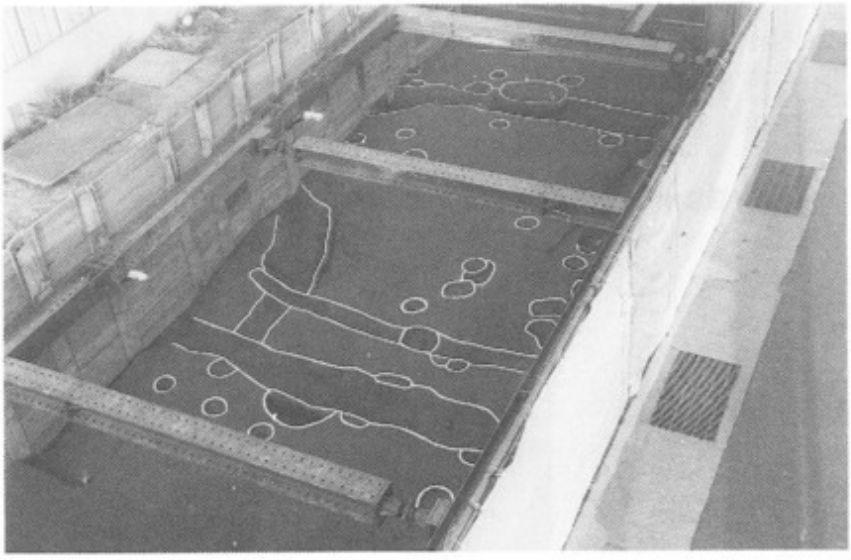

fig.305
南地区第1遺構面
遺構群（南西から）

第2遺構面　検出された遺構は、古墳2基、竪穴住居址2棟、掘立柱建物址1棟、土坑1基である。

1号墳　方墳の南西隅を検出したもので、大半は、調査区域外の北側に延びているため正確な規模は不明である。墳丘高約0.5mで、黒灰色砂質土の基盤層の上に0.3mの低い盛土を行い形成されている。盛土中には、弥生時代終末から古墳時代初頭の遺物を含んでおり、周溝掘削土が用いられたものと思われる。また、墳丘の斜面には、拳大から人頭大の花崗岩の葺石が葺かれていた。葺石の崩れは激しいが、盛土が終わった後に、人頭大の礫を墳丘裾に添えて、順に小礫を葺き上げていったと考えられる。

墳丘のコーナーに当たる葺石間から5世紀後半代の須恵器有蓋高坏、坏、土師器甕、高坏、滑石製臼玉、勾玉が出土しており、祭祀が行われた可能

性がある。

2号墳　一辺10m前後の方墳で、南西隅には、拳大の花崗岩の葺石によって墳丘裾を固めているが、南東隅には、ＳＢ04によって削られたためか存在しない。墳丘高は、現高約0.6mと低い。墳頂部には、検出幅0.5m、長さ２m、深さ0.2mの長方形の土坑を検出したが、大半が北側調査区外にあり、主体部かどうか明らかでない。時期を決定することのできる遺物はないが、埋没状況から１号墳より先行する可能性がある。

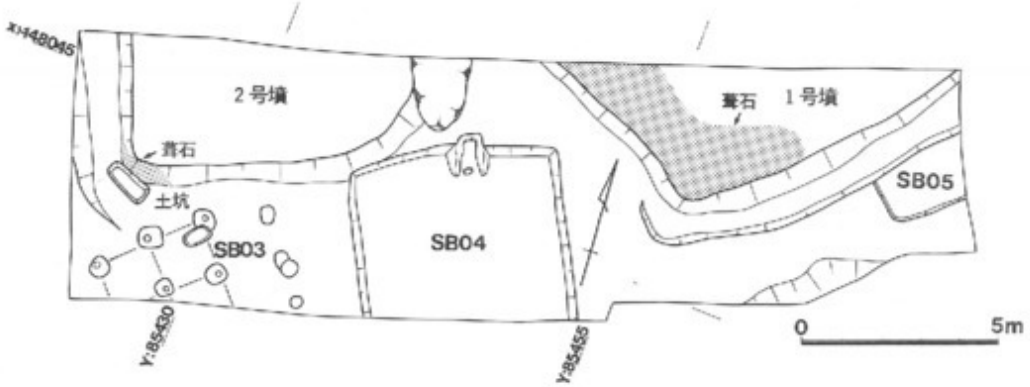

fig.306　古墳時代遺構面（第２遺構面）平面図

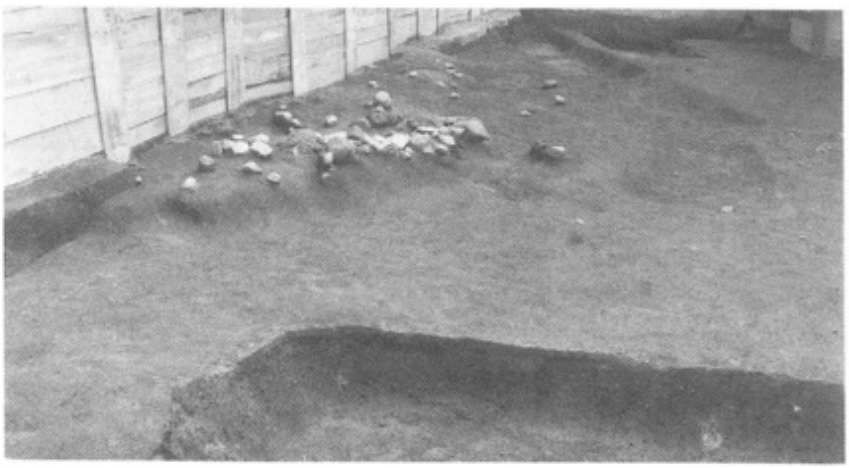

fig.307
南地区第２遺構面
１号墳全景（西から）

fig.308
南地区１号墳丘上
遺物出土状況（南から）

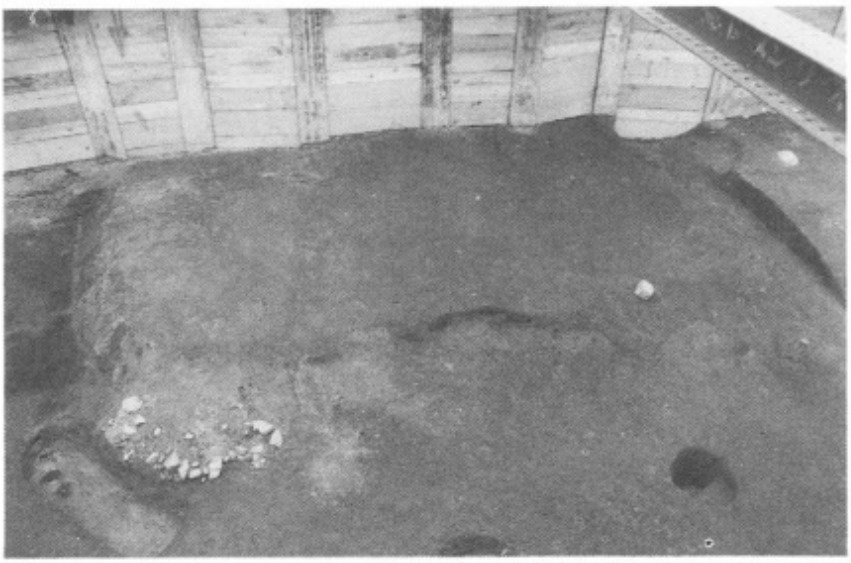

fig.309
南地区第２遺構面
２号墳全景
（南から）

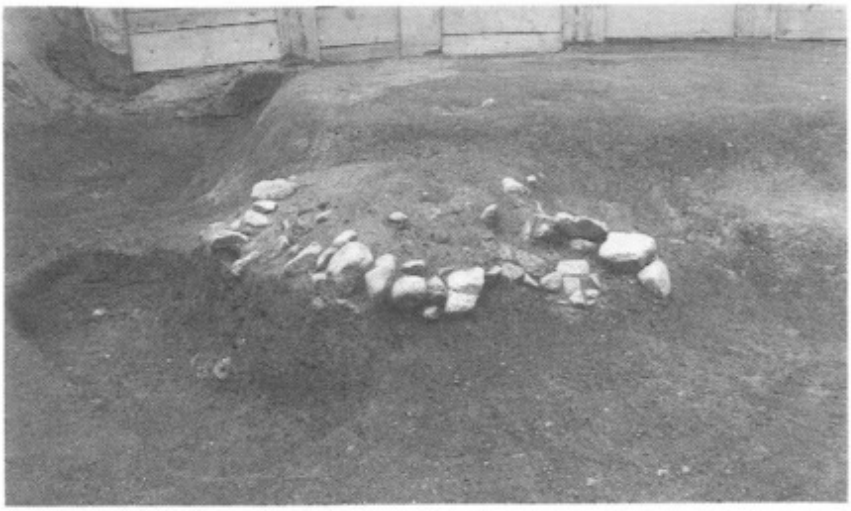

fig.310
南地区２号墳
葺石検出状況
（南から）

ＳＢ04

１号墳と２号墳との間で検出された。検出面は１号墳と同一で、２号墳を切っている可能性が高いが、検討の余地がある。

東西5.5m、南北４m以上、深さ0.4mを測る方形の竪穴住居址で、周囲に幅0.15m、深さ0.1mの周壁溝を巡らす。柱穴は検出されなかった。

北辺には、竈をとりつけている。竈内には、土師器甑と甕が、東袖付近には、土師器甕、製塩土器、須恵器坏、蓋がほぼ完形で現位置を保って出土している。竈内と焚口の前方には、灰が数cmの厚さで堆積しており灰層中より、小骨片が出土している。焚口は赤変しており、竈内中央には、支脚になるとおもわれる石が置かれていた。

また、埋土は床面から0.2mほど水平堆積しており、人為的に埋められた可能性があり、住居の廃棄の仕方に関し検討の余地がある。時期は、出土遺物から５世紀後半頃（TK23型式）と考えられる。

fig.311
ＳＢ04全景
（東から）

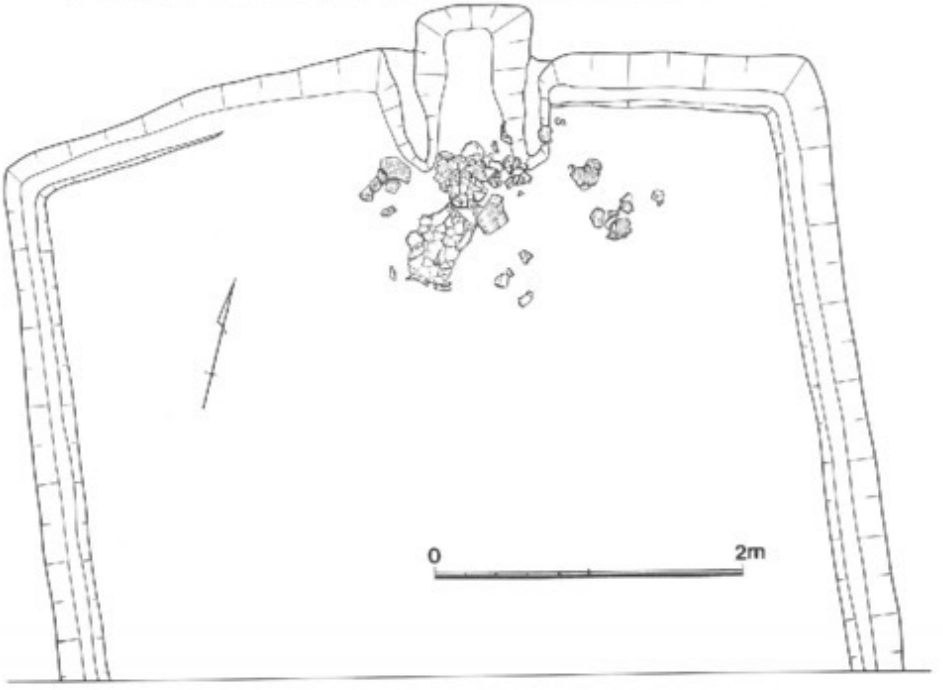

fig.312
ＳＢ04平面図

ＳＢ05　１号墳墳丘下より検出された方形の竪穴住居址である。大半が調査区域外で規模を明らかにすることはできない。床面には、柱穴１基を検出することができた。遺存度が極めて悪く、須恵器細片が僅かに出土したのみで、詳細な時期は不明である。

ＳＢ03　梁行２間、桁行２間（２間以上の可能性もある。）の総柱建物址である。大半が調査区域外に位置している。柱穴掘形は、一辺0.5mの隅丸方形で、柱穴間距離は、1.5mである。柱穴から遺物が出土したが、細片であり、時期決定には至らないが、層位的にＳＢ04や、２号墳が埋没した後に存在

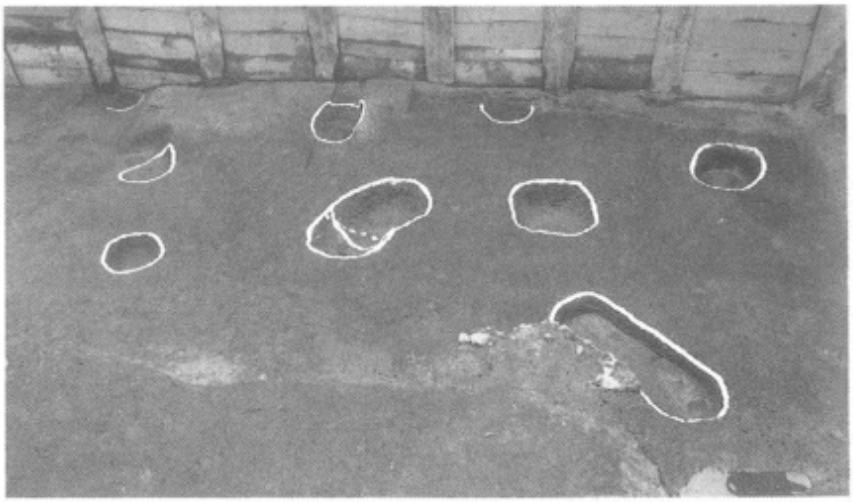

fig.313
第2遺構面
掘立柱建物址
（北から）

したものと考えられる。

土　坑　2号墳南西隅、墳丘を切って存在する。幅0.5m、長さ1.25m、深さ0.3mを測る。土坑墓の可能性もあるが、出土遺物がなく断定できない。

これら古墳時代の遺構面が基盤層としている黒灰色砂質土は、弥生時代終末から古墳時代初頭の遺物包含層である。この層に含まれる土器はわずかで、下層においては黄褐色粗砂礫層が1.5m以上続き、遺構・遺物共に検出されなかった。

3．まとめ

今回の調査においても、第9次調査と同様に平安時代から奈良時代にかけての遺構面と、古墳時代の遺構面を検出することができた。

平安時代から奈良時代の遺構では、掘立柱建物址2棟をはじめ、溝や土坑などが検出され、当時期の遺構が更に南へ広がることが明らかになった。古墳時代の遺構面では、竪穴住居址に近接した低墳丘の小古墳の存在を窺わせる資料を得ることができた。当遺跡は5世紀後半から6世紀前半に墓地化しており、第1・2・9次調査で15基の古墳が検出されている。第1・2次調査では、11基にもおよぶ低墳丘の小型方墳が近接し存在する群集形態をとっており、今回の調査においても同じような状況が窺える。

また、古墳とほとんど時期差のない竪穴住居址が近接して存在する点は、第9次調査の状況と酷似する。今回検出された1号墳墳丘上から出土した須恵器は、ＳＢ04よりもわずかに古い様相のもの（TK208～23形式）が含まれているが、時期差に大差はない。

第9次調査とともに、この竪穴住居址が一般的な集落なのか、あるいは、古墳造営に関わる住居なのかを解明する手掛かりになる重要な資料を得ることができた。今後の調査の進展を待って再検討すべきであろう。

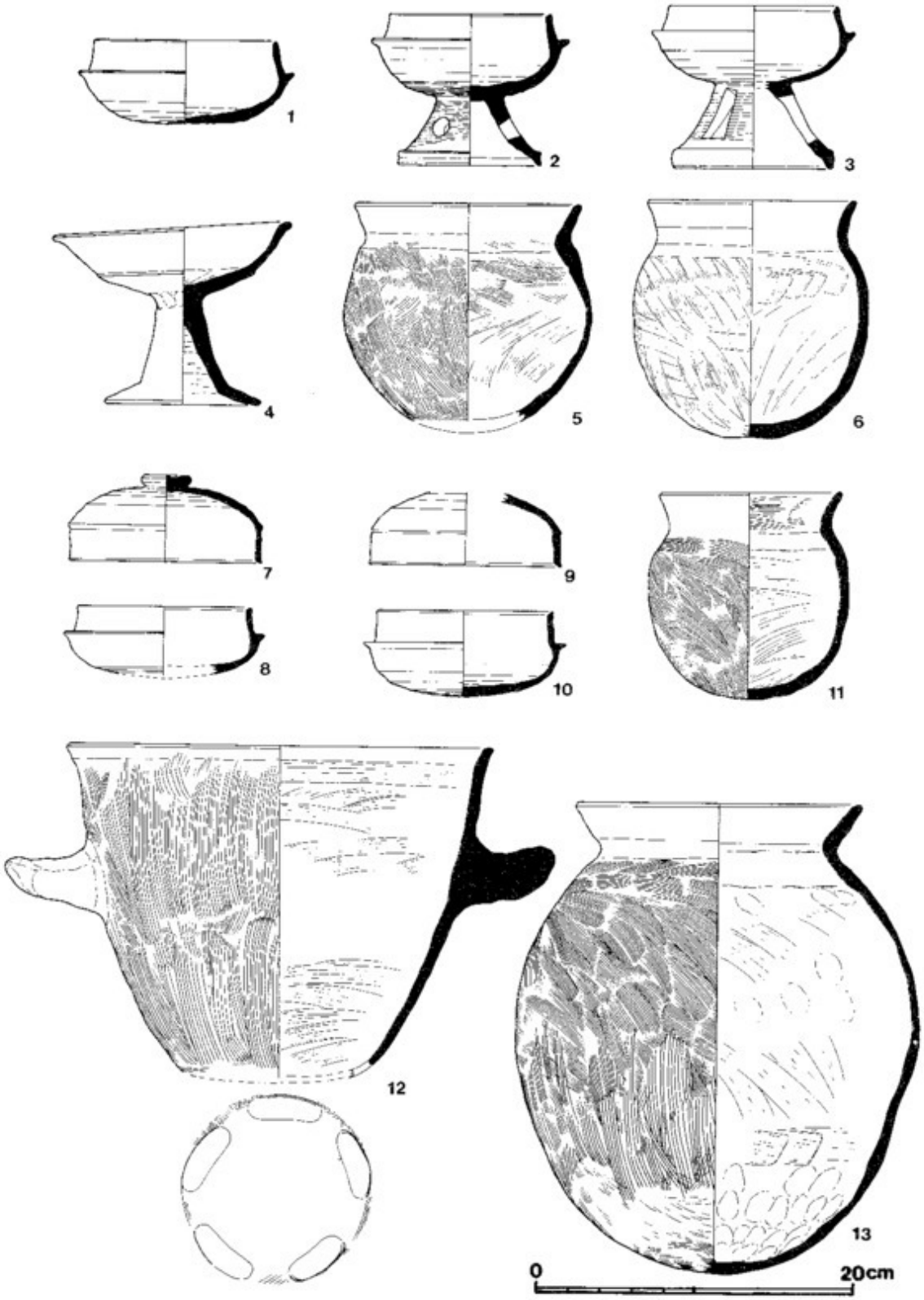

fig.314　古墳時代遺構面(第2遺構面)出土土器

27. 魚崎中町遺跡（うおざきなかまち）

1．はじめに　本遺跡は神戸市街地東部の平野部に位置している。市街地の再開発にともなう調査によって、近年に至ってその存在が確認された遺跡である。

今回の調査地の南に隣接する地点で行われた第1次調査では、中世の遺物包含層が確認されている。今回の調査は第2次調査にあたる。

2．調査の概要　今回の調査は、集合住宅の建設に伴う事前調査である。建物の基礎工事によって遺跡の破壊される部分約250㎡について調査を行った。調査の結果、3層の遺物包含層が確認され、中世の遺構面が1面が検出された。

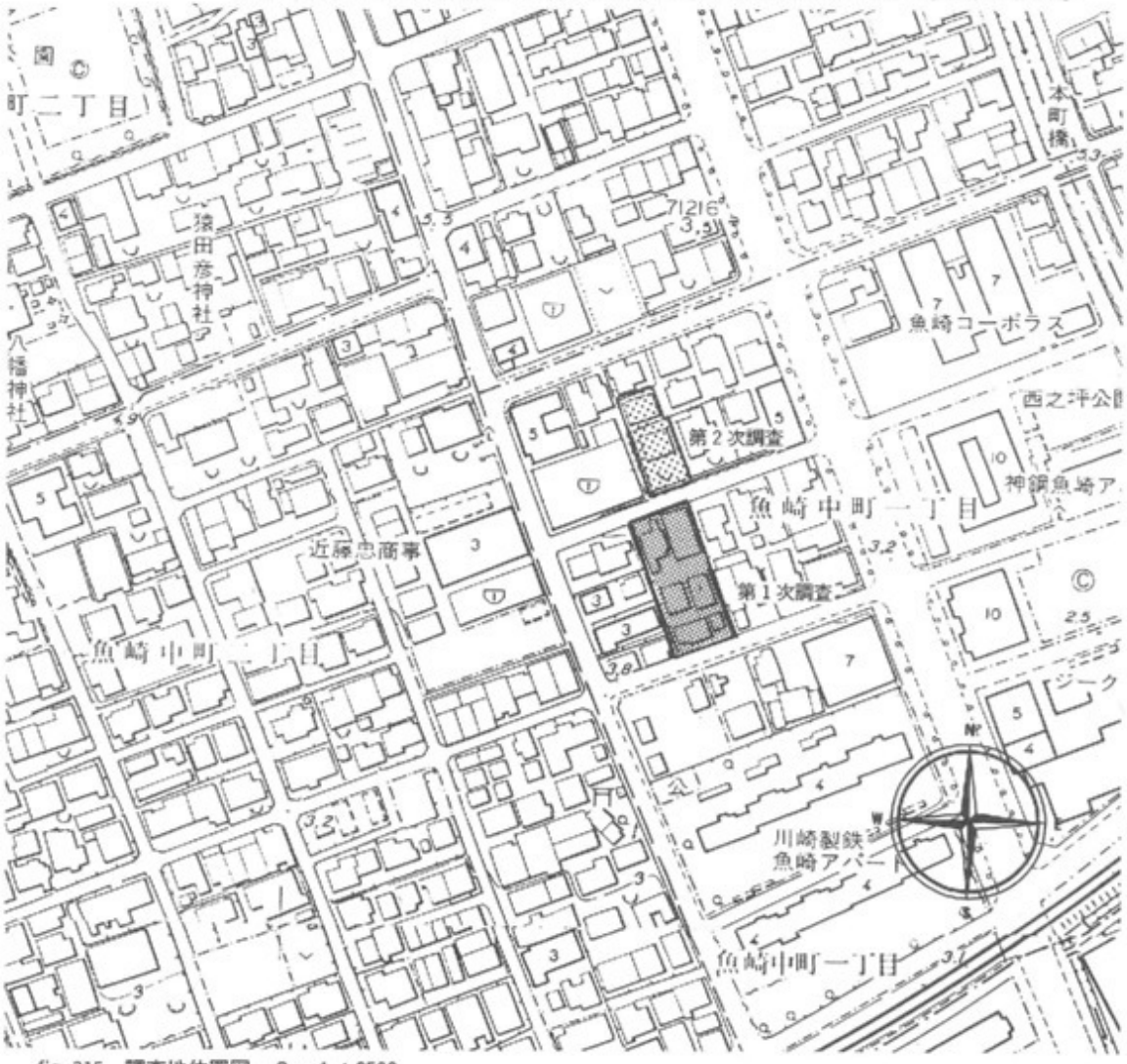

fig.315　調査地位置図　S＝1：2500

層　位

基本的な層序は、上から第1層：盛土、第2層：旧表土、第3層：暗オリーブ灰色シルト質砂（中世遺物包含層）、第4層：黄褐色シルト質細砂（弥生～中世遺物包含層）、第5層：暗褐色細砂質粘土（飛鳥時代遺物包含層）であり、以下土壌化したシルトとグライ化した砂層が交互に堆積している。

第3，4層からは、石鏃，石錐，須恵器，土師器，瓦器，白磁，石鏃，鉄製品などが出土した。弥生時代から13～14世紀までの遺物が混在している。第5層からは飛鳥時代の須恵器が1点出土している。

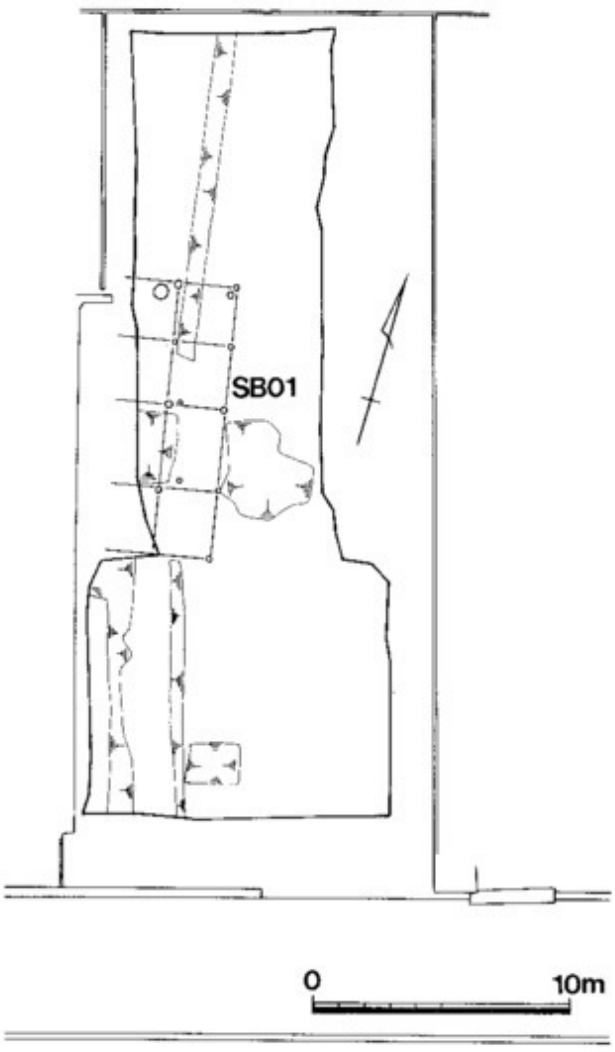

fig.316　調査地平面図

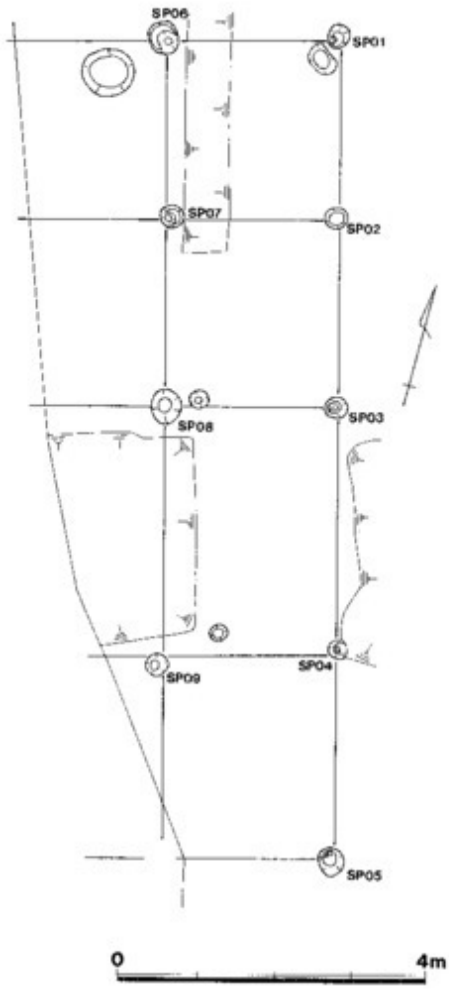

fig.317　ＳＢ01平面図

fig.318
SB01全景（北から）

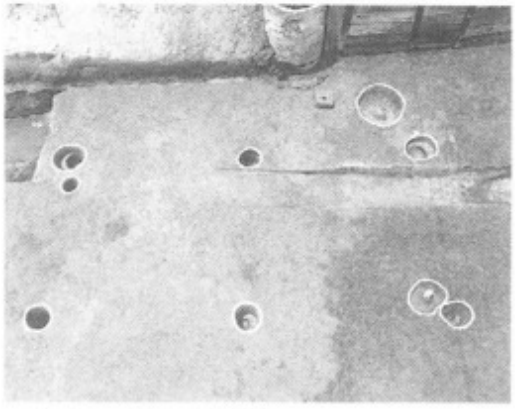

fig.319　SB01（西から）

fig.320　柱根検出状況

fig.321　調査区全景（南から）

遺　構

SB01

地表下約1.1mの第５層上面で中世の遺構面が検出された。遺構は、南北４間、東西１間以上の総柱の掘立柱建物址１棟（ＳＢ01）と柱穴４基がある。

ＳＢ01の規模は、南北が10.6mであるが、東西については、その西部分が調査区外となるため明らかにしえない。確認されたＳＢ01の９基の柱穴のうち、ＳＰ03、04、05の３基に柱根が遺存している。

柱穴内から出土した土器から、ＳＢ01は11世紀代の建物址と推定される。

３．ま と め

今回の調査では、中世・平安時代・飛鳥時代・古墳時代・弥生時代の遺物が出土し、遺構は平安時代の掘立柱建物址１棟が検出された。

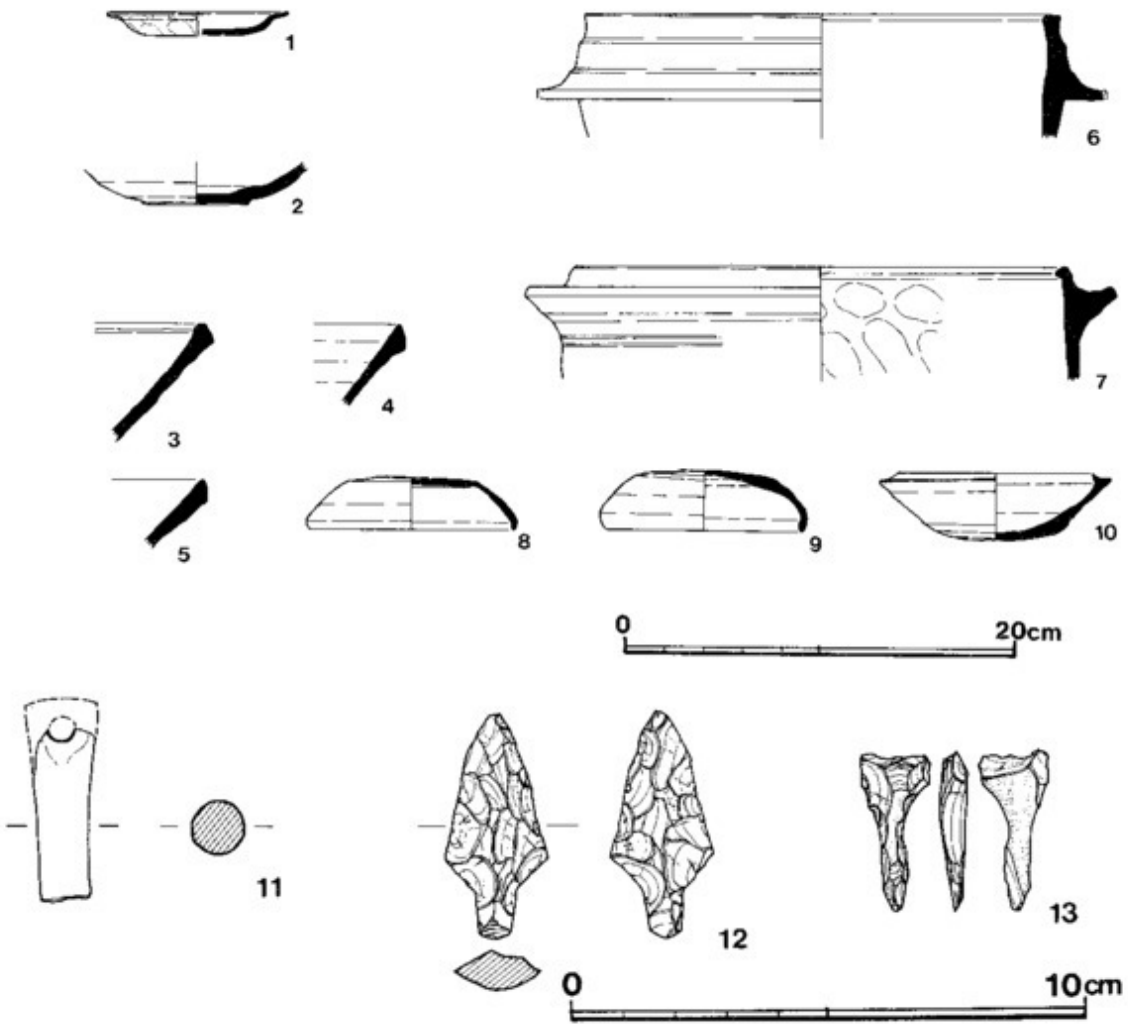

fig.322　魚崎中町遺跡出土遺物　１：ＳＢ01－ＳＰ01　２・７～９・12・13：第４層
３～６・11：第４層　10：第５層

28．本山遺跡（ちとやま）

1．はじめに　本遺跡は、市街地の再開発にともなう調査によって、近年に至ってその存在が確認された遺跡である。これまでに11次にわたる調査が行われ、中世と弥生時代の遺構、遺物が確認されている。今回は第12次調査にあたる。

2．調査の概要　今回の調査は、会社ビル建設に伴う事前調査である。建物の基礎部分の工事によって遺跡に影響が及ぶ部分をつなぐ東西のトレンチ４本を設定し、調査を行った。

調査の結果、遺物包含層と遺構面５面が確認された。

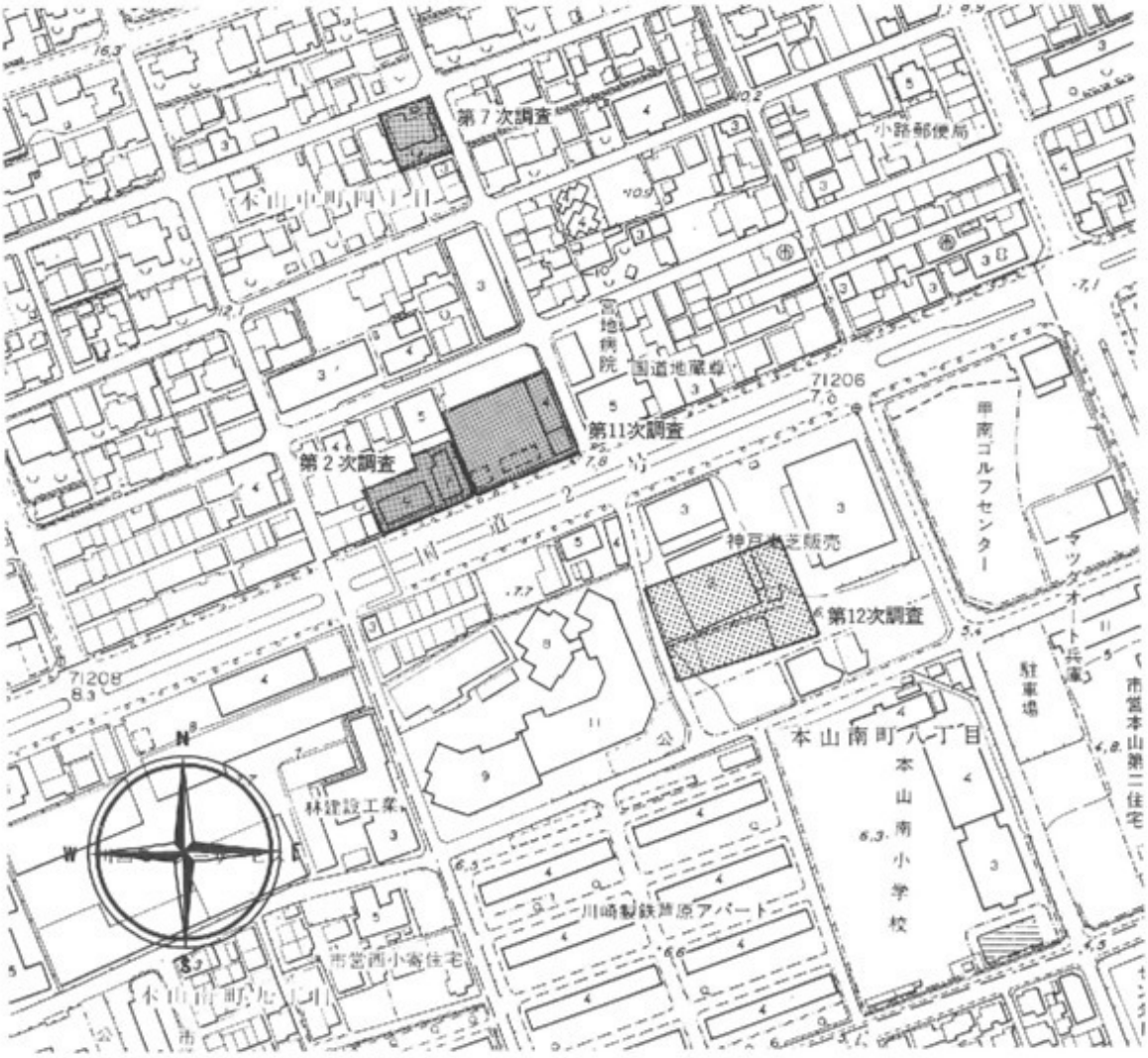

fig.323　調査地位置図　S＝1：3000

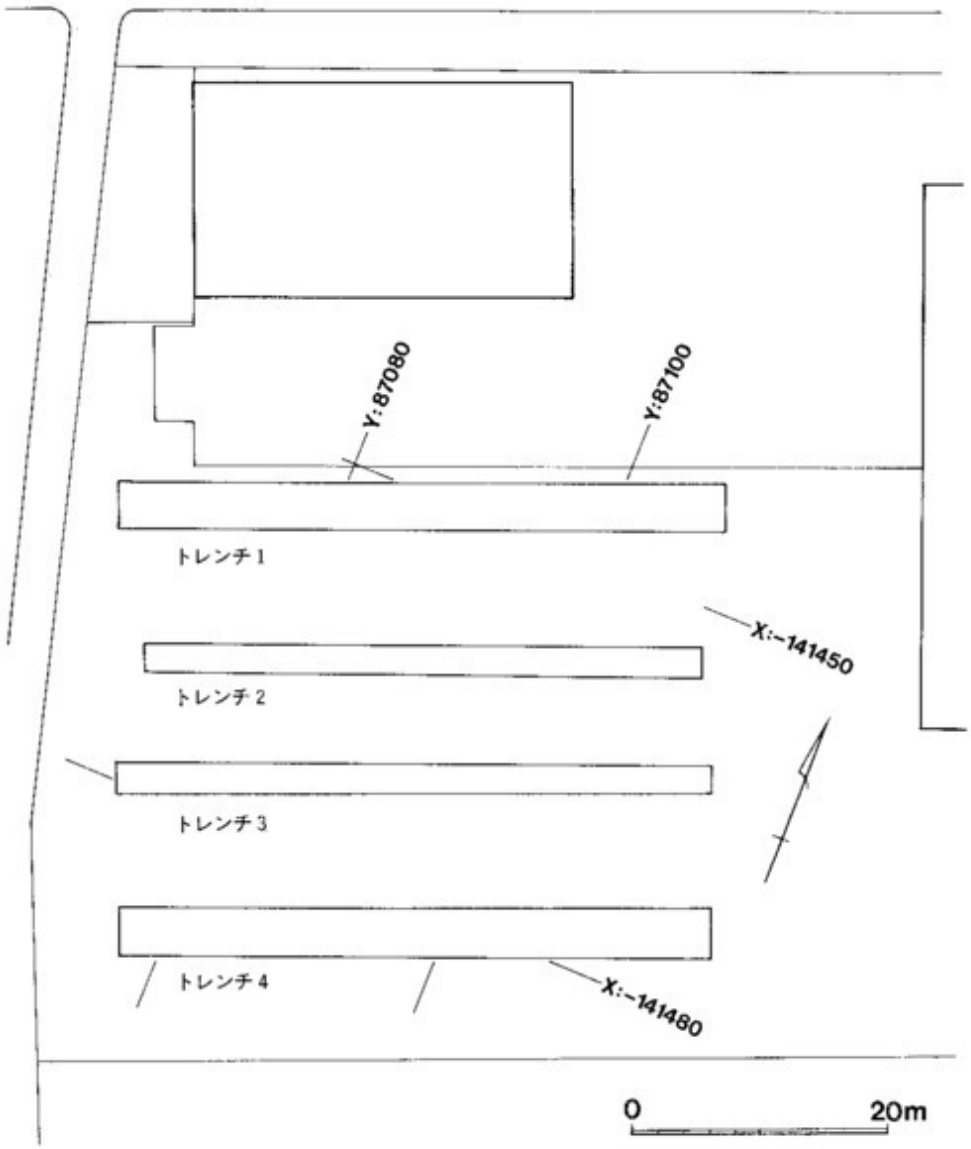

fig.324　トレンチ配置図

層　位

基本層序は、上から1a層盛土、1b層黄褐色粗砂、1c層オリーブ灰色シルト、2a層暗灰褐色砂交りシルト、2b層暗灰褐色砂質シルト、3a層暗灰褐色砂交りシルト、3b層暗灰褐色シルト質砂、4a層暗褐灰色砂質シルト、4b層黄灰色砂、5a層暗灰褐色砂交りシルト、5b層暗灰褐色砂質シルト、6a層黒褐色シルト質粘土、6b層黒褐色砂交りシルト質粘土、7a層黒褐色砂交りシルト、7b層暗褐色砂質シルト、8a層黒色砂交り粘土、8b層暗褐色粗砂、9a層黒色シルト質砂、9b層暗褐色粗砂、10a層黒色シルト質砂、10b層暗褐色粗砂、10c層にぶい黄橙色粗砂、11a層明緑灰色シルト質細砂、12〜18層にぶい黄橙色粗砂と明緑灰色

シルト質細砂の互層、19層黒色シルト、20層地山の青灰色シルトである。

遺物包含層・遺構面

1層は昭和13年の洪水砂とそれ以降の盛土である。

2層上面が第1遺構面で昭和13年当時の水田が検出された。

5層上面が第2遺構面で、中世の畠が検出された。

8層上面が第3遺構面である。平面的には検出することができなかったが、断面の観察から水田の存在することを確認した。

8層と8'層は、中世と古墳時代後期の遺物を含む洪水砂である。

9層および一部10層の上面が第4遺構面である。弥生時代前期～中期の遺構が検出された。

11～18層は洪水砂層であるがほとんど遺物は含まれない。

19層は葦の根などが残る泥炭層であるが、その下面の地山直上において石器と土器片が出土している。

第1遺構面

トレンチ1～4において検出された。トレンチ3部分はほぼ全域が撹乱を受け、遺構面が残存していなかった。

昭和13年に発生した阪神大水害の洪水砂に覆われる水田である。等高線に沿うようなかたちの東西に長い形状となる。水田区画のための畦はその下に石組みを有する堅固なつくりとなっている。暗渠排水施設を備える。

トレンチ1では水田面が平滑にととのえられた部分と田起こしをした状態で凸凹のある部分が存在する。水田面の状況は、この洪水が襲った時期が田植えの時期あるいはその直前であったことを物語っている。耕土からの遺物の出土はほとんどみられなかったが、水田面上に密着した状態で煉瓦やゴムなどが出土している。

fig.325
トレンチ1
第1遺構面
水田断ち割り状況
（東から）

第２遺構面　トレンチ４の一部で確認された。４ｂ層の黄灰色砂に覆われる畠である。後世の削平をうけており、４ｂ層もこの畠部分だけに残存している。一番南の一段下がった畠だけが残存したものと考えられる。

畠はその北隅部分が確認されたにすぎないが、東西30.8mの間で南北方向の畝28本が検出された。ほぼ１mに１本の割合である。

なお、畠の北で東西方向の幅25cm、深さ２cmの溝が検出されている。その覆土は畠を覆う４ｂ層であり、溝状の遺構が削平され、その底部分がわずかに残存したものと考えられる。さらにトレンチ東部では、東西方向の帯状に土の柔らかい部分とそうではない部分とがある。これらのことから、削平された部分にも東西方向の畝が存在した可能性がある。遺構確認面から瓦器などが出土しており、中世以降のものと推定される。

他のトレンチでは第２遺構面は確認されなかった。

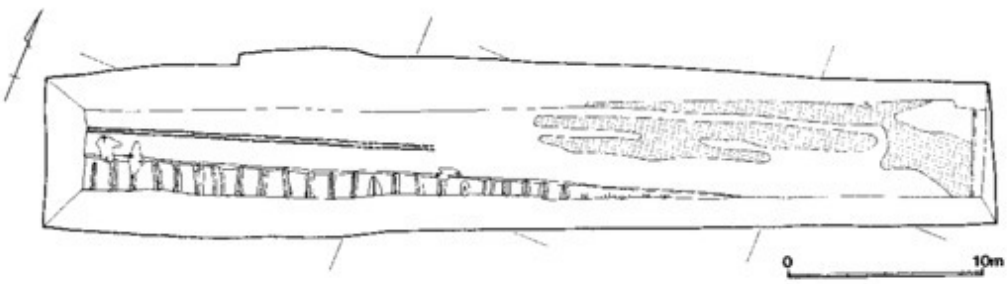

fig.326　トレンチ４第２遺構面平面図（網線部分：周囲より遺構面が柔かい部分）

第３遺構面　平面的には検出できなかったが、トレンチ１・４などの土層断面の観察によって確認された遺構面である。８ａ層の上面は水平で部分的に畦状の盛り上がりが確認でき、水田と考えられる。８層からは中世の遺物が出土しており、水田の時期も中世と推定される。

第４遺構面　トレンチ１～４で確認された。トレンチ２～４では流路のみが検出された。トレンチ１では流路は検出されず、土器が集中して出土する地点３ヵ所や柱穴・土坑などの遺構多数が検出された。また、土器ブロック中央部分から銅鐸が出土している。

流路１　トレンチ３の西部にある。幅６m程度、深さ約60cmの南東に流れる流路である。覆土から弥生土器が出土している。

流路２　トレンチ３の中部にある。トレンチの北壁では幅12.8m、南壁では幅7.6mと下流の方が狭くなる。北部分はその中央が高くなることから、２本の南流する流路が合流する部分の可能性が考えられる。深さは約80cmである。覆土中から弥生土器が出土したほか、底面から磨製石剣が出土している。

流路 3　トレンチ３の東部にある。南西に流れる幅14m程度、深さ約40cmの広く浅い流路である。中央部分が幅3.7mの幅でさらに一段50cm程度深くなる。覆土中から弥生土器とともに流木が出土している。

流路 4　トレンチ２の東部にある。南西に流れる幅10m程度、深さ80cm程度の流路である。流路５と切り合い関係があり、４の方が新しい。覆土中から弥生土器・石包丁などとともに多量の流木・木材が出土している。それらは上下２層の黒色の砂質シルト中に存在するが、上層では枝を落とした太さ15cm程度の立木を長さ5.1～1.9m程度に切った木材７本が並べられたような状態で出土している。

流路 5　トレンチ２の中部にある。幅7.5m程度、深さ約80cmの南流する流路である。覆土中から弥生土器・石庖丁とともに流木が出土している。

流路 6　トレンチ２の西部にある。南流する幅８m以上、深さ約80cmの流路である。覆土中から弥生土器・流木が出土したほか、上層から一括して投棄された石器（大型石庖丁２・石庖丁２・太型蛤刃石斧１・大型砥石１）が出土しており、注目される。また下層からも太型蛤刃石斧が出土している。

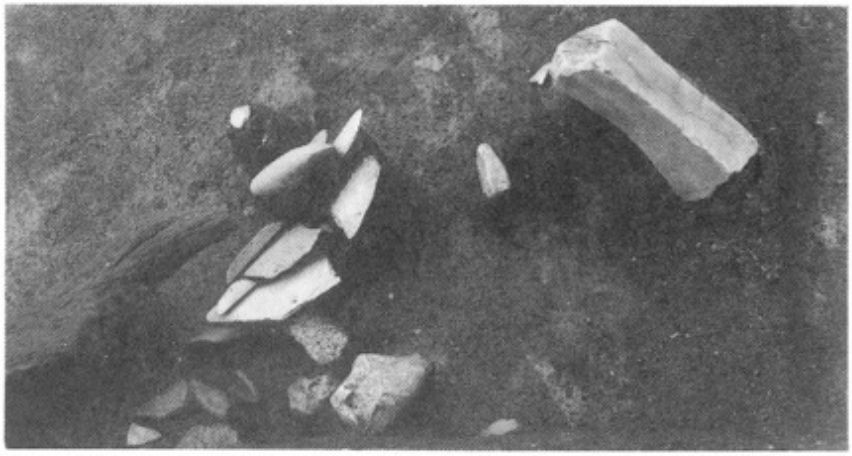

fig.327
トレンチ２流路６
石器出土状況
（南東から）

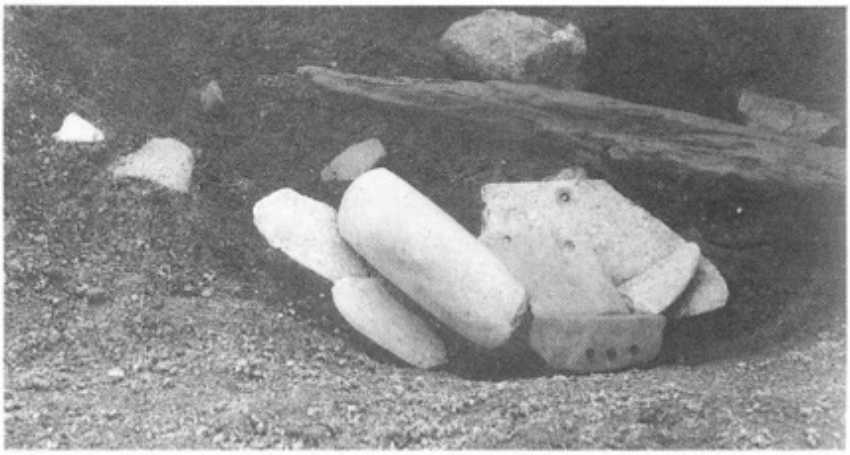

fig.328
トレンチ２流路６
石器出土状況
（北から）

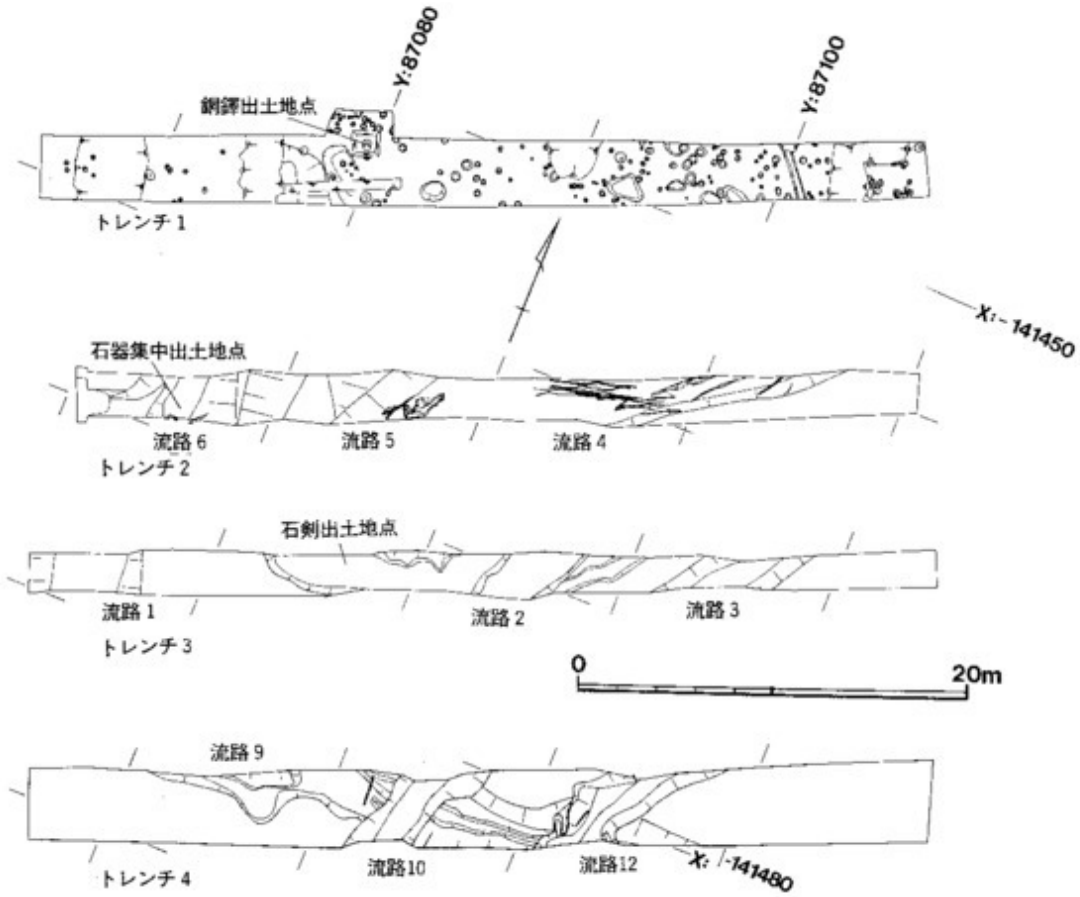

fig.329　第4遺構面平面図

流路9　トレンチ4の中部にある。幅約5.5m、深さ約30cmの東流する流路である。流路10・12と切り合い関係にあり、流路9が10・12よりも古い。覆土からは、弥生土器のほか建築材と考えられる木材や手斧痕の残る木製品が出土している。

流路10　トレンチ4の中部にある。幅約3.2m、深さ約1.0mの南流する流路である。流路9と切り合い関係にあり、流路9よりも新しい。底面には二股の杭が打ち込まれている。覆土からは弥生土器が出土している。

流路12　トレンチ4の中部にある。幅約3.5m、深さ約1.1mの南流する流路である。流路9と切り合い関係にあり、流路9よりも新しい。流路3と同一の流路であろう。土層堆積の状況から、この流路は人為的に埋め戻されている可能性がつよい。覆土からは、弥生土器のほか、表面を焼いた杭・篦状の木製品・石庖丁などが出土している。

土器集中地点　トレンチ1の3ヵ所において10a層中に多量の土器・石器が集中して堆積する箇所が確認された。それぞれの土器ブロックは時期的にほぼ単相をしめすものがあることから、当初、これらが遺構にともなうものである可

能性が考えられた。すなわち土器の出土した10a層は土壌化が著しいために、その上位では覆土に遺物を含む遺構が見えなくなってしまった可能性が想定された。しかし、遺物の出土レベルが北から南に均一に下がること、土壌化の進行していない10b層に至っても竪穴住居址などの大きな遺構は検出されなかったことから、これらの土器は集落の縁辺の緩い斜面地に投棄されたものであると判断される。

土器ブロック西　10a層の上位～下位の全般から弥生時代前期後半の土器が集中して出土した。

土器ブロック中央　10a層の上位は弥生時代中期の土器が出土している。下位は弥生時代前期後半～中期前葉の土器が中心に出土しており、さらに最下部分から突帯文土器が出土した。

土器ブロック東　10a層の上面付近では弥生時代中期の土器が一つの面上に散らばった状態で、それより下位では弥生時代前期後半～中期の土器が出土している。

柱穴・土坑　前述したように、10a層は土壌化が著しく、遺構の検出がすこぶる困難であった。第4遺構面調査完了後の壁面観察などによって、10a層上面付近から遺構が掘削されていることが確認できたが、大量の土器が存在することもあって10a層上位での平面的な遺構確認は不可能であった。このため、ほとんどの遺構は10b・10c層あるいは11a層まで遺構確認面を下げた段階でようやく検出することができた。

最終的には、柱穴150余基・土坑8基が確認された。

fig.330　トレンチ1第4遺構面土器ブロック西(北から)

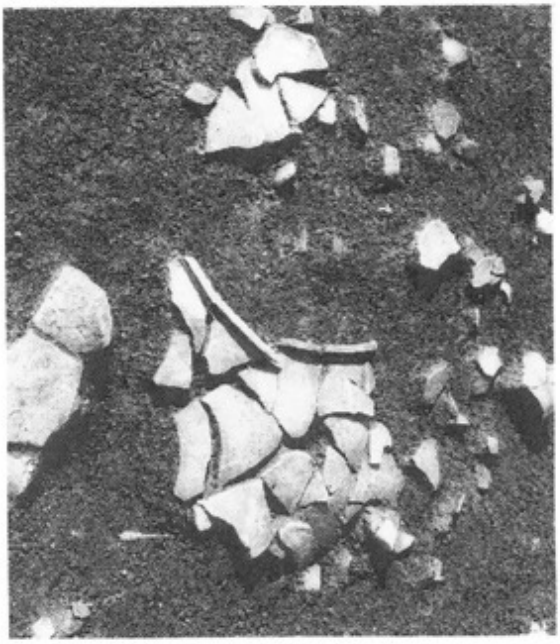

fig.331　トレンチ1第4遺構面土器ブロック東(南から)

銅　鐸
埋納坑

土器ブロック中央部分において銅鐸１口が出土している。10ａ層上面を検出した段階でその存在が確認された。銅鐸は34×30cmの楕円形の土坑に納められた状態で出土している。その覆土は周囲の土がやや砂質であるのに対して、粘土分がやや多い。しかし、その差異は微妙であり、遺物包含層である10ａ層に浸み出した銅鐸のイオン分によってその付近の土が変色した可能性も考えられる。この埋納坑は半截した状況で切り取り保存しており、今後の調査によって、この銅鐸が遺物包含層中に含まれるものなのか、埋納坑に納められたものなのか判明すると思われる。

銅　鐸

銅鐸の出土状況は通例みられるような鰭をたてた状態ではなく、鰭が45度程度に傾いた状態で出土している。裾部分に比べ鈕部分のレベルがやや高い。

銅鐸は鈕がその一部を残して欠損するが、身部分は完全な形で遺存している。銅鐸出土地点の南部分はパイル打ち込みによる撹乱を受けており、銅鐸の欠損部分はこれにひきずられてしまった可能性がある。現高が18.1

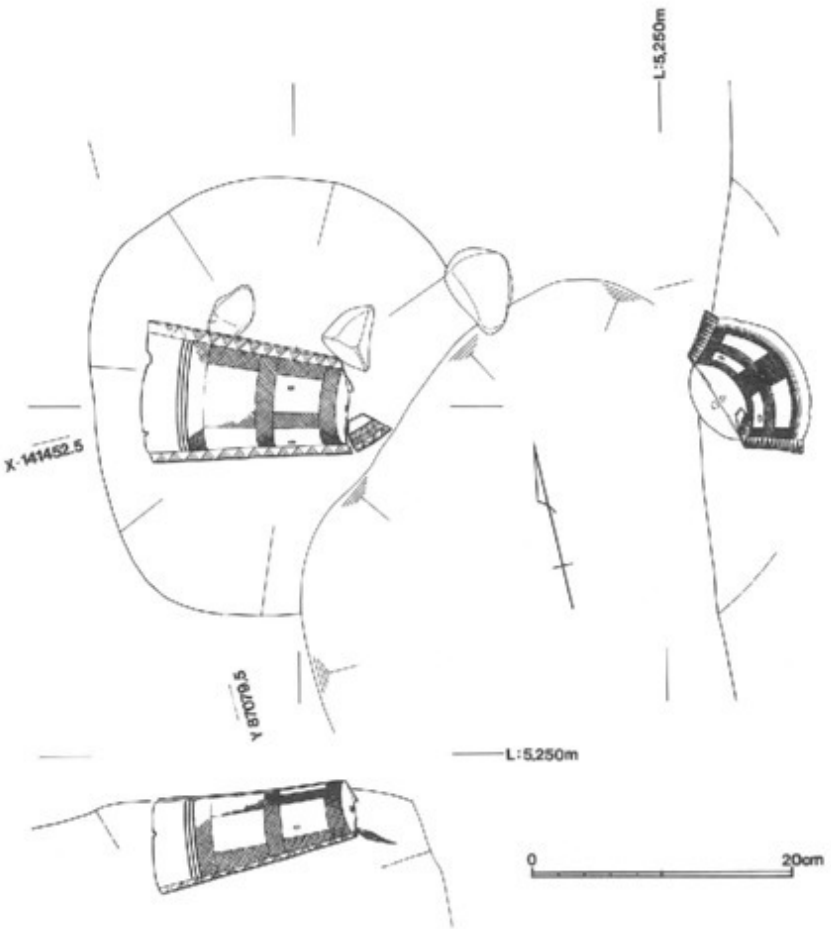

fig.332　銅鐸出土状況図

cmあり、鈕のカーブから本来の高さを推定すると21.8cmとなろう。身部分の高さ16.2cm・舞部分の幅7.2cm・裾幅11.4cmを測り、舞部分で0.9cm、幅・裾部分で1.2cm幅の鰭がつく四区袈裟襷文銅鐸である。小型の銅鐸としては、かなり鋳あがりのよい、文様の鮮明な銅鐸である。鋳掛けも丁寧に施されている。鉄分の付着があるものの、出土当初は新しい銅色を残す部分があるなど、保存状態も良好であった。

銅鐸の舌そのもの、あるいは腐朽した舌の痕跡が残されている可能性があるため、銅鐸の内部に土の詰まったままの状態でレントゲンをかけ調査したが、舌の存在は確認されなかった。

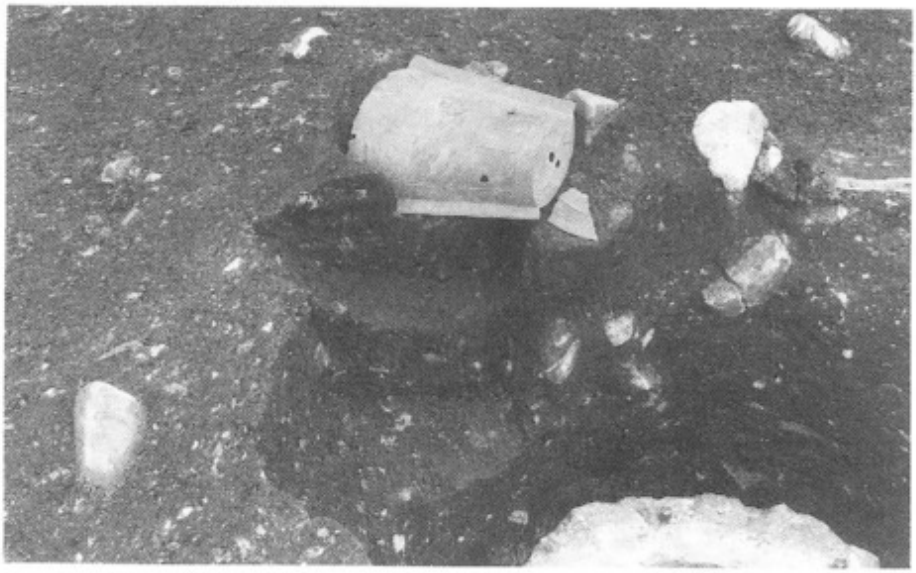

fig.333
トレンチ1
第4遺構面
銅鐸出土状況
（南から）

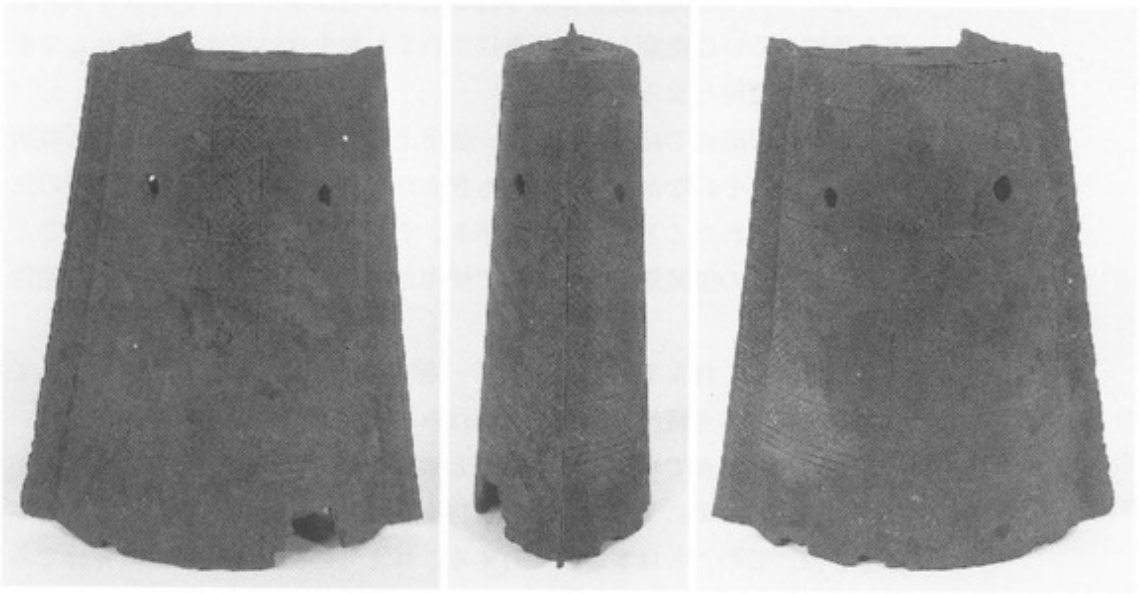

fig.334　トレンチ1出土銅鐸

第5遺構面　第4遺構面の下は何層もの洪水砂が厚く堆積しているが、この土層には土器片がわずかに認められる程度で遺物はほとんど含まれていない。この下面が葦の根などが残る泥炭層の19層である。トレンチ1ではこの層を除去すると、地山と考えられる固く締まった青灰色シルト層が検出される。

この地層は40度以上で南に急傾斜しており、波蝕崖と考えられる。この崖を埋める泥炭層の最下部分で石器・土器片が出土した。

なお、トレンチ1に先行して調査を行ったトレンチ2～4では19層を無遺物層と認識していたため、その上面を確認した段階で調査を終了している。発掘調査前に行われたボーリング調査によればすべての地点で1～2m程度の厚さで19層が堆積し、さらにその下に砂層が存在する模様である。

3．まとめ

今回の調査では、縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代・中世の遺物が出土し、遺構は中世・弥生時代のものが検出された。

第5遺構面の調査で、トレンチ1の数メートル北から堅い更新世層が地表面となるのに対し、その南は洪水砂が堆積した不安定な砂層が地表土となっていることが確認された。

第4遺構面においてトレンチ2～4では流路しか遺構が存在しなかったことから、当時においても今回の調査地点は集落を営むには適していない低湿な地形であったと推測される。集落は北の堅い基盤層上に営まれ、トレンチ1部分はまさに地形の移り変わる縁辺部分であったと考えられよう。

このような所に銅鐸が埋納あるいは投棄されるということ、埋没寸前の流路に儀礼的なものと考えられる石器類が一括して棄てられるということは、当時の人々の境界観などを考える上での有力な手がかりとなろう。銅鐸の埋納あるいは廃棄という行為についても数少ない平地出土例として本例は貴重な資料となろう。

また今回の調査では、前述した一括出土の石器のほかにも多量の石器類が出土した。そのなかには未製品も含まれており、この集落で石庖丁の生産がおこなわれたことが明らかである。その石材も複数が認められることから、石庖丁の生産量も一集落内で使用されるものにとどまらない可能性がある。

本山遺跡はこれまでは中世の遺構・遺物が主体の遺跡として認識されていたように、弥生時代の遺物・遺構はみるべきものがほとんどなかった。しかし今回の調査では、集落の縁辺ということで遺構は柱穴・土坑・流路などが検出されたにすぎないが、予想をはるかに越える弥生時代の遺物が出土した。このことは本遺跡に対するこれまでの認識を改めるに充分であろう。

29．森北町遺跡（もりきたまち）

1．はじめに　本遺跡は、昭和39年にその存在が確認された遺跡で、以降７次にわたり発掘調査が行われている。

過去に行われた調査では、縄文時代から近世にいたるまでの数多くの遺物・遺構が確認されている。とりわけ弥生時代・古墳時代の遺構・遺物にはみるべきものが存在し、当時大規模でかつ有力な集落が当地に存在したことがあきらかになっている。今回の調査は第８次調査にあたる。

2．調査の概要　調査の結果、４枚の遺構面が確認された。第１遺構面が飛鳥時代、第２遺構面が古墳時代後期、第３遺構面が古墳時代前期～中期、第４遺構面が弥生時代中期～後期のものである。

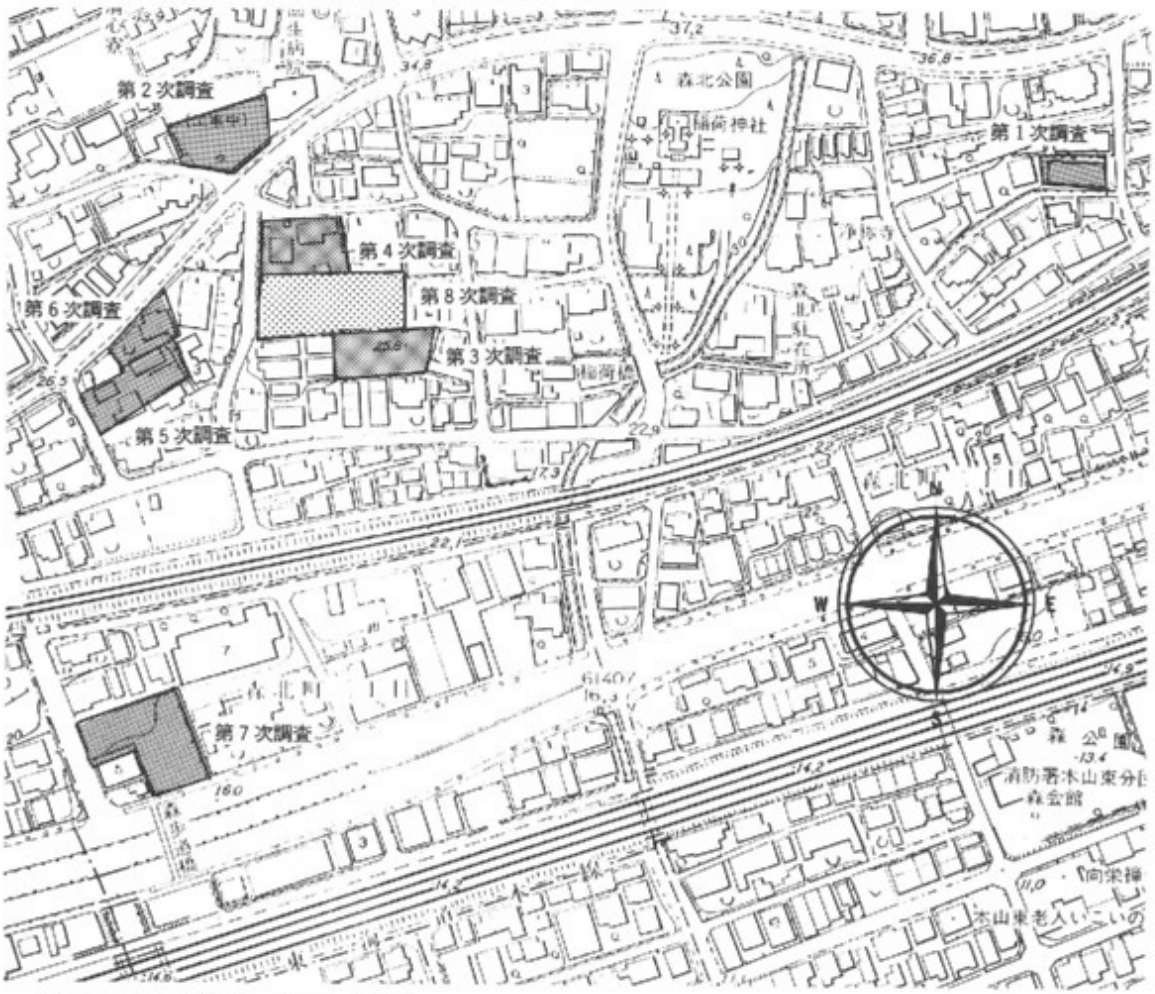

fig.335　調査地位置図　S＝1：3000

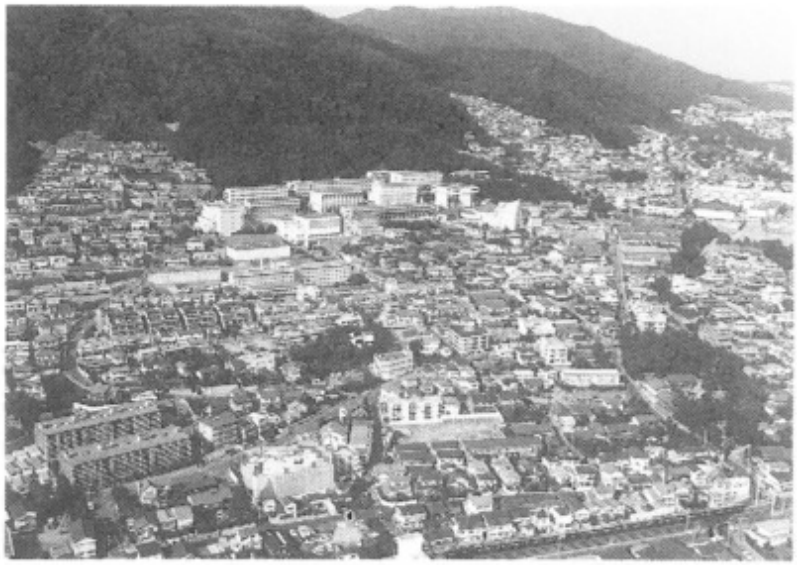

fig.336
調査地遠景
（南西から）

第１遺構面　　水田とこれに伴う流路・溝、掘立柱建物址１棟が検出された。

水田遺構　　調査区の西部で７面が確認された。幅20cmほどの小さなあぜで長方形に区画され、ひとつの面積が15㎡程度と比較的小規模な棚田である。幅40cm・深さ40cmの溝（ＳＤ04）をともなう。

水田を覆う洪水砂の上層から奈良時代の須恵器などが出土していること、耕作土から７世紀代の須恵器が出土していることから、７世紀代のものと考えられる。

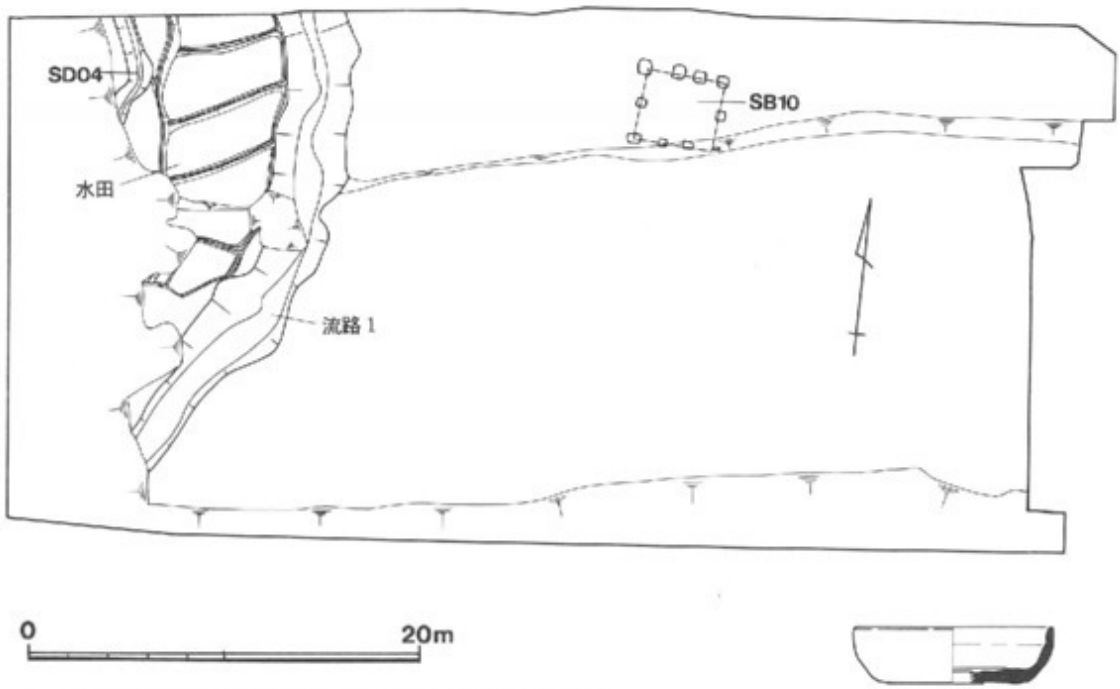

fig.337　第１遺構面平面図・第１遺構面水田耕土出土須恵器　Ｓ＝１：４

流路1　水田の東に接し、北から南南西に流下する流路である。幅2.8m、深さ50cmをはかる。この流路から水田に水を供給したものと考えられる。水田を覆う洪水砂が流路1の東にも広がっていることから、この部分もこの洪水以降撹乱を受けていないことが確かめられるが、流路1の東では水田は検出されていない。西に傾斜し、谷地形となる流路1の西側部分だけが棚田として利用されたことが確認された。

SB10　遺構面が比較的平坦となる流路1の東側部分で検出された。2間×3間の掘立柱建物址である。柱の掘形は、方形を呈し一辺約50cmをはかる。円柱の太さは径20cmをはかる。

柱穴内から出土した遺物からは時期を特定できないが、柱穴の形状などから第1遺構面に属する遺構と推定される。

第2遺構面　池状遺構（SX05）・流路（流路10・12）などが検出された。5世紀代の遺構面である。

SX05　調査区の南東部で確認された池あるいは流路と考えられる遺構である。須恵器・土師器のほか、自然木・多量の梅の種などが出土した。須恵器は5世紀前半から末までのものがみられ、韓式土器も出土している。これらの須恵器には第3遺構面を覆う洪水砂から出土した須恵器と接合するものがあり、SX05が5世紀前半には存在し、最終的に埋没するのが6世紀代に入ってからであると推定できる。

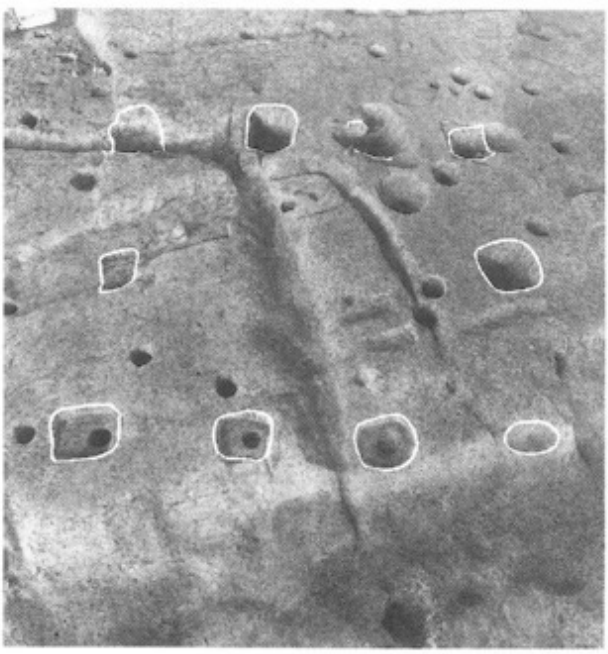

fig.338　SB10全景（南から）

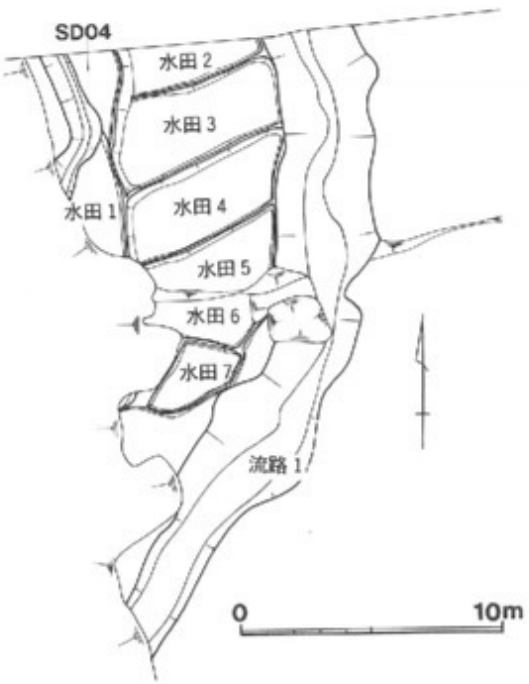

fig.339　第1遺構面水田・流路1平面図

なお、梅の種はえぐられているものがほとんどで、核を食べたことが知られる。

流路10・12　ともに最大幅4m、深さ1.3m程の流路である。南流する流路10の埋没後、ほぼ同じ位置を流路12が流下する。

5世紀後半の須恵器・土師器を中心とし、多量の遺物が出土した。流路10からは滑石製の有孔円板・臼玉も出土している。

第3遺構面　5世紀代の洪水砂に覆われる遺構面で、4世紀後半から5世紀前半の遺構が検出された。竪穴住居址（SB01）・流路（流路2・3・11）などがある。

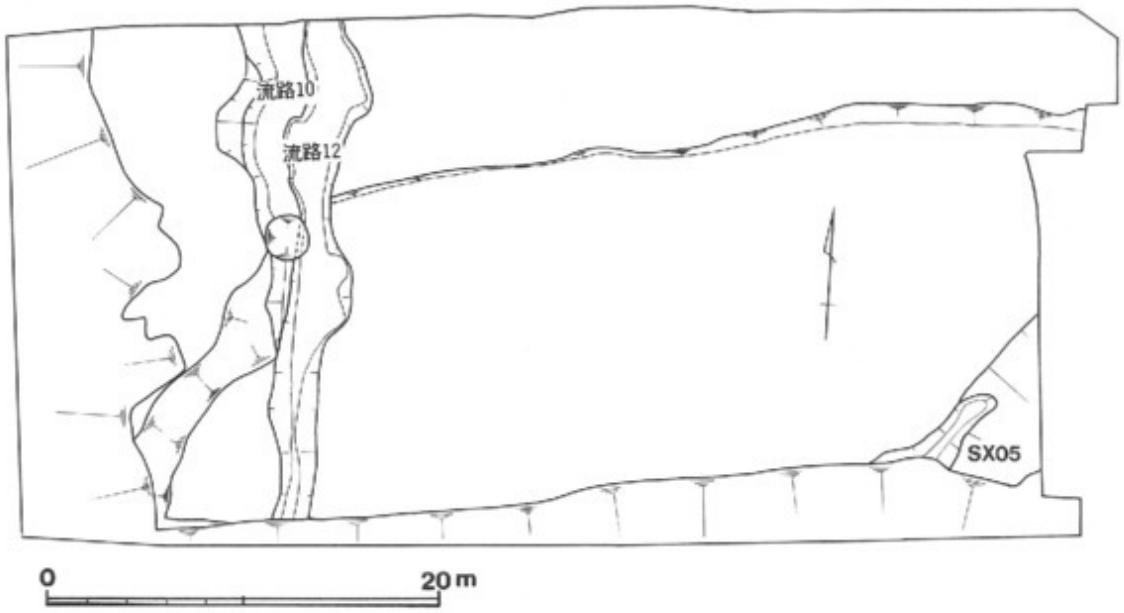

fig.340　第2遺構面平面図

fig.341
流路10・12
完掘状況（南から）

ＳＢ01　調査区の南西部にある方形の竪穴住居址である。その南半が調査区外にあるため、規模などはあきらかにできない。柱穴は１基（３基は調査区外）が検出された。５世紀中頃の須恵器が覆土中から出土している。

流路11　調査区の西部を南東に流下する流路である。後世の撹乱によって西岸が確認できなかったため、幅は不明であるが、残存する部分から少くとも14m以上あったことは確かめられる。これに対し、深さは確認できる最大値で80cmと比較的浅いものである。あるいは流路というよりもゆるやかな谷状地形に洪水砂が堆積したものと考えた方がよいかも知れない。流路の底面に密着した状態で土師器が出土しており、５世紀代前葉のものと考えられる。また、覆土中から土師器のほか石製の紡錘車が出土している。

流路２　調査区の南西で検出された流路である。北西から流下し、南に屈曲する。幅5.5m、深さ約1.5mをはかる。４世紀後半の土師器のほか、スカイブルーのガラス小玉１点が出土した。土器のなかには東海地方で製作され、当地に搬入されたものがみられる。

流路３　調査区の南西隅で検出された流路である。流路２に切られ、調査区内ではそのごく一部が検出されたにすぎない。したがって規模についても明らかにしえない。４世紀後半の土師器が出土している。

洪水砂　調査区北半の中央付近に堆積していた砂層で、土師器とともに初期須恵器あるいは韓式土器が出土している。

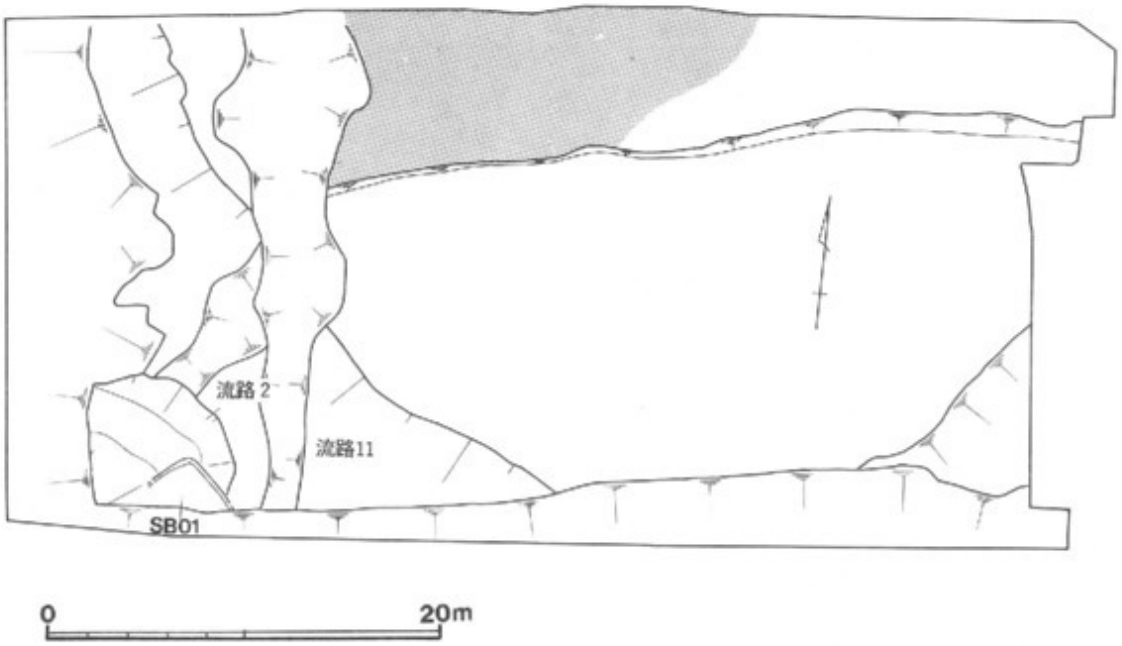

fig.342　第３遺構面平面図（網線：初期須恵器あるいは韓式土器を含む洪水砂の広がり）

第4遺構面　地山面近くで検出された遺構面で、弥生時代中期から4世紀代の遺構が検出された。竪穴住居址（ＳＢ02～09）、掘立柱建物址（ＳＢ11）流路（流路4・5・13・14）、溝（ＳＤ05・07・他）などがある。

ＳＢ02　調査区の北西部にある方形の竪穴住居址である。流路13・10などによって削られ、その北部分がわずかに残るにすぎない。柱穴は検出されなかった。覆土から土器が出土している。

ＳＢ03　調査区の中央部にある一辺約4.5mの方形の竪穴住居址である。上屋を支える柱穴は4基が確認された。住居の中央に炉が設けられ、その北に作

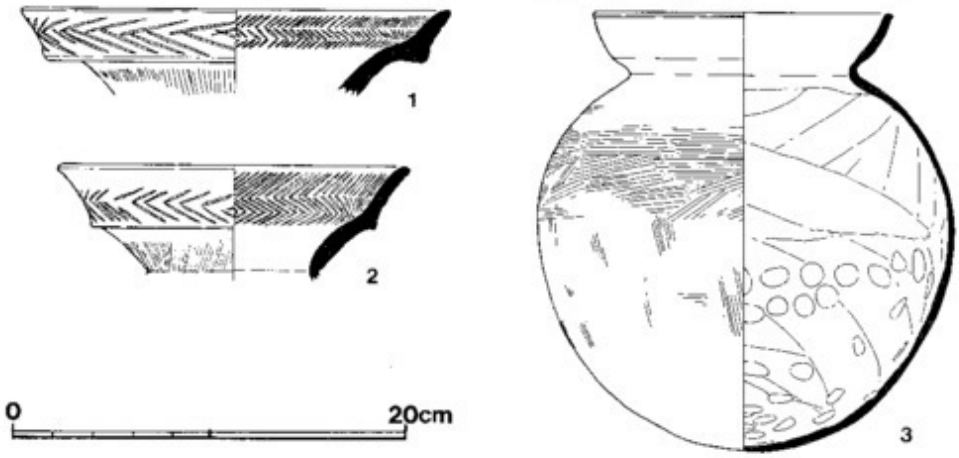

fig.343　第3遺構面流路2出土土師器

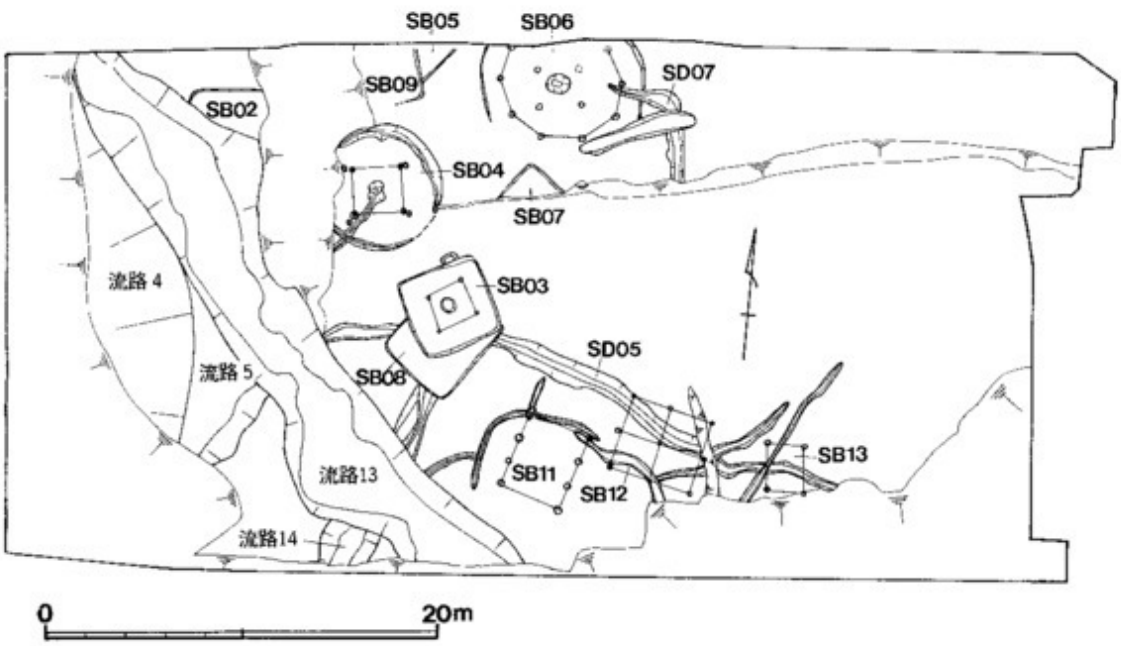

fig.344　第4遺構面平面図

業台として用いられたと推定される方形の石が置かれる。多量の弥生時代後期の土器のほか、抉入石斧が出土している。

ＳＢ04　調査区の北西部にある径6.5mの円形の竪穴住居址である。上屋を支える柱は２本一組となるもので柱穴は４組が検出された。住居の中央に炉が設けられ、炉から住居外にのびる湿気ぬきの溝が掘削されている。また周壁溝が巡らされ、このなかに土器が落ち込んだ状態で出土している。炉の北と西の２ヵ所に作業台として用いられたと推定される石が置かれる。多量の弥生時代後期の土器のほか、銅鏃が出土している。

ＳＢ05　調査区の中北部にある方形の竪穴住居址である。第４次調査でその北半が調査されたもので、一辺が約4.3mとなる。炭化材が出土しており、焼

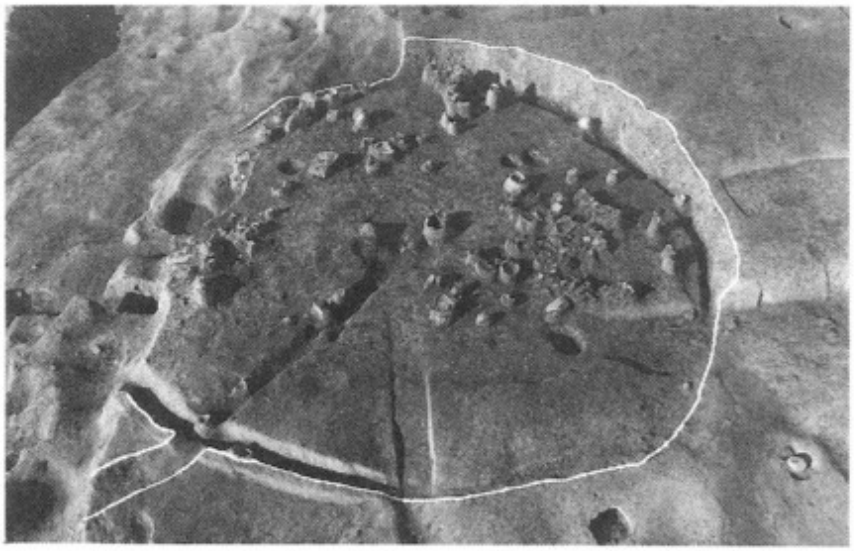

fig.345
ＳＢ04
遺物出土状況
（南から）

fig.346
ＳＢ04完掘状況
（南から）

失住居と推定される。

SB06　調査区の中北部にある径8.2mの円形の竪穴住居址である。その北部は調査区外にあり、南部分は流失している。柱穴は周壁に平行するもの6基が確認された。その間隔から全体では10本があるものと考えられる。また住居の中央部で4本一組となると推定される柱穴3基（1基は撹乱によって破壊）が検出されており、これも棟柱を支えるためのものと考えられる。住居の中央に炉が設けられる。弥生時代後期の土器のほか、石製紡錘車が出土している。多量の炭化材が残存しており、焼失住居と考えられる。

SB07　調査区の中北部にある方形の竪穴住居址である。後世の撹乱を受け、その北部分を残すのみである。

SB08　調査区の中央部にある4.2×5.1mの長方形の竪穴住居址である。この住居が埋没したあとでSB03が建てられる。柱穴は2基が確認された。住居の中央に炉が設けられる。覆土中から弥生土器が出土している。

SB09　調査区の北西部にある方形の竪穴住居址である。その南部は流失し、北部が調査区外となり規模は明らかにしえない。SB05と切り合い関係があり、SB09が新しい。

SB11　調査区の中南部にある3間×1間の掘立柱建物址である。柱穴の構成から弥生時代の遺構と推定される。

fig.347　SB06完掘状況（南から）

fig.348　SB03・04完掘状況（南から）

SB12・13　第４遺構面において、２棟の掘立柱建物址（ＳＢ12・13）が確認された。ＳＢ12は２間×２間の総柱の切妻建物に復元できる。ＳＢ13は１間×１間の小規模な建物に復元できる。ともに柱穴から時期を特定できる遺物の出土がない。

ＳＤ05　調査区の中央付近を北西から南東に流下する溝である。幅約１m、深さ約40cmあり、断面が薬研状を呈する。ＳＤ05の埋没後にＳＢ08が構築される。

ＳＤ07　調査区の中央やや北寄りの部分で確認された。西から南東に弧を描くように流下する。幅約80cm、深さ約30cmがあり、断面がＵ字状を呈する。ＳＤ07の埋没後にＳＢ06が構築される。

流路４　調査区の西で検出された流路である。南に流下する。幅３m以上、深さ約1.5mをはかる。流路13よりも古い。弥生時代後期の土器が出土した。

流路５　調査区の南西で検出された流路である。南に流下する。深さ約80cmを測る。流路13・４よりも古い。弥生時代後期の土器が出土した。

流路13　調査区の西で検出された流路である。南南東に流下する。幅約4.5m、深さ約1.2mを測る。北半は流路５・４・13がほぼ同じ位置を流下し、南部でそれぞれ方向を変える。流路５・４よりも新しい。弥生時代後期末あるいは古墳時代初頭の土器が大量に出土した。そのなかには山陽・山陰・河内など他地域で製作され当地に搬入されたものがみられる。

流路14　調査区の南西で検出された流路である。南に流下する。幅2.6m、深さ約80mを測る。流路13よりも古い。弥生時代後期の土器が出土した。

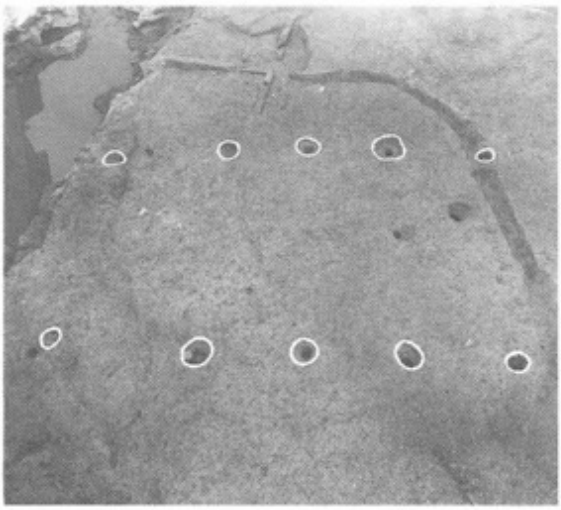

fig.349　ＳＢ11全景（西から）

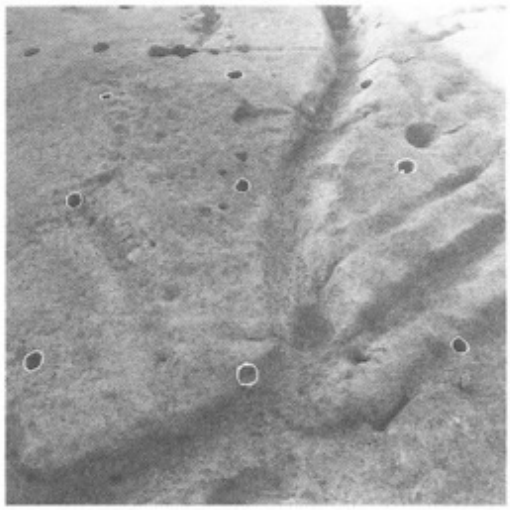

fig.350　ＳＢ12全景（南東から）

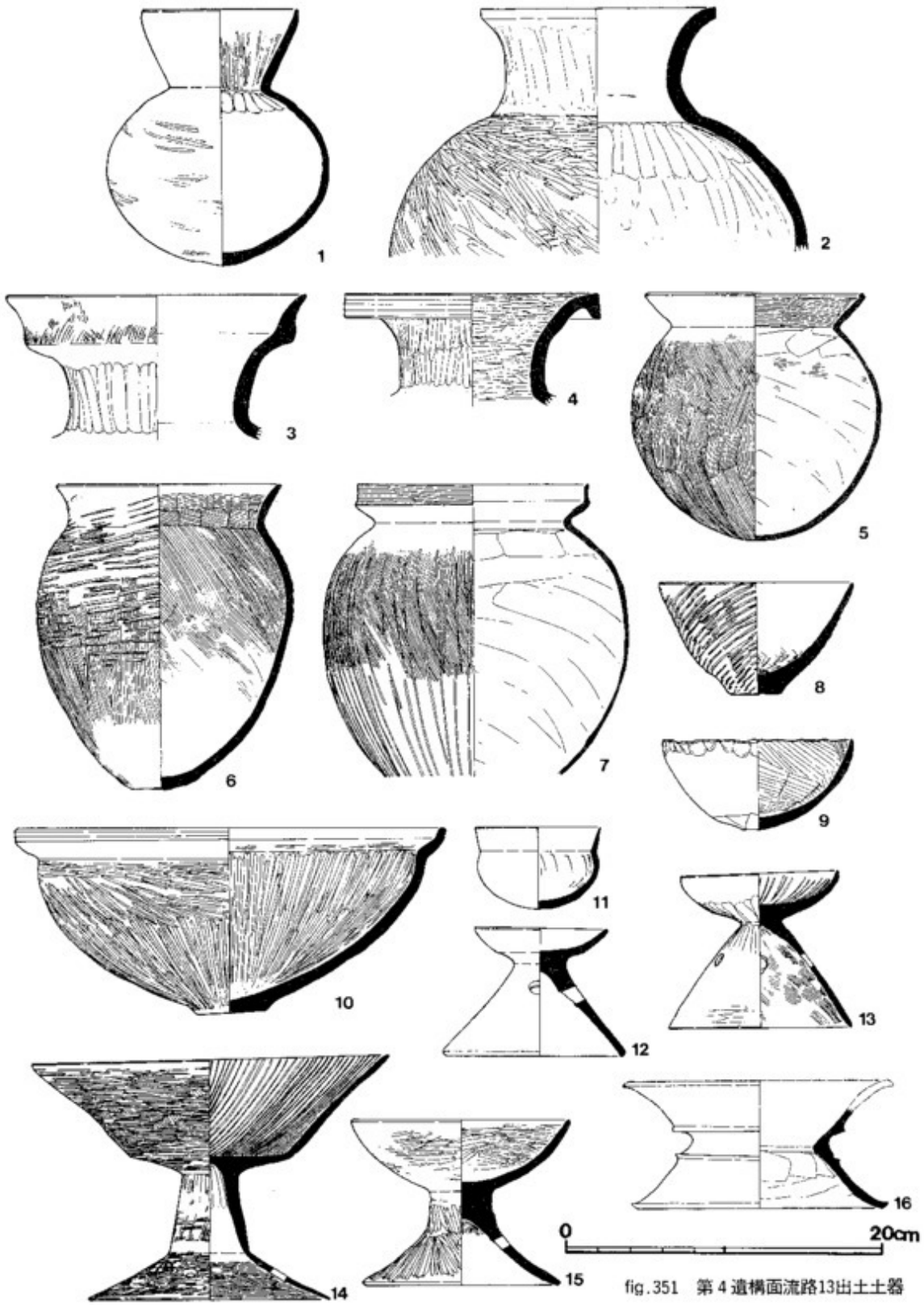

fig.351　第4遺構面流路13出土土器

fig.352　4遺構面河道13南部遺物出土状況（北から）

fig.353　第4遺構面河道13北部遺物出土状況（南から）

3．ま と め

今回の調査の成果で注目されるのは、第一に本遺構では、7世紀における農業経営が棚田による小規模な農業経営であった可能性が高いことが、この調査において、その一端ではあるが確認することができた。

第二は弥生時代後期から古墳時代にかけて当地にかなり有力な集団の存在していたことが明確になったことである。

弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての集落遺跡は2つのタイプに区分することが可能である。ひとつは小規模な集落で、そこで用いられる土器も在地のものがほとんどのタイプである。もうひとつは比較的大きな集落で、そこで用いられる土器に他地域で製作され搬入されたものがかなりの割合で認められるタイプである。

大多数の遺跡は前者に分類されるのに対して、後者は数が少なく、小規模な集落群のなかにその核となるかのように点在する。また、青銅製品の出土する割合が高いことも後者の特徴としてあげることができる。森北町遺跡ではこれまでの調査でも中国製の銅鏡・国産の銅鏃などが出土している。

これまでの調査の成果から、森北町遺跡は後者に分類されるものと考えられる。搬入された土器は、他地域との直接あるいは間接の交流が存在したことを示し、青銅製品の存在は、技術・文化の中心地であることを示すと考えることが可能であろう。

また、5世紀に入り朝鮮半島から新しいやきものとその製作技法が日本に伝わると、間断をおかずその製品を入手している点でも森北町遺跡の住人の先取性が窺われる。

これまでの調査によって、この遺跡は弥生時代後期から古墳時代にかけて、一般の村々を代表し、その核となるような、さらに他地域との交流のセンターとなるような拠点集落とでも呼ぶべきものであることがあきらかになった。

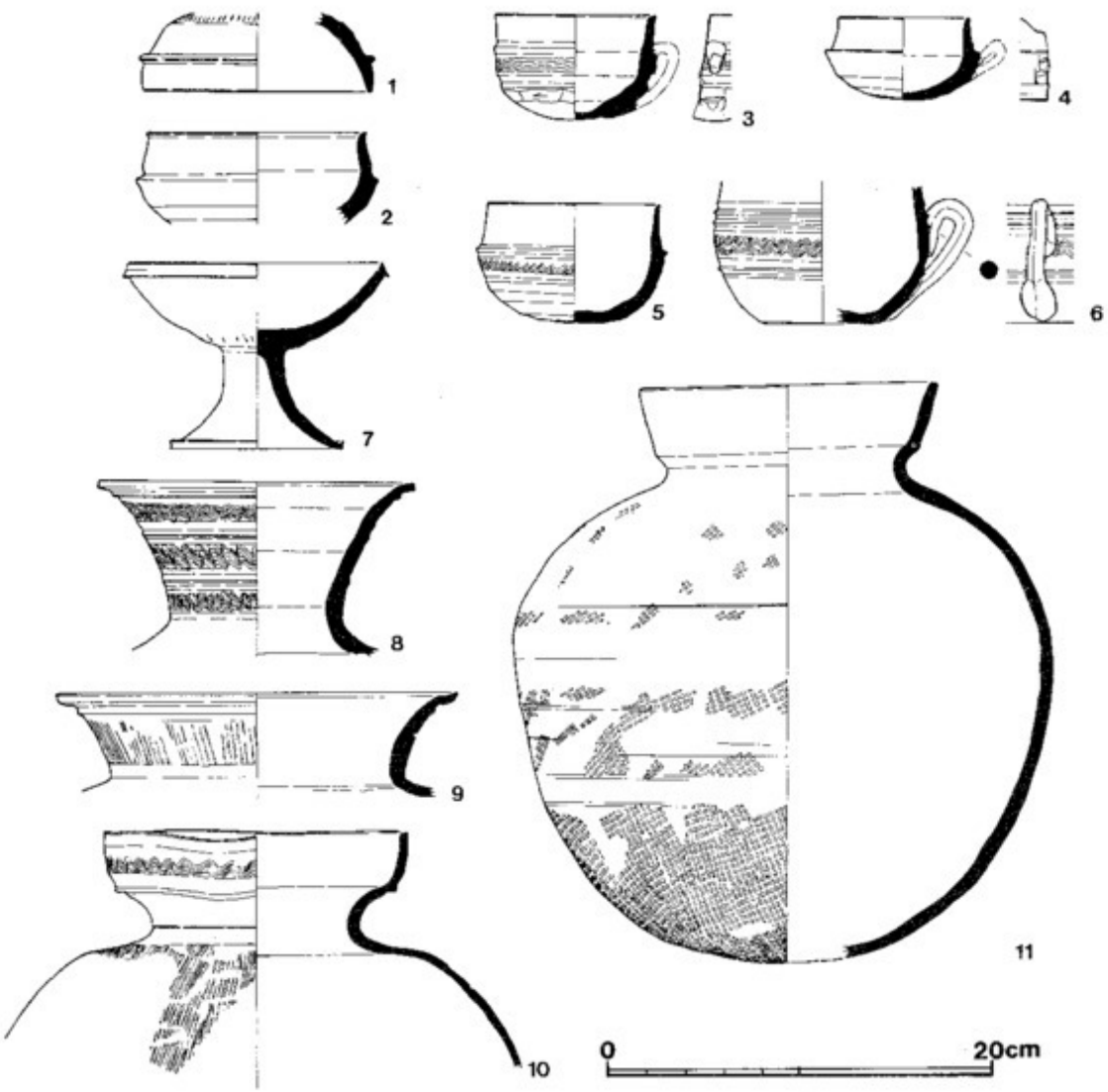

fig.354　森北町遺跡出土初期須恵器・韓式土器　　1～3・5～10：第3遺構面を覆う洪水砂
4：SB02　11：SX05

30．淡河中村遺跡（おうごなかむら）

1．はじめに

神戸市北区淡河町は神戸市の北端に位置し、西側を三木市、北側は美嚢郡吉川町に接する地域である。今回の発掘調査は、同町中村地区の土地改良事業に伴うものである。昭和63年12月～平成元年１月にかけて神戸市教育委員会の発掘調査が行われ、古墳時代前期の住居址２棟、鎌倉時代の井戸２基が確認された。

淡河町は、南北を山稜に挟まれ、その間を淡河川が東から西に流れている。川の周辺は河岸段丘による平坦地が形成されているが、その他の部分は丘陵、山地である。淡河町中村地区は川の右岸の淡河川流域でも比較的河岸段丘が発達したところに位置する。

2．調査の概要

第３－５号支線排水路の工事予定区域の一部、調査地区名№11地区の約40㎡について調査を実施した。その結果、奈良時代の掘立柱建物址１棟、土坑１基、ピット等が確認された。

fig.355　調査地位置図　S＝1：5000

ＳＢ01　　梁行１間以上、桁行３間の掘立柱建物址で、柱間寸法は梁行2.3m、桁行1.5m～1.9mである。梁行北面の西側の柱穴（ＳＰ02）から、須恵器坏が出土した。

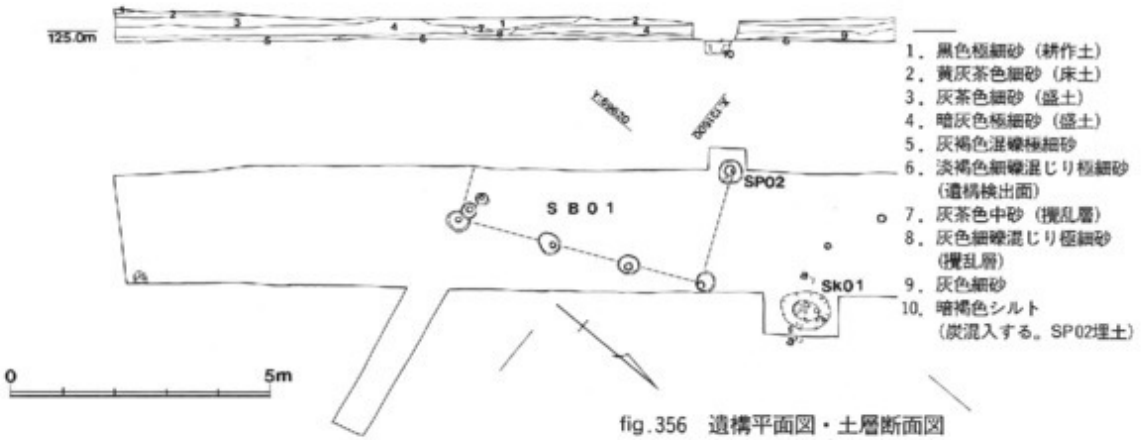

fig.356　遺構平面図・土層断面図

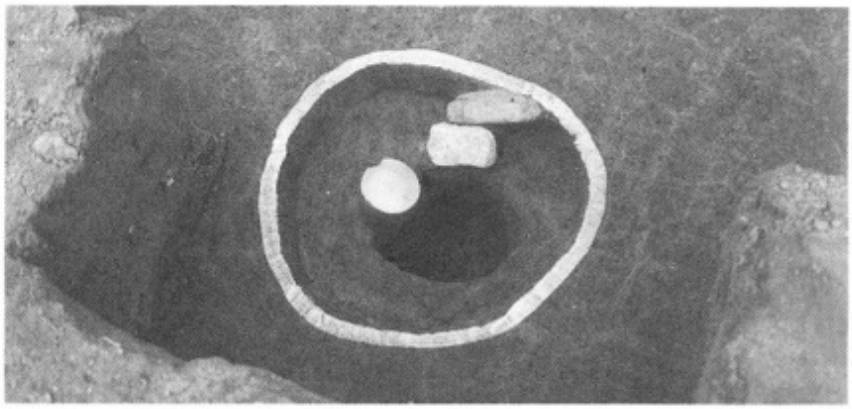

fig.357
ＳＰ02土器出土状況
（西から）

fig.358
調査区全景
（南東から）

ＳＫ01

掘立柱建物址の側柱の北には長径約１m、短径約0.7m、深さ約0.2mで擂鉢状に窪む楕円形の土坑が検出された。土坑の底面には土坑内で焚火を行ったように炭が0.03～0.05mの厚さで堆積し、拳大の河原石が６～７個、須恵器坏、甕片が埋土内およびその周辺から出土した。

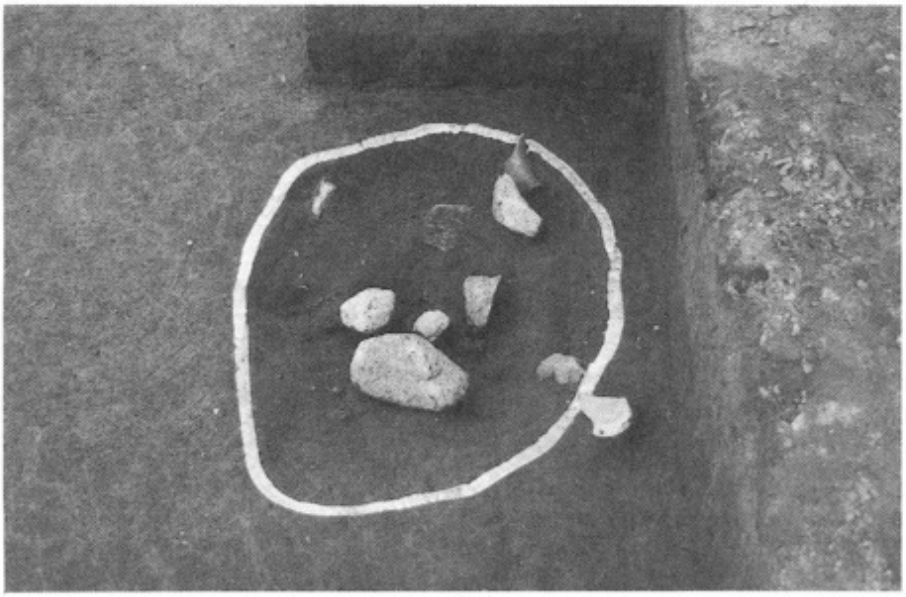

fig.359
ＳＫ01
土器・河原石
出土状況
（南から）

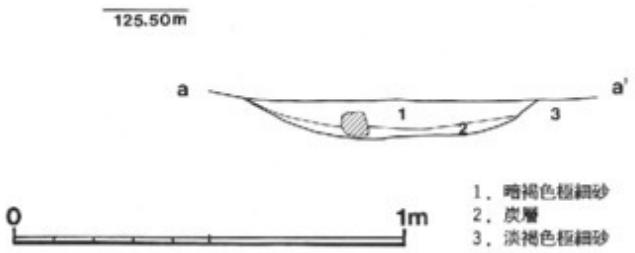

fig.360
ＳＫ01断面図

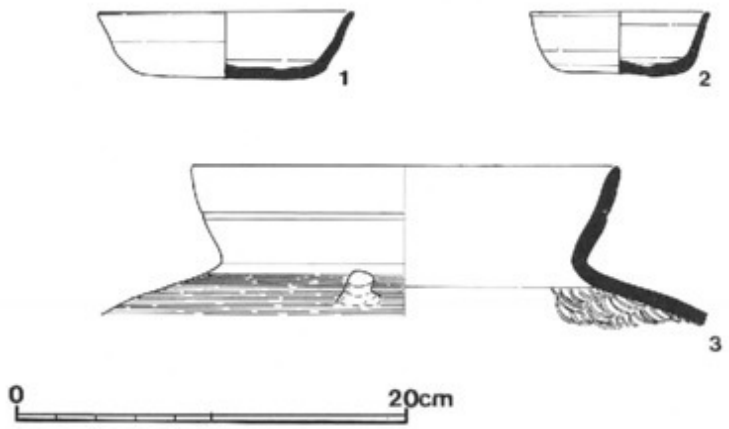

fig.361
淡河中村遺跡
出土土器
1･3：SK01
2：SP02

3．ま と め

今回の発掘調査では奈良時代の掘立柱建物址が確認された。しかし排水路幅の調査のため発掘面積が限定されており、その規模は明確でない。調査区の南端部分では、東から西に流れる土石流の巨礫が堆積しており、その部分を避けて建物を造っていることが判る。

今年度に中村遺跡調査団が調査した地区では、縄文時代～中世の遺構、遺物が広範囲に確認されており、断片的ではあるが中村地区の歴史が明らかにされつつある。当調査地区で検出された奈良時代の遺構についてはごく限られた資料であるが、それらの資料とともに、当時の集落の在り方を探るデータを提示したといえよう。

fig.362
調査地遠景
（南から）

fig.363
調査区作業状況
（南東から）

31．宅原遺跡（有井地区）

1．はじめに

宅原遺跡では昭和55年度以降、北神ニュータウン造成関連事業、圃場整備事業、道路建設事業等に伴う発掘調査が行われ、縄文時代から近世に至るまでの遺跡であることがわかってきた。そのうち有井地区では昭和61年度に県営圃場整備事業に関連して調査が行われ、古墳時代前期から後期および鎌倉時代の集落址であることがわかった。今回、神戸市北農業共同組合長尾支所の移転・新築工事が宅原遺跡有井地区内で計画され、それに伴って発掘調査を実施した。今回の調査は第２次調査にあたる。

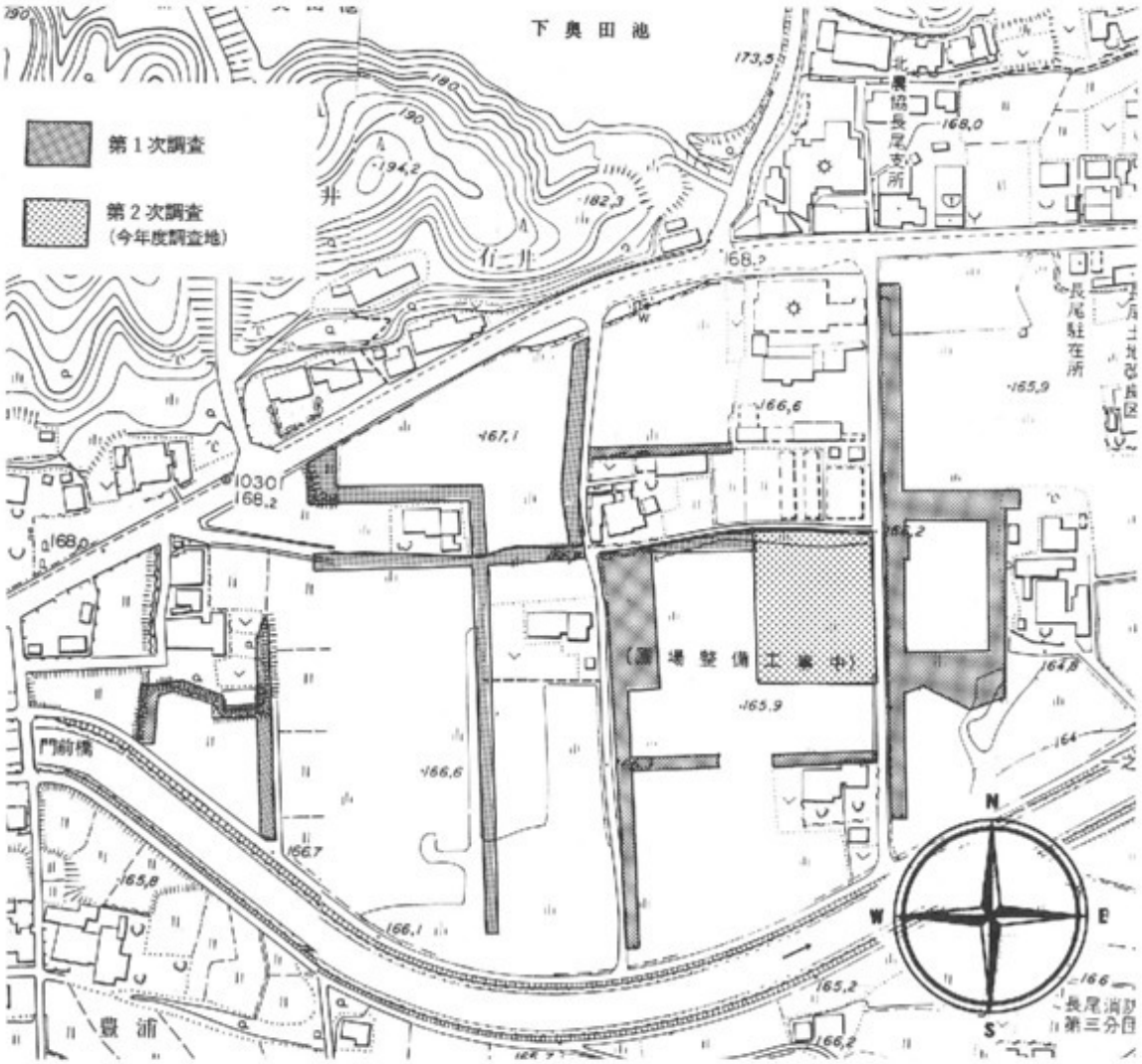

fig.364　調査地位置図　S＝1：3000

2．調査の概要　宅原遺跡有井地区は武庫川の支流である長尾川によって形成された谷の左岸沖積地に立地する。今回の調査区は浄化槽、擁壁及び建物基礎部分に設定した。今回の調査では、遺物包含層及び遺構面が工事によって削平される深度までを調査対象とした。しかし、竪穴住居址等の一部が検出された場合は調査区を拡張し、工事深度以下の一部に断ち割り調査を行い、下層の確認を行った。

基本層序　基本層序は上から第Ⅰ層－現耕土ないしは盛土層、第Ⅱ層－床土、第Ⅲ層－淡褐灰色粘質細砂層（近世耕土、床土層）、第Ⅳ層－淡灰色粘質シルト層（中世耕土層）、第Ⅴ層－明黄褐色粘質シルト層（遺構面）となる。

今回の調査では第Ⅴ層上面で古墳時代前期から中期の竪穴住居址６棟・土坑・ピット・古墳時代前期から後期の河道・鎌倉時代の溝等を検出した。

ＳＢ01　ＳＢ01は南北5.1m、東西4.4m以上の隅円方形の竪穴住居址である。東側は調査区外に出ているため全体の規模はわからない。遺構面からの深さ

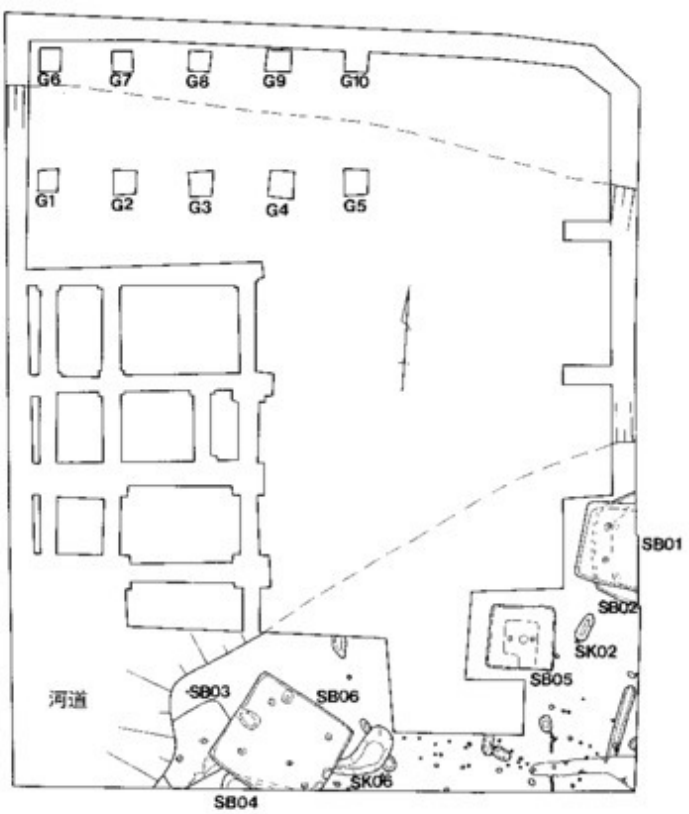

fig.365
調査区全体図

は30cmを測る。主柱穴は調査区内では２基検出され、４本柱と考えられる。周壁溝を巡らし、北西コーナー付近には貯蔵穴と考えられる直径50cm、深さ40cmの円形の土坑を掘っている。遺物は堆積土の中・上層から土師器の小型丸底壺・小型甕・高坏が出土している。また堆積土には若干炭が混じっている。床面付近での出土遺物がないため正確な時期はわからないが、上記の遺物から布留式併行期と考えられる。

ＳＢ02

ＳＢ02はＳＢ01に切られている多角形竪穴住居址である。東側が調査区外に出ているため全体の形状、規模はわからないが１辺５m、直径９～10mの六角形住居址と考えられる。遺構面からの深さは55cmを測る。壁沿いには幅１mのベッド状遺構が存在し周壁溝を巡らす。床面には炭が広がっており焼失家屋である。コーナー付近に２基の柱穴が確認されているため、主柱穴は６基と思われる。北辺付近に直径75cm、深さ30cmと直径55cm、深さ15cmの２つの土坑を掘っている。いずれも貯蔵穴と考えられる。床面から土師器の甕、高坏等が出土しており、これらの遺物から古墳時代前期の庄内式併行期と考えられる。また、床面から桃の種子が出土している。

fig.366
調査地全景
（南から）

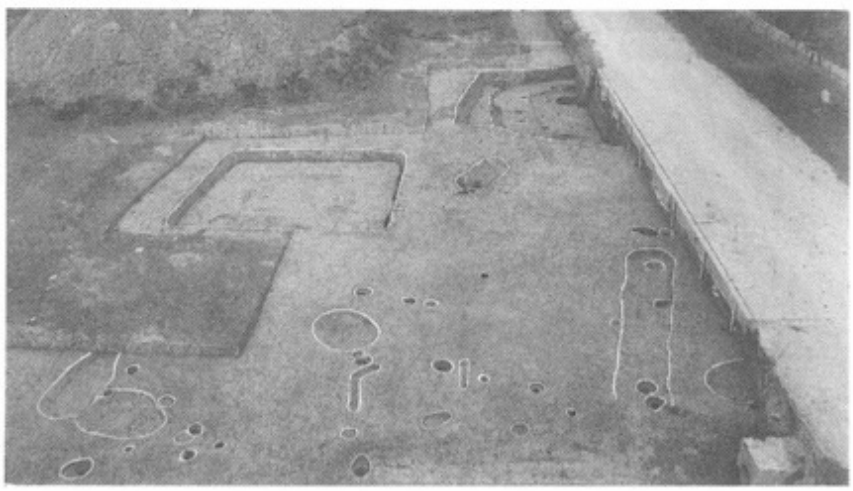

fig.367
ＳＢ01・02・05全景
（南から）

SB03　　SB03はSB06と河道に一部切られた長方形の竪穴住居址である。南北4.2m、東西5.5mで、深さは後世の水田造成時の削平を受け5cm～10cmと非常に浅い。主柱穴は2本であるが、河道のすぐそばで地盤が軟弱だったためか深さが80～100cmと非常に深い。柱材の痕跡も残っていた。南辺中央に浅い土坑がある。周壁溝は存在しない。出土遺物が土師器の細片のみのため時期は確定できないが、古墳時代前期～中期と思われる。

SB04　　SB04は隅円方形の竪穴住居址であるがSB06に切られており、また、ほとんどが調査区外に出ているため全体の規模はわからない。調査区内では北西コーナー部が検出された。調査区内では、周壁溝が存在する。また、貯蔵穴と思われる土坑が3基掘られている。出土遺物は土師器の細片のみであるが、甕の口縁の形態から古墳時代中期と考えられる。

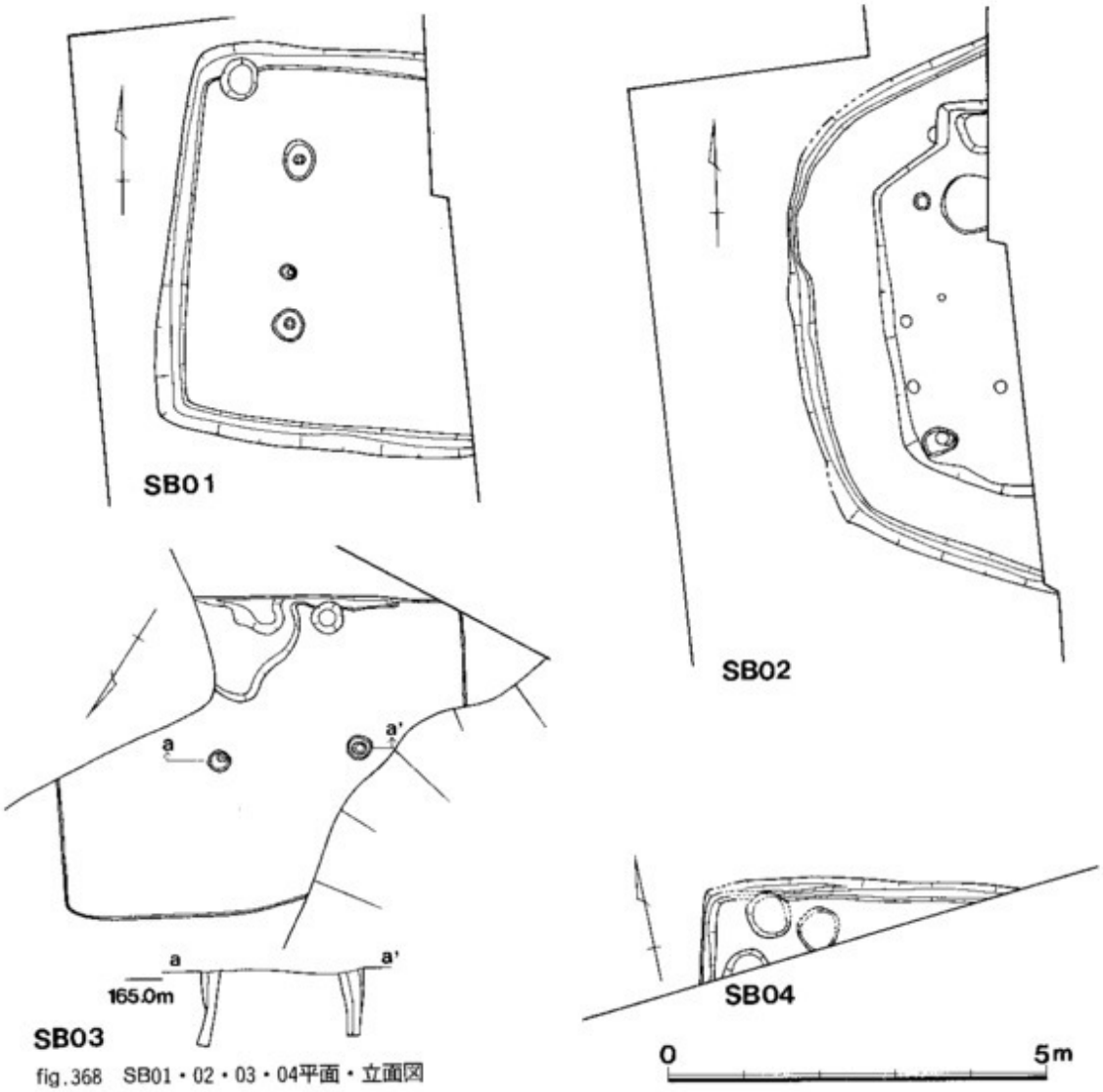

fig.368　SB01・02・03・04平面・立面図

fig..369
ＳＢ03・04・06
全景(北東から)

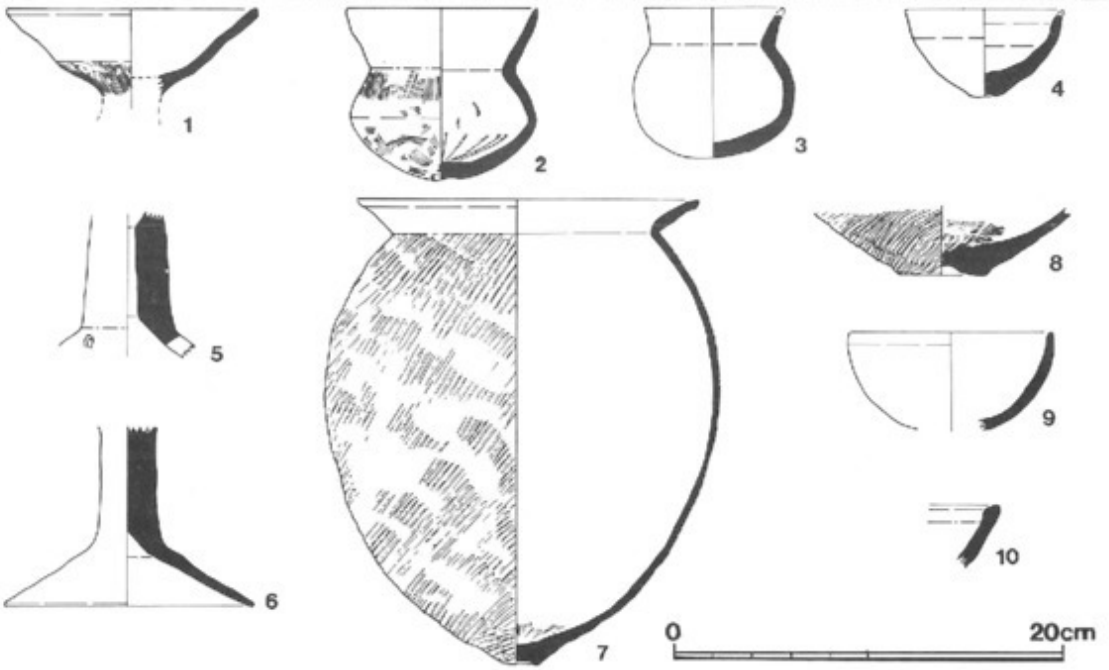

fig.370　竪穴住居址出土土器　1～4：ＳＢ01　5～8：ＳＢ02　9・10：ＳＢ04

ＳＢ05

ＳＢ05は東西4.5m、南北4.1mの隅円方形の竪穴住居址である。四辺にベッド状遺構が存在するが南辺の一部にはなく、また北西コーナーでは一段低いベッド状遺構になっている。柱穴は２基で東西を棟方向とする。周壁溝を部分的に巡らすが、周壁溝内や周壁溝のない所の壁沿いでは壁板の痕跡があった。中央に浅い土坑を有し、堆積土中には炭層があったが、土坑壁は焼けておらず炉であった可能性は低い。南西コーナー付近と南辺のベッド状遺構のとぎれる所に土坑が掘られている。

遺物は北側高床部床面から土師器の高坏と甕が、東高床部から土師器の小型丸底壺と甕が出土している。このうち甕は故意に割られたような状態で出土した。その他、堆積土の下層から甕が数個体出土している。また炭化材も若干あるが、炭の広がりはない。これらの遺物から、この住居址は古墳時代前期（布留式古段階）のものと考えられる。

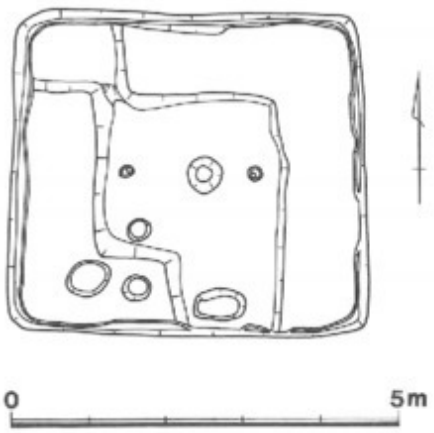

fig.371　ＳＢ05平面図

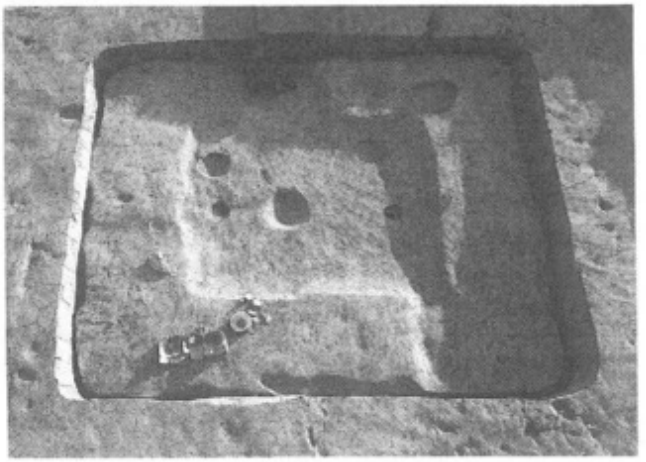

fig.372　ＳＢ05全景（北から）

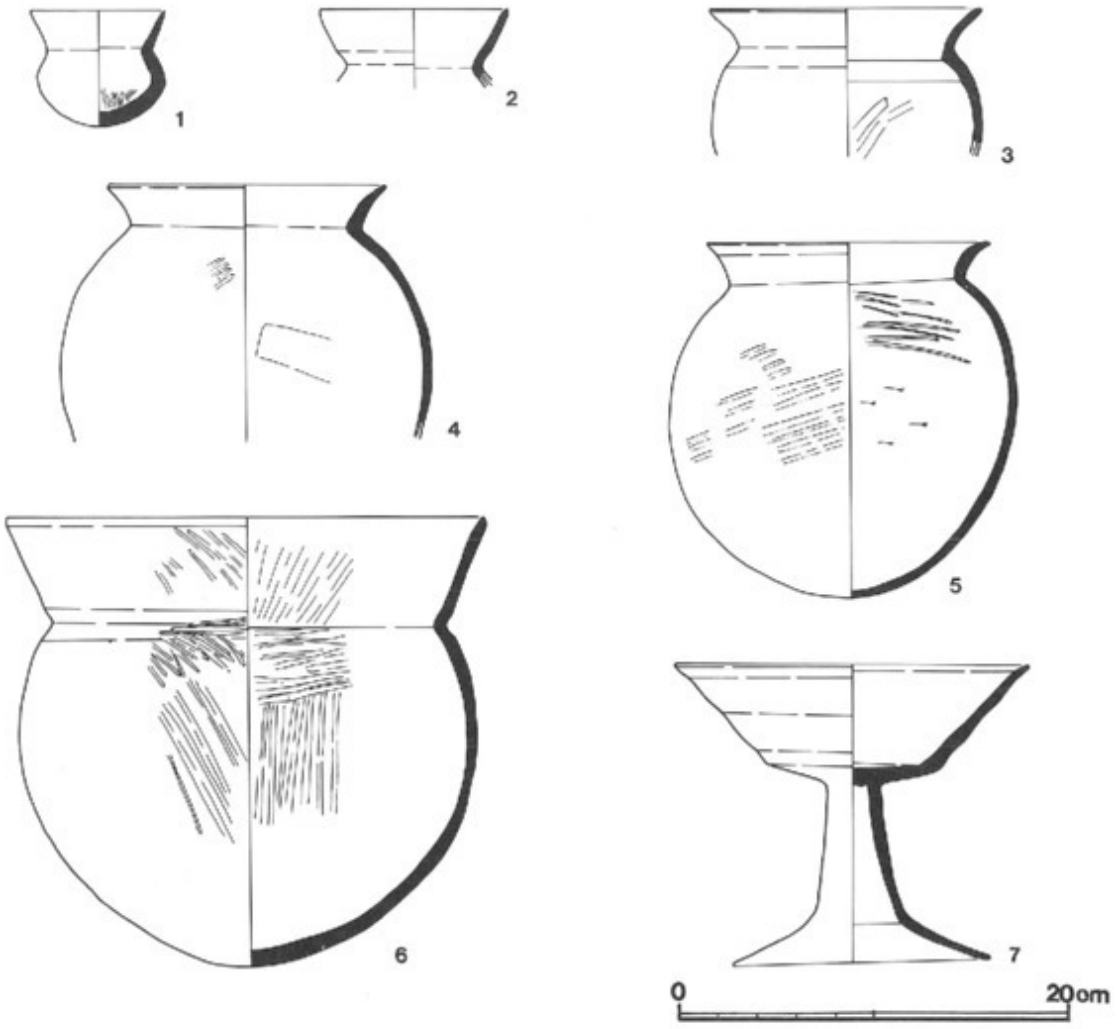

fig.373　ＳＢ05出土土器

SB06

ＳＢ06は東西7.2m、南北7.0mの方形竪穴住居址である。深さは後世の水田造成時の削平を受け、約５cm前後と浅い。床一面に炭、炭化材、焼土が広がっており、焼失家屋である。炭化材から東西に棟方向をとる上屋構造であったことがわかる。西辺中央に川原石の支柱がある竈が存在し、それと対峙する形で東辺付近に台石が置いてある。主柱穴は４基で、この住居址もＳＢ03と同様の理由で柱穴が非常に深く100cm～120cmである。

柱材が105cmも残存する柱穴もある。周壁溝は竈の付近以外に巡らしている。北西コーナー付近と東辺やや南寄りのところに貯蔵穴と考えられる深い土坑を掘っており、その中から炭化米が出土している。遺物は竈付近から土師器の甕・甑が、東辺付近からは須恵器の坏蓋・甕・埦・高坏、土師器の甕や土錘、叩き石並びに鉄製品が出土している。出土遺物等から古墳時代中期中頃(TK208型式期)と考えられる。

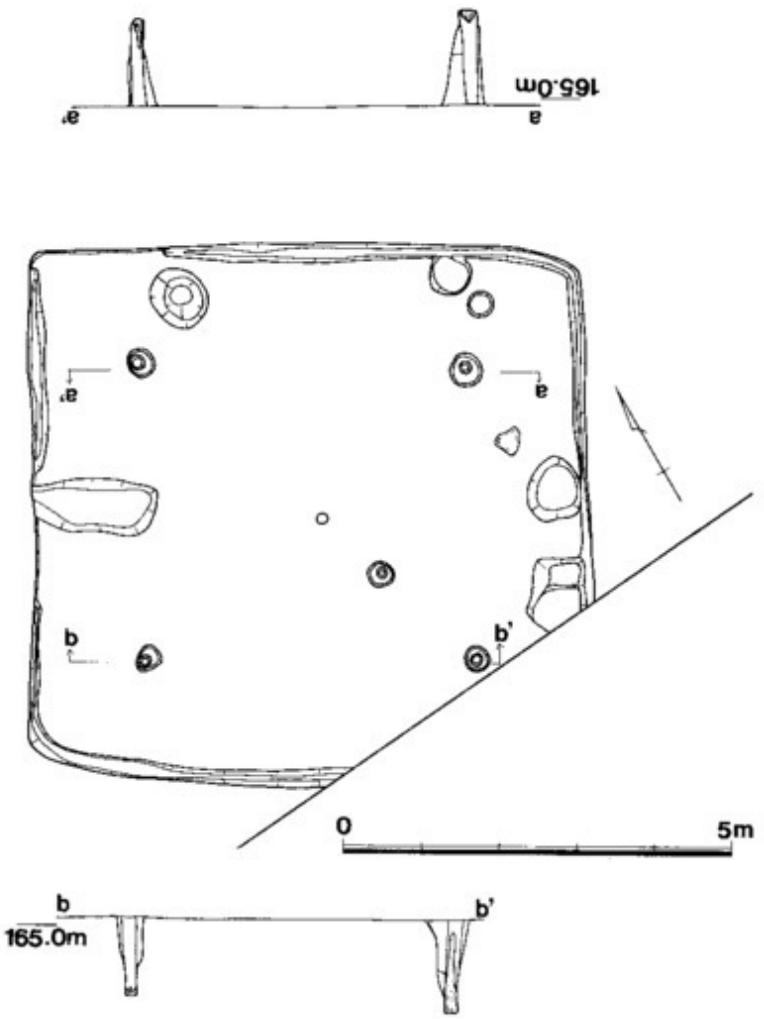

fig.374
ＳＢ06平面・立面図

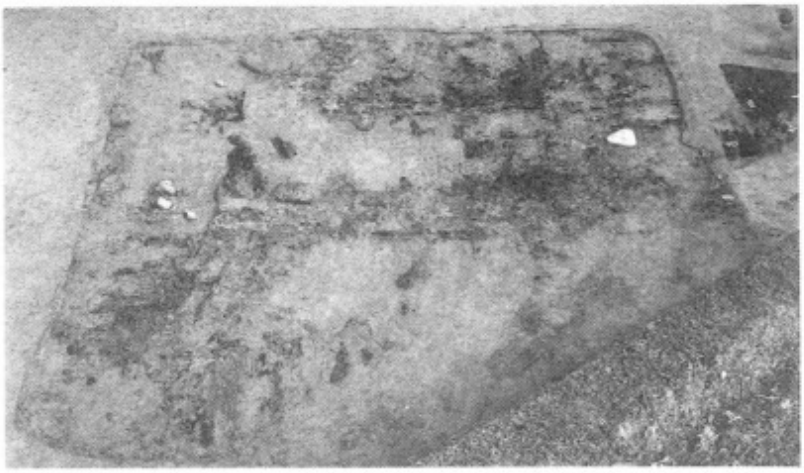

fig.375
ＳＢ06
炭化材検出状況
（南西から）

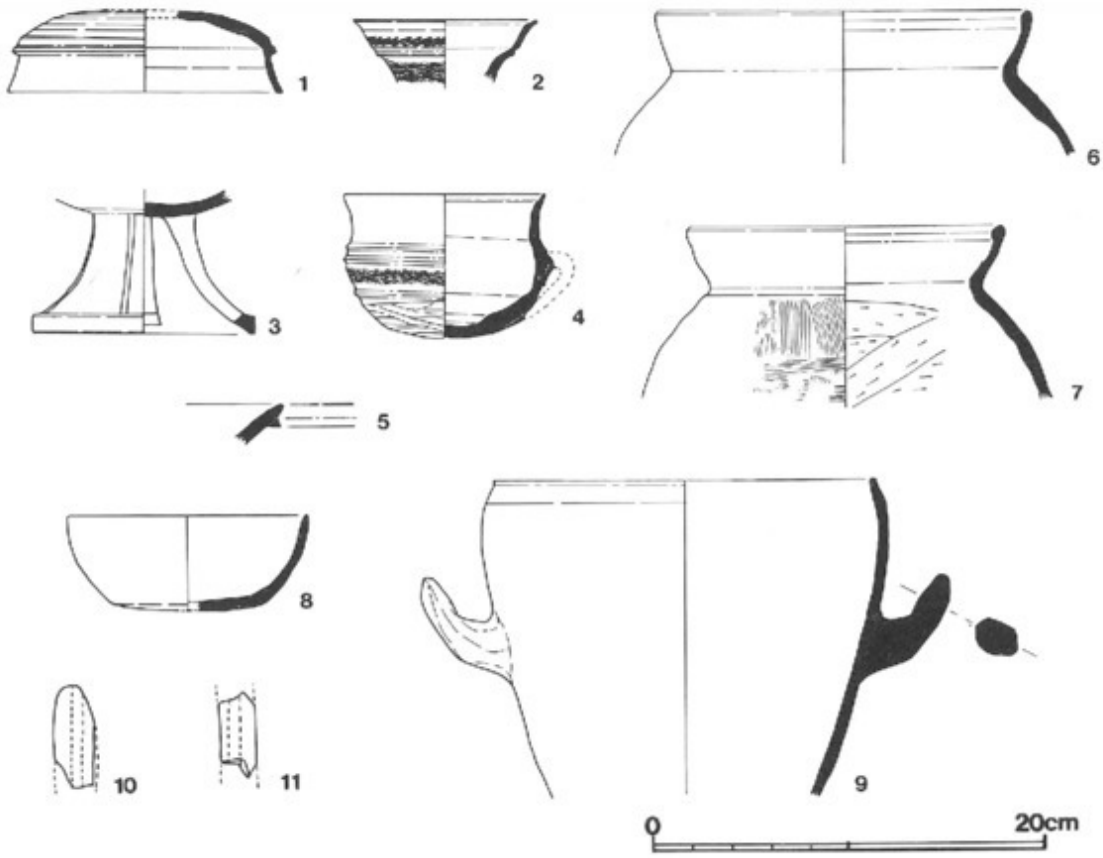

fig.376　ＳＢ06出土土器

土　坑

ＳＫ02は長さ２m、幅0.8m、深さ0.2mの長方形の土坑で、土師器の甕片が出土している。

ＳＫ06は長さ4.5m、幅1.9m、深さ0.6mの不定形の土坑で、ＳＢ06に切られている。堆積土中から土師器の甕・台付甕等が出土している。以上２基の土坑は庄内式併行期と考えられる。

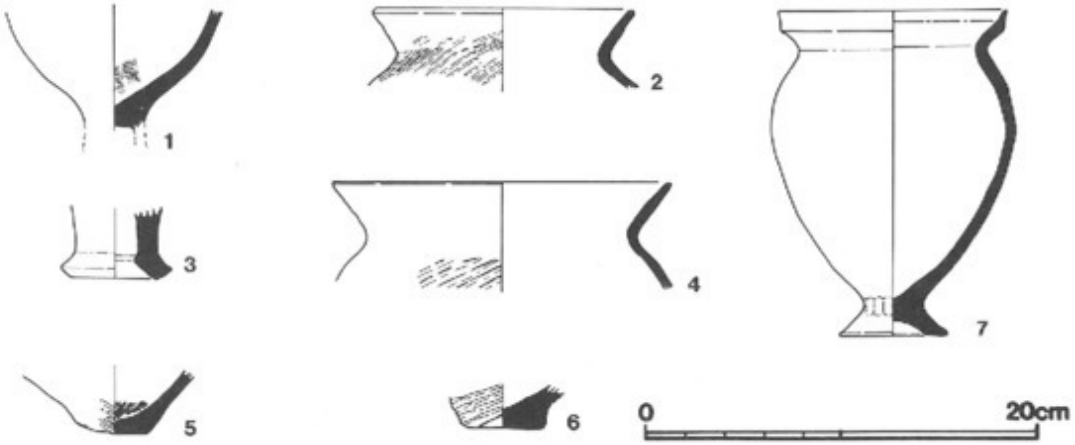

fig.377　土坑出土土器　1・2：ＳＫ02　3～7：ＳＫ06

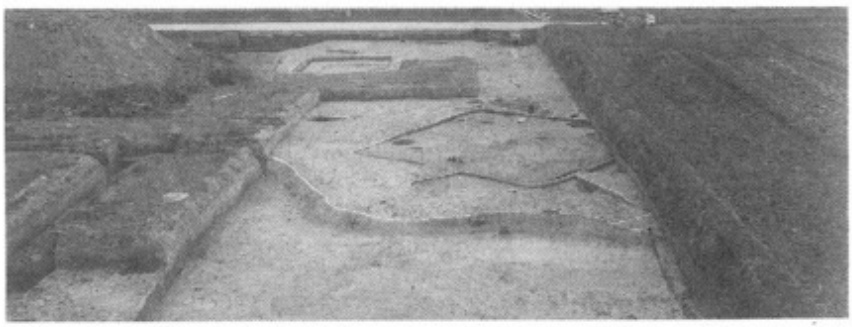

fig.378
河道の状況
（西から）

河　道　調査地の北側3/4では河道の跡が検出された。この河道は調査地の西側で幅50m、東側で16mと西から東にかけて急に狭くなっている。河道内は工事の影響する深度以下は、調査しなかったため堆積状況の詳細はわからないが、一部で深掘りした結果、当初は水の流れのある河川の本流であったが、ある時期流路が変わったため後背湿地となり、数回洪水等で流れていた時期はあるが、徐々に土砂が堆積していったようである。最終的に埋まったのは上層出土の遺物から考えて６世紀中頃と考えられる。断ち割りトレンチ内で、後背湿地化して以降に流路と同じ方向に２条の溝が掘られていることが確認された。この後背湿地が水田として利用されていた可能性は高いが、今回の調査では畦畔等は明らかにすることはできなかった。また、後背湿地になった時期や溝の時期は遺物等が出土せず不明である。河道（後背湿地）堆積土の上層からは須恵器の埦・坏身、土師器の甕・小型丸底壺、碧玉製管玉等が出土している。またこの河道最上層には奈良時代から平安時代の水田耕土層が存在する。

遺物包含層　遺物包含層からは古墳時代～室町時代の土器が出土している。その内、鎌倉時代の須恵器埦の外面に花押とひらがな（文字不明）が書かれたものが存在する。